

**IBM® WebSphere® Commerce
for Linux®**



インストール・ガイド

バージョン 5.4

**IBM® WebSphere® Commerce
for Linux®**



インストール・ガイド

バージョン 5.4

ご注意

本書の情報およびそれによってサポートされる製品を使用する前に、179 ページの『特記事項』に記載する一般情報をお読みください。

本書の内容は、新版で特に指定のない限り、IBM® WebSphere Commerce Professional Edition and Business Edition for Linux バージョン 5.4 以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。製品のレベルにあった版を使用していることをご確認ください。

本マニュアルに関するご意見やご感想は、次の URL からお送りください。今後の参考にさせていただきます。

<http://www.ibm.com/jp/manuals/main/mail.html>

なお、日本 IBM 発行のマニュアルはインターネット経由でもご購入いただけます。詳しくは

<http://www.ibm.com/jp/manuals/> の「ご注文について」をご覧ください。

(URL は、変更になる場合があります)

原典： IBM® WebSphere® Commerce for Linux®
Installation Guide
Version 5.4

発行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担当： ナショナル・ランゲージ・サポート

第1刷 2002.6

この文書では、平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、および平成角ゴシック体™W7を使用しています。この(書体*)は、(財)日本規格協会と使用契約を締結し使用しているものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

注* 平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、
平成角ゴシック体™W5、平成角ゴシック体™W7

© Copyright International Business Machines Corporation 1996, 2002. All rights reserved.

© Copyright IBM Japan 2002

目次

第 1 部 始める前に 1

第 1 章 WebSphere Commerce へようこそ 3

本書の表記規則	3
デフォルトのインストール・パス	4
WebSphere Commerce に付属する製品	4
サポートされている Web ブラウザー	5
WebSphere Commerce で使用されるポート番号	6
WebSphere Commerce で使用されるロケール	6
ユーザー ID、パスワード、および Web アドレスの早見表	7

第 2 章 インストール前の要件 11

知識に関する要件	11
前提条件となるハードウェア	11
前提条件となるソフトウェア	12
その他の要件	12

第 2 部 DB2 Universal Database のインストール 15

第 3 章 IBM DB2 Universal Database

7.1.0.60 のインストール 17

インストール前のステップ	17
インストール手順	17
DB2 クライアントのインストール	21
DB2 フィックスパックのインストール	21
jdbc2 を使用するためのデータベース・マネージャー構成	22
WebSphere Application Server データベースの作成	22
データベースのローカル作成	23
データベースのリモート作成	23
WebSphere Application Server データベースへの接続の確認	24
次のステップ	24

第 3 部 IBM HTTP Server のインストール 25

第 4 章 WebSphere Commerce のリモート側での IBM HTTP Server のインストールおよび構成 27

インストール手順	27
IBM HTTP Server 管理者用パスワードの作成	28
IBM HTTP Server のセットアップ	29
WebSphere Application Server フィックスパックおよび eFix のインストール	30
次のステップ	31

第 4 部 必要な WebSphere Commerce コンポーネントのインストール 33

第 5 章 WebSphere Application Server のインストール 35

この章のチェックリスト	35
WebSphere Application Server と IBM HTTP Server を同じマシン上にインストールする	35
IBM HTTP Server 管理者用パスワードの作成	38
IBM HTTP Server 管理サーバーのセットアップ	38
WebSphere Application Server をインストールしてリモート Web サーバーとともに使用する	39
WebSphere Application Server フィックスパックおよび eFix のインストール	41
インストール内容のテスト	43
次のステップ	44

第 6 章 WebSphere Commerce 5.4 のインストール 45

インストール手順	45
次のステップ	46

第 7 章 IBM WebSphere Payment Manager のインストール 47

インストールの前提条件	47
ソフトウェア要件	47
Payment Manager のインストール前に	48
Payment Manager のインストール	49

リモート・マシンでの Payment Manager の構成	51
次のステップ	52

第 5 部 WebSphere Commerce インスタンスの構成 53

第 8 章 構成前のステップ	55
インストール後スクリプトの実行	55
WebSphere Application Server の開始	56
次のステップ	56

第 9 章 構成マネージャーによるインスタンスの作成または変更 57

この章のチェックリスト	57
構成マネージャーの起動	58
インスタンス作成ウィザード	59
インスタンス	59
データベース	60
言語	61
Web サーバー	62
WebSphere	63
Payment Manager	64
ログ・システム	65
メッセージング	65
オークション	66
インスタンス作成の開始	66
インスタンス作成の検査	67
インスタンスの開始と停止	67
構成の追加オプション	68
インスタンス・プロパティ	68
コンポーネント	81
保護パラメーター	82
レジストリー	82
オークション	83
外部サーバー・リスト	83
Commerce アクセラレーター	83
ログ・システム	84
キャッシング・サブシステム	84
ストア・サービス構成	84
トランスポート	85
ライセンス・ユーザー管理	86
次のステップ	86

第 10 章 構成後のステップ 87

ローカル Web サーバーの構成後のステップ	87
------------------------	----

テスト用セキュリティ鍵ファイルの作成	87
Payment Manager を WebSphere Commerce とともに作動するように構成する	88
JavaServer Pages ファイルのコンパイル	90
リモート Web サーバーの構成後のステップ	90
テスト用に SSL を使用可能にする	91
IBM HTTP Server インストールの完了	92
Payment Manager を WebSphere Commerce とともに作動するように構成する	95
JavaServer Pages ファイルのコンパイル	96
次のステップ	97

第 6 部 オプション構成 99

第 11 章 サンプル・ストア・アーカイブからストアを作成する 101

ストア・アーカイブの作成	102
ストア・アーカイブの発行	103
ストア・サービスからストア・アーカイブを発行する	104
ストアにテスト・オーダーを発行する	106

第 12 章 IBM HTTP Server との実動用に SSL を使用可能にする 107

セキュリティについて	107
実動用のセキュリティ鍵ファイルを作成する	108
認証局からセキュアな証明書を要求する	109
Equifax ユーザー	109
VeriSign ユーザー	109
実動鍵ファイルを受け取って、現行鍵ファイルとして設定する	109
実動鍵ファイルのテスト	110

第 13 章 複数の WebSphere Commerce インスタンスの作成 111

仮想ホスト名を使用する複数のインスタンス	111
前提条件	111
複数インスタンスの作成	112
インスタンスの開始	113

第 14 章 WebSphere Application Server のセキュリティを使用可能にする 117

始める前に	117
LDAP ユーザー・レジストリーを使用してセキュリティを使用可能にする	117

オペレーティング・システム・ユーザー・レジストリーを使用してセキュリティーを使用可能にする	119
WebSphere Commerce EJB セキュリティーを使用不可にする	120
WebSphere Commerce セキュリティー・デプロイメント・オプション	121

第 15 章 複製	123
水平複製	123
垂直複製	126

第 16 章 単一サインオン	129
前提条件	129
単一サインオンの使用可能化	129

第 7 部 管理用タスク 133

第 17 章 WebSphere Commerce コンポーネントの開始と停止	135
WebSphere Commerce の開始と停止	135
WebSphere Application Server の開始と停止	135
IBM HTTP Server の開始と停止	136
DB2 Universal Database の開始と停止	137
Payment Manager の開始と停止	137
Payment Manager アプリケーション・サーバーの開始	138
Payment Manager の開始	138
Payment Manager ユーザー・インターフェースの開始	139
Payment Manager の停止	140
Payment Manager アプリケーション・サーバーの停止	140

第 18 章 パスワードの設定と変更	141
構成マネージャー・パスワードの変更	141
暗号化された WebSphere Commerce 管理コンソール・パスワードの判別	142
WebSphere Commerce 管理コンソール・パスワードの更新	142
WebSphere Commerce 管理コンソール・パスワードの変更	143
IBM HTTP Server 管理者パスワードの設定	144
SSL 鍵ファイル・パスワードの変更	144

第 19 章 通常の管理用タスク	145
-----------------------------------	------------

WebSphere Application Server へのポート・ホスト別名の追加	145
構成マネージャーの使用	145
WebSphere Commerce インスタンスの更新	147
WebSphere Commerce インスタンスの削除	147
コマンド行での構成作業	149
WebSphere Application Server のオープン	149
WebSphere Commerce 管理コンソールの開始	150
IBM HTTP Server ホーム・ページへの接続	151
IBM HTTP Server での仮想ホスト名の使用	151
wasuser ユーザー ID へのデータベース特権の追加	152
Payment Manager のセットアップ	152
Payment Manager カセットの使用	152
Payment Manager 管理者役割	153
Payment Manager マシンのセットアップ	154

第 8 部 付録 155

付録 A. WebSphere Commerce コンポーネントのアンインストール	157
Payment Manager のアンインストール	157
WebSphere Commerce のアンインストール	157
WebSphere Application Server および IBM SDK for Java のアンインストール	158
IBM HTTP Server のアンインストール	159
DB2 Universal Database のアンインストール	160
WebSphere Commerce コンポーネントの再インストール	162

付録 B. トラブルシューティング	163
ダウンロード可能なツール	163
WebSphere Commerce Installation and Configuration Checker	163
ログ・ファイル	164
トラブルシューティング	164
WebSphere Commerce のインストールの問題	164
WebSphere Application Server の問題	165
データベースの問題	165
Web サーバーの問題	167
WebSphere Commerce の問題	168
Payment Manager の問題	168

付録 C. 詳細情報の入手方法	171
WebSphere Commerce 情報	171

オンライン・ヘルプの使用	171
印刷可能な文書の調べ方	171
WebSphere Commerce Web サイトの閲覧	171
IBM HTTP Server 情報	172
Payment Manager 情報	172
WebSphere Application Server	173
DB2 Universal Database 情報	173
その他の IBM 資料	173

付録 D. プログラム仕様と所定稼働環境	175
特記事項	179
商標	181
索引	183

第 1 部 始める前に

第 1 部の各章では、WebSphere Commerce の基本的な解説を述べてから、WebSphere Commerce のインストールを正常に完了するのに必要な前提条件のハードウェア、ソフトウェア、必要な知識、およびユーザー権限について説明します。各章に述べられているすべての要件がシステムで確実に満たされていれば、インストールを完了するための作業がかなり容易になります。

WebSphere Commerce のどのコンポーネントをインストールする場合でも、以下の章を事前に完了している必要があります。

- 3 ページの『第 1 章 WebSphere Commerce へようこそ』
- 11 ページの『第 2 章 インストール前の要件』

第 1 章 WebSphere Commerce へようこそ

本書は、WebSphere Commerce 5.4 for Linux のインストールと構成の方法について説明しています。対象となる読者は、システム管理者など、インストール作業と構成作業を実行する人です。

WebSphere Commerce Suite バージョン 5.1 がすでにインストールされている場合、*WebSphere Commerce マイグレーション・ガイド* に説明されているマイグレーションのステップに従ってください。この資料は、WebSphere Commerce Web ページの『Technical Libraries』セクションで入手できます。

最終的な製品に対する変更について知るために、WebSphere Commerce Disk 1 CD のルート・ディレクトリーにある README ファイルを参照してください。さらに、このマニュアルのコピーおよび更新版は、以下の WebSphere Commerce Web サイトの Library → Technical Library セクションから PDF ファイルの形式で入手できます。

- Business Edition:

http://www.ibm.com/software/webservers/commerce/wc_be/lit-tech-general.html

- Professional Edition:

http://www.ibm.com/software/webservers/commerce/wc_pe/lit-tech-general.html

本書の表記規則

本書では以下の強調表示規則を使用します。

- **太文字**は、コマンドまたは、フィールド名、アイコン、メニュー選択などのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) コントロールを示します。
- **モノスペース (Monospace)** は、示されているとおりに入力するテキスト例、ファイル名、ディレクトリー・パスおよび名前を示します。
- **イタリック** は、語を強調するために使用します。イタリックは、ご使用のシステムの該当する値に置換しなければならない名前も示します。以下の名前が出てきたら、説明するとおりに、ご使用のシステムの値に置換してください。

host_name

WebSphere Commerce Web サーバーの完全修飾ホスト名 (例えば、`server1.torolab.ibm.com` という完全修飾名)。

instance_name

作業対象の WebSphere Commerce インスタンスの名前。



このアイコンは、ヒント (作業を完了するために役立つ追加情報) を表すマークです。

重要

このセクションは、特に重要な情報を強調しています。

警告

このセクションは、データを保護するために意図された情報を強調しています。

デフォルトのインストール・パス

このマニュアルでインストール・パスについて述べられている場合、デフォルトのパス名として次のものを使用します。

/opt/WebSphere/CommerceServer

WebSphere Commerce のインストール・パス

/usr/IBMdb2/V7.1

IBM DB2 Universal Database 7.1.0.60 のインストール・パス

/opt/IBMHTTPServer

IBM HTTP Server 1.3.19.1 のインストール・パス

/opt/WebSphere/AppServer

WebSphere Application Server 4.0.2 のインストール・パス

/usr/IBMdb2tx/V7.1

IBM DB2 Text Extender 7.1 のインストール・パス

/opt/PaymentManager

IBM WebSphere Payment Manager 3.1.2 のインストール・パス

WebSphere Commerce に付属する製品

WebSphere Commerce には以下の製品がパッケージされています。

- WebSphere Commerce コンポーネント
 - WebSphere Commerce Server
 - WebSphere Commerce Accelerator
 - WebSphere Catalog Manager
 - WebSphere Commerce 管理コンソール

- 商品アドバイザー
- Blaze Rules Server および Blaze Innovator Runtime
- Macromedia LikeMinds クライアント
- IBM DB2 Universal Database 7.1.0.60
- IBM HTTP Server 1.3.19.1
- WebSphere Application Server 4.0.2
- IBM WebSphere Payment Manager 3.1.2。これには、以下のものが含まれます。
 - Payment Manager SET Cassette 3.1.2
 - Payment Manager Cassette for CyberCash 3.1.2
 - Payment Manager Cassette for VisaNet 3.1.2
 - Payment Manager Cassette for BankServACH 3.1.2
- IBM WebSphere Commerce Analyzer 5.4
- Brio Broadcast Server 6.2
- IBM SecureWay Directory Server 3.2.1
- Segue SilkPreview 1.0™
- WebSphere Commerce 5.4 Recommendation Engine powered by LikeMinds 5.2.1™
- QuickPlace 2.9.8
- Sametime 2.5

サポートされている Web ブラウザー

WebSphere Commerce のツールとオンライン・ヘルプには、WebSphere Commerce のマシンと同じネットワーク上にある Windows® オペレーティング・システムを実行中のマシンにおいて、Microsoft® Internet Explorer 5.5 を使用してのみアクセスできます。Internet Explorer は、5.50.4522.1800 のフル・バージョンのもの (Internet Explorer 5.5 Service Pack 1 およびインターネット・ツール) あるいはそれ以降のもので、Microsoft 社による最新の重要なセキュリティー上の更新がなされているものを使用する必要があります。それより前のバージョンでは、WebSphere Commerce のツールが完全にはサポートされていません。

ショッパーは、以下のいずれかの Web ブラウザーを使用して Web サイトにアクセスできます。これらは、すべて WebSphere Commerce でテスト済みです。

- Netscape Communicator 4.6 以降でサポートされている Netscape Navigator のすべてのバージョン (Netscape Navigator 4.04 および 4.5 を含む)
- Macintosh 用の Netscape Navigator 3.0 および 4.0、以降
- Microsoft Internet Explorer 4 および 5、またはそれ以降
- AOL 5 および 6、またはそれ以降

WebSphere Commerce で使用されるポート番号

以下に、WebSphere Commerce またはそのコンポーネント製品によって使用されるデフォルトのポート番号のリストを示します。 WebSphere Commerce 以外のアプリケーションでは、これらのポートを使用しないようにしてください。システムにファイアウォールが構成されている場合には、これらのポートがアクセス可能になっていることを確認してください。

ポート番号	使用するソフトウェア
80	IBM HTTP Server 非セキュア Web サーバー
389	Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) Directory Server
443	IBM HTTP Server セキュア Web サーバー
900	WebSphere Application Server ブートストラップ
1099	WebSphere Commerce 構成マネージャー
2222	非 root ユーザーとして WebSphere Application Server 管理コンソールにアクセスする際のデフォルト・ポート。
8000	WebSphere Commerce Tools
8080	WebSphere Test Environment for VisualAge [®] for Java [™]
9000	WebSphere Application Server Location Server
16999	WebSphere Commerce Cache Daemon (デフォルト)
50000	DB2 [®] コネクト (デフォルト)
50001	DB2 割り込み (デフォルト)

WebSphere Commerce で使用されるロケール

WebSphere Commerce では、有効な Java のロケールだけが使用されます。使用する言語に該当するロケールがシステムにインストールされていることを確認してください。また、ロケールに関係するすべての環境変数には、WebSphere Commerce でサポートされているロケールを含めるようにしてください。 WebSphere Commerce でサポートされているロケールのコードは、以下の表に示すとおりです。

言語	ロケール・コード	LC_ALL 値
ドイツ語	de_DE	de_DE
英語	en_US	en_US
スペイン語	es_ES	es_ES
フランス語	fr_FR	fr_FR
イタリア語	it_IT	it_IT

日本語	Ja_JP	Ja_JP
韓国語	ko_KR	ko_KR
ポルトガル語 (ブラジル)	pt_BR	pt_BR
中国語 (簡体字)	zh_CN	zh_CN
中国語 (繁体字)	zh_TW	zh_TW

RedHat Linux 7.2 オペレーティング・システム上で稼働する WebSphere Commerce 5.4 では、以下のロケールはサポートされていません。

- 中国語 (簡体字)
- 中国語 (繁体字)

Suse Linux Enterprise Server 7 オペレーティング・システム上で稼働する WebSphere Commerce 5.4 では、以下のロケールはサポートされていません。

- 日本語
- 韓国語
- 中国語 (簡体字)
- 中国語 (繁体字)

ロケールを調べるには、次のコマンドを実行します。

```
echo $LANG
```

使用するロケールがサポートされていない場合には、root ユーザーとして次のコマンドを実行することによって、ロケールのプロパティを変更してください。

```
LANG=xx_XX
export LANG
```

xx_XX は、上記の表に示されている 4 文字のロケール・コードです。大文字小文字の別は、表のとおりでなければなりません。

ユーザー ID、パスワード、および Web アドレスの早見表

WebSphere Commerce 環境での管理には、さまざまなユーザー ID が必要です。それらのユーザー ID と、それに必要な権限のリストを、次の表に示します。WebSphere Commerce のユーザー ID に対して、デフォルトのパスワードが識別されます。

構成マネージャーのユーザー ID

構成マネージャー・ツールのグラフィカル・インターフェースを使用すれば、WebSphere Commerce の構成方法を変更できます。構成マネージャーのデフォルト・ユーザー ID およびパスワードは、webadmin および webibm です。構成マネージャーには、WebSphere Commerce マシンから、または WebSphere Commerce と同じネットワーク上の任意のマシンからアクセスできます。

IBM HTTP Server のユーザー ID

IBM HTTP Server を使用する場合、Web サーバーのホーム・ページには、Web ブラウザーをオープンし、以下の Web アドレスを入力することによってアクセスできます。

```
http://host_name
```

Web サーバーをカスタマイズした場合、ホスト名の後に Web サーバーのフロントページの名前を入力する必要があります。

WebSphere Commerce インスタンス管理者

インスタンス管理者のユーザー ID とパスワードは、以下の WebSphere Commerce ツールに適用されます。

- WebSphere Commerce Accelerator。Windows オペレーティング・システムが実行されているリモート・マシンから WebSphere Commerce Accelerator にアクセスするには、Internet Explorer Web ブラウザーをオープンしてから、以下の Web アドレスを入力します。

```
https://host_name:8000/accelerator
```

- WebSphere Commerce 管理コンソール。Windows オペレーティング・システムが実行されているリモート・マシンから WebSphere Commerce 管理コンソールにアクセスするには、Internet Explorer Web ブラウザーをオープンしてから、以下の Web アドレスを入力します。

```
https://host_name:8000/adminconsole
```

- ストア・サービス。ストア・サービスのページには、Web ブラウザーをオープンし、以下の Web アドレスを入力することによってアクセスできます。

```
https://host_name :8000/storeservices
```

- 組織管理コンソール。組織管理コンソールには、Web ブラウザーをオープンし、以下の Web アドレスを入力することによってアクセスできます。

```
https://host_name/orgadminconsole
```

インスタンス管理者のデフォルト・ユーザー ID は wcsadmin、デフォルト・パスワードは wcsadmin です。

注: wcsadmin ユーザー ID は、決して除去しないでください。また、それには常にインスタンス管理者の権限が付与されていなければなりません。

WebSphere Commerce では、ユーザー ID とパスワードが次の規則になっていることが必要です。

- パスワードの長さは最低 8 文字。
- パスワードには、少なくとも 1 つの数字が含まれなければなりません。
- パスワードには、同じ文字が 4 回を超えて出現してはなりません。
- パスワードには、同じ文字を 3 回を超えて繰り返すことはできません。

Payment Manager 管理者

Payment Manager をインストールすると、WebSphere Commerce 管理者 ID `wcsadmin` に Payment Manager 管理者役割が自動的に割り当てられます。Payment Manager の Realm Class を `WCSRealm` にまだ切り替えていない場合、これを行うには、47 ページの『第 7 章 IBM WebSphere Payment Manager のインストール』の指示に従ってください。

Payment Manager 管理者役割が割り当てられているユーザー ID では、Payment Manager の制御と管理が可能です。

第 2 章 インストール前の要件

この章では、WebSphere Commerce をインストールする前に行う必要のあるステップについて説明します。ここで説明されているステップを実行するには、root ユーザー・アクセスが必要です。

知識に関する要件

WebSphere Commerce をインストールおよび構成するには、以下のことに関する知識が必要です。

- 使用するオペレーティング・システム
- インターネット
- Web サーバーの運用と保守
- DB2 Universal Database
- オペレーティング・システムの基本的なコマンド

ストアまたはモールを作成しカスタマイズするには、以下のことに関する知識が必要です。

- WebSphere Application Server
- DB2 Universal Database
- HTML および XML
- 構造化照会言語 (SQL)
- Java のプログラミング

ストアまたはモールをカスタマイズする方法の詳細については、*WebSphere Commerce プログラマーズ・ガイド* を参照してください。WebSphere Commerce と WebSphere Commerce Studio には、いずれもこれらのマニュアルのコピーが付属しています。

前提条件となるハードウェア

WebSphere Commerce 5.4 をインストールする前に、以下の最低のハードウェア要件を満たしていることを確認しておかなければなりません。

Pentium®III 733 MHz (実稼働環境では 733 MHz 以上を推奨) を搭載した専用の IBM 互換のパーソナル・コンピューターで、以下のハードウェアを搭載する必要があります。

- プロセッサ当たり 768 MB 以上のランダム・アクセス・メモリー (RAM)
- 4 GB 以上のフリー・ディスク・スペース

- プロセッサあたり 1 GB 以上のページング・スペース
- CD-ROM ドライブ
- グラフィックス表示可能モニター
- TCP/IP プロトコルがサポートするローカル・エリア・ネットワーク (LAN) アダプター。

前提条件となるソフトウェア

WebSphere Commerce をインストールする前に、以下の最低のソフトウェア要件を満たしていることを確認しておかなければなりません。

- システムに Web ブラウザーがインストール済みであることを確認してください。
- Red Hat Linux 7.2
- SLES 7(SuSE Linux Enterprise Server 7.0)
- システムで以下のパッケージが使用できることを確認してください。使用できるかどうかは、次のコマンドを実行して調べることができます。

```
rpm -qa | grep package_name
```

これらのパッケージがインストールされていない場合は、WebSphere Commerce のインストールを進める前に、これらのパッケージをインストールする必要があります。

Red Hat Linux 7.2 の場合:

- pdksh-5.2.14-12
- ncurses4-5.0-2

SLES 7(SuSE Linux Enterprise Server 7.0):

- pdksh-5.2.14-12

その他の要件

さらに、以下のことを実行する必要があります。

1. マシン上でロータス ノーツ (Lotus® Notes™) などのサーバーが実行されている場合には、そのサーバーを停止します。マシン上に現在ポート 80、ポート 443、またはポート 8000 を使用している Web サーバーがあるなら、それを無効にしてください。
2. WebSphere Commerce では IP アドレスとホスト名の両方が使用されるため、システムの IP アドレスがホスト名に対応付けされていなければなりません。IP アドレスを判別するには、コマンド・ウィンドウを開いて次のように入力します。正しい IP アドレスで応答があれば、正常に設定されています。
3. IBM HTTP Server を Web サーバーとして使用する場合には、Web サーバーのホスト名に下線 (_) が含まれないようにしてください。IBM HTTP Server は、ホスト名に下線が含まれるマシンをサポートしていません。

4. Apache Web サーバーがシステムにインストールされている場合は、それをアンインストールしてください。Apache がシステムにインストールされているかどうかを調べるには、コマンド・プロンプトから以下のコマンドを実行してください。

```
rpm -qa|grep apache
```

システム上にある Apache パッケージのリストが表示されます。それらのパッケージをアンインストールするには、表示されるパッケージごとに以下のコマンドを実行します。

```
rpm -e --nodeps package_name
```

package_name は、最初のコマンドの出力に表示されたとおりの名前です。

第 2 部 DB2 Universal Database のインストール

WebSphere Commerce for Linux は、DB2 データベースのみをサポートします。他の WebSphere Commerce コンポーネントをインストールする前に、DB2 をインストールする必要があります。データベースは、他の WebSphere Commerce コンポーネントと同じマシン上にインストールすることも、またはリモート・マシンにインストールすることもできます。データベースのインストールに関する本章を終えたら、25 ページの『第 3 部 IBM HTTP Server のインストール』に進んでください。

- 17 ページの『第 3 章 IBM DB2 Universal Database 7.1.0.60 のインストール』

第 3 章 IBM DB2 Universal Database 7.1.0.60 のインストール

この章では、IBM DB2 Universal Database 7.1.0.60 をインストールする方法および WebSphere Application Server のデータベースを作成する方法について説明します。この章のステップを完了するには、DB2 Universal Database CD が必要です。

インストール前のステップ

DB2 Universal Database をインストールする前に、以下を確認します。

- 使用するマシンから DB2 の以前のバージョンをアンインストールした場合、すべての DB2 ファイルが削除されていることを確認します。DB2 情報または DB2 関連のファイルがシステムに残っていると、DB2 のインストールあるいはインスタンスの作成が正常に行われない場合があります。
- リモート・データベース構成を使用する場合は、以下を確認します。
 - DB2 によって使用されるポートが使用可能である。DB2 のデフォルト・ポートは 50000 および 50001 です。
 - データベース・インスタンス所有者のユーザー名およびパスワードが、DB2 クライアントおよび DB2 サーバーの両方のマシンで同じである。

インストール手順

DB2 をインストールするには、以下のようになります。

1. ユーザー ID `root` でログインします。
2. マシンの CD-ROM ドライブに CD を挿入した後で DB2 Universal Database CD をマウントします。
3. ターミナル・ウィンドウで以下のコマンドを入力して、CD の DB2 インストール・ディレクトリーに切り替えます。

```
cd /CDROM_dir
```

`CDROM_dir` は、CD がマウントされているディレクトリーです。

4. DB2 をインストールするには、ターミナル・ウィンドウで以下のコマンドを入力して `db2setup` ユーティリティーを開始します。

```
./db2setup
```

注:

- a. db2setup ユーティリティは、Bourne Again (bash)、Bourne、および Korn の各シェルとともに動作します。他のシェルはサポートされません。
 - b. db2setup ユーティリティでは、インストール中のエラーを記録するトレース・ログを生成できます。トレース・ログを生成するには、./db2setup コマンドではなく ./db2setup -d コマンドを入力します。./db2setup -d コマンドによって、ログが /tmp/db2setup.trc に生成されます。
5. DB2 インストーラーが始動します。既に DB2 コンポーネントがシステムにインストールされている場合、「インストール」を選択します。選択が終わったら、db2setup プログラムは、現在の構成に関する情報を探するためにシステムをスキャンします。

注: DB2 のインストールが今回初めての場合は、db2setup プログラムが始動した後に、現行システム構成情報のスキャンが開始されます。DB2 インストーラーのウィンドウで「インストール」を選択する必要はありません。

6. 以下のようにして、選択項目を強調表示して「Enter」を押し、それらを選択します。
 - a. このマシンで WebSphere Commerce データベースを実行する場合は、「**DB2 UDB Enterprise Edition**」および「**DB2 Application Development Client**」を選択します。
 - b. このマシンが、異なるマシンにインストールされたデータベース・サーバーだけを使用する WebSphere Commerce サーバーになる場合、「**DB2 アドミニストレーション・クライアント**」および「**DB2 Application Development Client**」を選択します。
 - c. DB2 メッセージを英語以外の言語で表示する場合は、「**DB2 製品メッセージ**」の横の「**カスタマイズ**」を選択して、DB2 メッセージ・ウィンドウをオープンします。次に、使用する言語コードを強調表示してスペース・バーを押し、「**OK**」を強調表示して「**Enter**」を押しします。
 - d. HTML 形式の DB2 資料を英語以外の言語でインストールする場合は、「**DB2 製品ライブラリー**」の横の「**カスタマイズ**」を強調表示し、「Enter」を押して「**DB2 製品ライブラリー**」ウィンドウをオープンします。次に、使用する言語コードを強調表示してスペース・バーを押し、「**OK**」を強調表示して「**Enter**」を押しします。

DB2 インストーラー内で選択されたオプションは、アスタリスク (*) で示されません。

7. 選択が終了したら、「**OK**」を強調表示して「**Enter**」を押しします。
8. 「DB2 サービスの作成」ウィンドウが表示されます。「DB2 インスタンスの作成」を強調表示して「**Enter**」を押しします。DB2 インスタンスのサブウィンドウが表示されます。
9. 以下のようにフィールドに入力します。

ユーザー名

使用する DB2 インスタンス ID を入力します。(本書では、インスタンス ID *db2inst1* が例として使用されています。) インスタンス ID は、以下の基準を満たす必要があります。

- 長さは 8 文字以下です。
- 使用できる文字は A～Z、a～z、0～9、@、#、\$、および _ だけです。
- 先頭文字として下線 () は使用できません。
- USERS、ADMINS、GUESTS、PUBLIC、LOCAL は、大文字小文字に関係なく使用できません。
- IBM、SQL、SYS は、大文字小文字に関係なく、先頭の 3 文字として使用できません。

グループ名

他のユーザー ID 用に現在使用していない、グループ名を入力します。このグループは、自動的に DB2 インスタンスのシステム管理グループになり、管理者権限を与えられます。

パスワード

以下の基準を満たすパスワードを入力します。

- 長さは 8 文字以下です。
- 使用できる文字は A～Z、a～z、0～9、@、#、\$、および _ だけです。
- 先頭文字として下線 () は使用できません。

確認パスワード

同じパスワードを再び入力します。

他のすべてのフィールドのデフォルトを受け入れ、「OK」を強調表示し、「Enter」を押します。

10. DB2 アドミニストレーション・クライアントのみをインストールするよう選択した場合は、ステップ 11 (20 ページ) に進んでください。DB2 UDB Enterprise Edition をインストールするよう選択した場合は、以下のステップに従ってください。
 - a. 「隔離ユーザー」ウィンドウが表示されます。「OK」を強調表示し「Enter」を押して、すべてのデフォルトを受け入れます。
 - b. システム生成パスワードが使用されることを示す「注意」ウィンドウが表示されます。「OK」を強調表示して「Enter」を押します。
 - c. 「DB2 ウェアハウス制御データベース」ウィンドウが表示されます。「DB2 ウェアハウス制御データベースをセットアップしない」を選択し、「OK」を強調表示して「Enter」を押します。
 - d. 「DB2 サービスの作成」ウィンドウが表示されます。「OK」を強調表示して「Enter」を押します。

- e. 管理サーバーが作成されないことを示す警告メッセージは、「OK」を強調表示して「Enter」を押して無視してください。
11. インストールされるコンポーネントをリストした要約報告書が表示されます。「継続」を強調表示して「Enter」を押します。
 12. db2setup プログラムはコンポーネントをインストールし、指定したグループ内にインスタンス ID を作成します。プロセッサの速度によって、この処理に数分かかることがあります。インストール・プログラムが完了すると、正常に終了したかどうか「注意」ウィンドウに表示されます。「OK」を強調表示して「Enter」を押します。
 13. すべてのコンポーネントが正常にインストールされ、DB2 インスタンス ID が正常に作成されたことを確認するために、状況報告をスキャンします。「OK」を強調表示して「Enter」を押します。

重要:

db2setup が DB2 インスタンス ID を自動的に作成できない場合、以下のようにして、DB2 インスタンスを手動でセットアップしてください。

- a. 作成済みの DB2 Universal Database のユーザーおよびグループとそのホーム・ディレクトリーを除去します。
- b. 以下のように入力します。

```
cd /home/  
rm -r db2*
```

すべての DB2 Universal Database ファイルが削除されたことを確認します。

- c. DB2 Universal Database CD から db2setup を実行します。製品のインストールの代わりに「**インスタンスの作成**」を選択し、上記の説明のように必要なステップを完了します。

インストール・ログを表示すると、DB2 の試行ライセンスがインストールされたことを示すメッセージが表示される場合があります。このライセンスは、WebSphere Commerce をインストールすると、自動的に置き換えられます。

14. DB2 インストーラーのウィンドウをクローズするには、「クローズ」を強調表示して「Enter」を押します。
15. 管理サーバーが作成されないことを示すメッセージは、「OK」を強調表示して「Enter」を押して無視してください。
16. DB2 インストーラーを終了することを確認するには、「OK」を強調表示して「Enter」を押します。
17. cd / と入力して、ルート・ディレクトリーへ移動します。
18. unmount *CDROM_dir* と入力して、CD をアンマウントします。ここで、*CDROM_dir* は CD をマウントするときに指定したディレクトリーです。
19. DB2 Universal Database CD を除去します。

DB2 クライアントのインストール

DB2 サーバーが WebSphere Commerce とは別のマシン上にある場合、WebSphere Commerce マシンに DB2 アドミニストレーション・クライアントをインストールする必要があります。これを行うには、17 ページの『インストール手順』で説明したステップに従い、ステップ 6 (18 ページ) のデータベース・サーバーではなく、「**DB2 アドミニストレーション・クライアント**」および「**DB2 Application Development Client**」を選択します。

重要:

インスタンス ID とパスワードは、WebSphere Commerce と DB2 サーバー・マシンの両方で同じでなければなりません。

DB2 フィックスパックのインストール

データベースを作成する前に、以下のステップを使用して、クライアントおよびサーバーの両マシンの DB2 のレベルをアップグレードしなければなりません。

1. 次のように入力して、db2inst1 ユーザーに変更し、DB2 を停止します。

```
su - db2inst1
. /home/db2inst1/sqllib/db2profile
db2 force application all
db2 terminate
db2stop
db2licd end
exit
```

2. 以下のコマンドを実行して、稼働している DB2 プロセスがないことを確認します。

```
ps -ef|grep db2
```

稼働しているプロセスがあれば、kill コマンドを使用して終了させます。

3. WebSphere Commerce Disk 2 CD をマウントし、DB2 V7.2 FP6 ディレクトリーに移動します。

```
su - root
cd /CDROM_dir/Software_Patches/DB2_FP6
```

4. フィックスパックをインストールします。

```
cp FP6_U481413.tar /tmp
cd /tmp
tar -xvf FP6_U481413.tar
cd delta_install
./installFixPak
```

5. DB2 インスタンスを更新します。

```
/usr/IBMDB2/V7.1/instance/db2iupdt db2inst1
```

6. フィックスパックをインストールする前に作成された WebSphere Application Server または WebSphere Commerce のデータベースを使用する場合、既存データベースごとにファイルをバインドする必要があります。

```
su - db2inst1
db2start
cd /usr/IBMDB2/V7.1/bnd
db2 terminate
db2 CONNECT TO db_namedb2 BIND @db2ubind.lst BLOCKING ALL GRANT PUBLIC
db2 BIND @db2cli.lst BLOCKING ALL GRANT PUBLIC
db2 terminate
```

7. 次のように入力して、DB2 を再始動します。

```
su - db2inst1
db2start
```

jdbc2 を使用するためのデータベース・マネージャ構成

DB2 を使用してデータベースを作成する前に、DB2 サーバー・マシンで以下のステップを完了する必要があります。

1. 次のように入力して、db2inst1 ユーザーに変更します。

```
su - db2inst1
```

2. 次のファイルの最後に、以下の行を追加します。

- Red Hat Linux の場合: db2inst1 /home/db2inst1/.bashrc
- SuSE Linux Enterprise Server の場合: db2inst1 /home/db2inst1/.profile

```
./sqllib/java12/usejdbc2
EXTSHM=ON
export EXTSHM
db2set DB2ENVLIST=EXTSHM
```

3. ファイルを保管します。
4. db2stop と入力します。
5. db2start と入力します。
6. exit と入力します。

WebSphere Application Server データベースの作成

WebSphere Application Server をインストールする前に、WebSphere Application Server データベースを作成する必要があります。DB2 サーバーが WebSphere Commerce と同じマシンにあるかどうか、または DB2 からリモート側で WebSphere Commerce をインストールするかどうかに応じて、以下の適切なセクションのステップに従ってください。

データベースのローカル作成

WebSphere Commerce と同じマシンに DB2 サーバーを使用したデータベースを作成するには、以下のステップに従ってください。

1. ターミナル・ウィンドウで、以下のように入力します。

```
su - db2inst1
db2 create database WAS
```

ここで、*WAS* は、作成している WebSphere Application Server データベースの名前です。

2. 以下のように **db2 update db config** コマンドを使用して、アプリケーションのヒープ・サイズを設定します。

```
db2 update db config for WAS using applheapsz 512
```

3. データベースの作成が完了したら、次のように入力して DB2 をいったん停止してから開始します。

```
db2stop
db2start
```

4. 以下のように入力して、TCP/IP サービス名を判別します。

```
db2 get dbm cfg | grep -i svc
```

5. 以下のように入力して、WebSphere Application Server データベースを、リモート・データベースであるかのようにカタログ化します。

```
db2 catalog tcpip node node_name remote full_host_name server
      TCP/IP_service_name
db2 catalog database WAS as WASLOOP at node node_name
```

ここで、*node_name* はこのノードへ割り当てている名前、*full_host_name* はデータベース・サーバーの完全修飾ホスト名です。これらのコマンドは、読みやすいように行を分けて記載されていますが、入力は必ず 1 行で行ってください。

データベースのリモート作成

DB2 サーバーが WebSphere Commerce からリモートにある場合にデータベースを作成するには、以下のステップを完了してください。

1. WebSphere Application Server マシンで、ターミナル・ウィンドウをオープンします。
2. ターミナル・ウィンドウに以下のコマンドを入力します。

```
su - db2inst1
db2 catalog tcpip node node_name remote db_server_name server
      DB2_server_port
db2 attach to node_name user user_id using password
db2 create db WAS
db2 update db cfg for WAS using applheapsz 512
```

ここで、*node_name* はこのノードに割り当てる名前、*db_server_name* はデータベース・サーバーの完全修飾ホスト名、*DB2_server_port* は DB2 への接続に使用するポート (デフォルトの DB2 サーバー・ポートは 50000) です。これらのコマンドは、読みやすいように行を分けて記載されていますが、入力は必ず 1 行で行ってください。

3. DB2 サーバー・マシンで、以下のコマンドを実行します。

```
su - db2inst1
db2set DB2_RR_T0_RS=yes
db2set DB2BIDI=yes
db2set DB2_STPROC_LOOKUP_FIRST=true
```

4. ターミナル・ウィンドウで以下のように入力して、DB2 サーバー・マシン上で DB2 サーバーを再始動します。

```
db2stop
db2start
```

WebSphere Application Server データベースへの接続の確認

WebSphere Application Server データベースへの接続を確認するには、DB2 サーバー・マシンで以下のステップを完了します。

1. 必ず DB2 インスタンス所有者 *db2inst1* としてログインしてください。
2. 以下のように *db2 connect* コマンドを使用して、データベース *wasloop* へ接続します。

```
db2 connect to WASLOOP user db2inst1 using db2inst1_password
```

3. 正常な出力は、以下のようになります。

```
Database Connection Information
Database server          = DB2/Linux 7.2.4
SQL authorization ID    = DB2INST1
Local database alias    = WASLOOP
```

4. データベースから切断し、DB2 インスタンス所有者としてログアウトするには、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
db2 connect reset
exit
```

次のステップ

以上で IBM DB2 Universal Database 7.1.0.60 のインストールは完了しました。Web サーバーをインストールするには、25 ページの『第 3 部 IBM HTTP Server のインストール』を参照してください。

第 3 部 IBM HTTP Server のインストール

WebSphere Commerce for Linux は、Web サーバーとして IBM HTTP Server のみをサポートしています。Web サーバーは、他の WebSphere Commerce コンポーネントと同じマシン上にインストールしても、またはリモート・マシンにインストールしてもかまいません。使用する WebSphere Commerce マシン以外のマシンに Web サーバーをインストールする場合は、「*WebSphere Commerce, Advanced Configurations*」の説明に従ってください。これは IBM Web サイトから入手可能です。本インストール・ガイドの説明に従って Web サーバーをリモート・インストールしようとしても、正しくインストールできません。

WebSphere Commerce と同じマシンに Web サーバーをインストールする場合は、データベースのインストール後、他の WebSphere Commerce コンポーネントをインストールする前に、それをインストールする必要があります。ステップ 27 ページの『第 4 章 WebSphere Commerce のリモート側での IBM HTTP Server のインストールおよび構成』を完了してから、33 ページの『第 4 部 必要な WebSphere Commerce コンポーネントのインストール』に進んでください。

第 4 章 WebSphere Commerce のリモート側での IBM HTTP Server のインストールおよび構成

この章では、WebSphere Commerce のリモート側に IBM HTTP Server 1.3.19.1 をインストールする方法を説明します。IBM HTTP Server を WebSphere Application Server や WebSphere Commerce と同じマシンにインストールする場合は、WebSphere Application Server のインストール・プログラムを通して IBM HTTP Server をインストールできます。33 ページの『第 4 部 必要な WebSphere Commerce コンポーネントのインストール』に進んでください。

この章のステップを実行するには、「WebSphere Application Server, Advanced Edition」の CD が必要です。

インストール手順

IBM HTTP Server 1.3.19.1 をインストールするには、以下のようにします。

1. IBM HTTP Server をインストールするマシンのホスト名に下線文字 () が含まれていないことを確認します。IBM HTTP Server は、下線を含むホスト名はサポートしていません。
2. ユーザー ID `root` でログインします。
3. 必要であれば、「WebSphere Application Server, Advanced Edition」の CD をマウントします。これを行うには、以下を入力します。

```
mount CDROM_dir
```

CDROM_dir は、マウントされた CD として指定するディレクトリーです。

4. 次のコマンドを入力してインストール・プログラムを開始します。

```
./install.sh
```
5. 「Welcome to the IBM WebSphere Application Server Setup program (WebSphere Application Server のセットアップ・プログラムへようこそ)」ダイアログ・ボックスがオープンします。「次へ」をクリックして続行します。
6. 「Prerequisites Check (前提条件検査)」ウィンドウがオープンします。WebSphere Application Server のインストール用の正しい前提条件製品があることを確認してから、「OK」をクリックします。
7. 「Install Options (インストール・オプション)」ダイアログ・ボックスがオープンします。「Custom Installation (カスタム・インストール)」を選択してから、「次へ」をクリックします。

8. 「Choose Application Server Components (Application Server コンポーネントの選択)」パネルが表示されます。以下のパッケージを選択します。
 - IBM HTTP Server 1.3.19
 - Web サーバー・プラグインすべてのパッケージを選択し終わったら、「次へ」をクリックします。
9. 「WebSphere plug-ins (WebSphere プラグイン)」パネルが表示されます。IBM HTTP Server 用のプラグインを選択し、「次へ」をクリックします。
10. 「Select Destination Directory (宛先ディレクトリーの選択)」ダイアログがオープンします。「次へ」をクリックして続行します。
11. 「Install Options Selected (選択済みのインストール・オプション)」ダイアログ・ボックスがオープンします。表示内容が正しいことを確認してから「**Install (インストール)**」をクリックし、インストールを完了します。
12. 「Location of Configuration files (構成ファイルのロケーション)」ダイアログ・ボックスが開き、指定された Web サーバー構成ファイルへの絶対パス名 (/opt/IBMHTTPServer/conf/httpd.conf) を入力するよう促すプロンプトが出されます。

重要:

この情報を入力する前に、別のコマンド・ウィンドウをオープンして、以下のコマンドを入力してください。

```
cd /opt/IBMHTTPServer/conf
mv httpd.conf httpd.conf.orig
cp httpd.conf.sample httpd.conf
```

Web サーバー構成ファイルを入力して、「次へ」をクリックします。

13. 「Setup Complete (セットアップの完了)」ダイアログ・ボックスがオープンします。README ファイルを見るには、「Yes, I want to view the ReadMe File (はい。README ファイルを読みます)」が選択されていることを確認してから、「**Finish (終了)**」をクリックします。これで、デフォルトのブラウザ・ウィンドウに README ファイルが表示されます。

IBM HTTP Server 管理者用パスワードの作成

管理サーバーは、すべての構成フォームを含むディレクトリーに対して認証が使用可能になった状態でインストールされます。つまり、管理サーバーは、インストールの後、ユーザー ID とパスワードが入力されなければページをサービスしません。これは、IBM HTTP Server と管理サーバーが正常にインストールされた直後の無許可アクセスから IBM HTTP Server の構成ファイルを保護することを目的としたものです。インストール時には、パスワード・ファイル (admin.passwd) が「空」になっているので、管理サーバー・パスワード・ファイル (admin.passwd) にユーザー ID とパスワードを入力するまでは、管理サーバーから IBM HTTP Server の構成ページにアクセスすることはできません。

IBM HTTP Server 1.3.19.1 用のユーザー ID とパスワードを作成するには、以下のステップを実行します。

1. `cd /opt/IBMHTTPServer/bin` と入力します。
2. `./htpasswd -m ../conf/admin.passwd <user_ID>` と入力します。
3. パスワードの指定を求めるプロンプトが出され、次いでパスワードの確認を求めるプロンプトが出されます。

このユーザー ID とパスワードを使って、管理サーバーの構成 GUI にアクセスすることができます。このユーザー ID は、管理サーバーにアクセスするための ID として、固有なものでなければなりません。管理サーバーが指示する "User" と、管理サーバーにアクセスするためのユーザー ID は、同じにしないでください。

IBM HTTP Server のセットアップ

ユーザー ID やグループを作成し、さまざまな構成ファイルに対する許可を変更するセットアップ・スクリプトを、IBM HTTP Server に対して実行する必要があります。IBM HTTP Server をセットアップするには、以下のステップを実行してください。

1. `cd /opt/IBMHTTPServer/bin` と入力します。
2. `./setupadm` を実行します。
3. プロンプトに対し、以下のように応答します。
 - 管理サーバーを実行するためのユーザー ID を指定します (ユーザー ID は、システム管理ツールを使って作成します)。ユーザー ID を入力してください (ログオン ID と同じにはできません)。 **Enter** をクリックします。
 - 管理サーバーを実行するグループ名を指定します (グループは、システム管理ツールを使って作成します)。グループ名を入力し、 **Enter** をクリックします。
 - 許可の変更が必要なファイルのあるディレクトリーを指定するよう、プロンプトが出されます。デフォルトは `/opt/IBMHTTPServer/conf` です。デフォルトをそのまま使用するか、IBM HTTP Server 構成ファイルのパスを入力してください。
 - 管理サーバーの構成ファイルを更新してもよいかどうかを確認するプロンプトが出されます。続行する場合は 1 を、中断する場合 (デフォルト) は 2 を入力します。
 - 管理サーバーと IBM HTTP Server を英語以外の言語で実行するかどうかを尋ねるプロンプトが表示されます。続行する場合は 1 を、中断する (デフォルト) 場合は 2 を入力します。別の言語を使用する場合は、言語の選択を求めるプロンプトが出されます。
4. 更新が実行され、`setupadm` プログラムが終了します。

WebSphere Application Server フィックスパックおよび eFix のインストール

フィックスパックまたは eFix をインストールする前に、以下を行う必要があります。

- WebSphere Application Server が停止していることを確認します。WebSphere Application Server を停止するには、以下のようにします。
 1. ターミナル・ウィンドウに次のように入力して、WebSphere Application Server 管理コンソールを開始します。

```
export DISPLAY=fully_qualified_host_name:0.0
cd /opt/WebSphere/AppServer/bin
./adminclient.sh
```

2. WebSphere Application Server 管理コンソールで、短いホスト名を持つノードを選択します。
3. 「Stop (停止)」 ボタンをクリックします。次のような警告メッセージが表示されます。

You are trying to stop the node that the console is connected to. (コンソールの接続先のノードを停止しようとしています。) This will cause the console to exit after the node is stopped. (停止すると、ノードの停止後にコンソールは終了してしまいます。) Do you want to continue? (続けますか?)

「はい」 をクリックして続行します。

4. WebSphere Application Server 管理コンソールの後、ターミナル・ウィンドウで次のようなコマンドを発行して、WebSphere Application Server 関連のプロセスがすべて停止したことを確認します。

```
ps -ef | grep startupServer
```

5. このコマンドによって Java プロセスが戻された場合、kill コマンドを発行してそれぞれのプロセスを停止します。
- IBM HTTP Server が停止していることを確認します。

```
cd /opt/IBMHTTPServer/bin
./apachectl stop
```

- 必要であれば、WebSphere Commerce Disk 2 CD をマウントします。これを行うには、以下を入力します。

```
mount CDRom_dir
```

CDROM_dir は、マウントされた CD として指定するディレクトリーです。

WebSphere Application Server フィックスパックをインストールするには、以下のステップを完了します。

1. CD の Software_Patches/WAS_PTF2 ディレクトリーに移動し、以下のコマンドを実行してください。

```
cp was40_ae_ptf_2_linux.intel.tar /tmp
cd /tmp
tar -xvf was40_ae_ptf_2_linux.intel.tar
./install.sh
```

2. WebSphere Application Server ルート・ディレクトリーを求めるプロンプトが出されたら、/opt/WebSphere/AppServer を入力します。以降のすべての質問について「はい」と答えます。

WebSphere Application Server eFix をインストールするには、以下のステップを完了します。

1. WebSphere Commerce Disk 2 CD の /Software_Patches/WAS_efixes ディレクトリーに移動します。
2. 以下のコマンドを使用して、各 eFix をインストールします。

```
cp eFix_jar_file_name.jar /tmp
cd /tmp
/opt/WebSphere/AppServer/java/bin/java -jar eFix_jar_file_name.jar
-target /opt/WebSphere/AppServer
```

ここで、*eFix_jar_file_name.jar* は各 .jar ファイルの名前です。

スクリプトがエラーなしでソフトウェアをアップグレードしたかどうかを検査するには、以下のエラー・ログを調べてください。

- /tmp/WC54efixunix.log
- /opt/WebSphere/AppServer/eFix/PQ54291/Extractor.log
- /opt/WebSphere/AppServer/eFix/PQ57814/Extractor.Log
- /opt/WebSphere/AppServer/eFix/PQ58443/Extractor.Log

次のステップ

以上で IBM HTTP Server 1.3.19.1 のインストールは完了しました。次に 35 ページの『第 5 章 WebSphere Application Server のインストール』の説明に従って WebSphere Application Server 4.0.2 をインストールすることができます。

第 4 部 必要な WebSphere Commerce コンポーネントのインストール

データベースと Web サーバーのインストールが完了したら、WebSphere Application Server、IBM SDK for Java、WebSphere Commerce、および Payment Manager をインストールする必要があります。これらのタスクを実行する方法については、以下の章で説明します。

- 35 ページの『第 5 章 WebSphere Application Server のインストール』
- 45 ページの『第 6 章 WebSphere Commerce 5.4 のインストール』
- 47 ページの『第 7 章 IBM WebSphere Payment Manager のインストール』

このセクションのタスクを行うには、サポートされるデータベースおよび Web サーバーがインストールされている必要があります。

第 5 章 WebSphere Application Server のインストール

この章では、次の 2 つの異なるシナリオで WebSphere Application Server をインストールする方法について説明します。

- IBM HTTP Server が WebSphere Application Server および WebSphere Commerce と同じマシンにある。この場合、『WebSphere Application Server と IBM HTTP Server を同じマシン上にインストールする』にある指示に従ってください。
- IBM HTTP Server が WebSphere Application Server および WebSphere Commerce からリモート位置にある、あるいは Domino Web サーバーまたは iPlanet Web サーバーを使用している。この場合、39 ページの『WebSphere Application Server をインストールしてリモート Web サーバーとともに使用する』にある指示に従ってください。

この章のステップを実行するには、「WebSphere Application Server, Advanced Edition」の CD が必要です。

この章のチェックリスト

この章のステップを確実に正常完了するには、以下の要件を満たしていることを確認してください。

- 1. この章のステップを開始する前に、サポートされているデータベース・システムをあらかじめインストールしておく必要があります。
- 2. IBM HTTP Server を WebSphere Application Server および WebSphere Commerce からリモート位置にインストールしている場合は、WebSphere Application Server のインストールの前に IBM HTTP Server をインストールしなければなりません。WebSphere Application Server をインストールする前に、その Web サーバーを手動で停止する必要があります。

WebSphere Application Server と IBM HTTP Server を同じマシン上にインストールする

Web サーバーと同じマシン上に WebSphere Application Server をインストールするには、次のようにします。

1. 必ず root のユーザー ID でログインします。
2. マシンの CD-ROM ドライブに CD を挿入した後で「WebSphere Application Server, Advanced Edition」の CD をマウントします。そうするには、ターミナル・ウィンドウに以下のコマンドを入力します。

```
mount CDROM_dir
```

`CDROM_dir` は、CD ファイル・システムの割り振り時にマウント・ポイントと指定したディレクトリーです。

3. コマンド行で以下を入力して、CD-ROM のインストール・ディレクトリーに移動します。

```
cd /CDROM_dir/
```

`CDROM_dir` は、CD-ROM をマウントしているディレクトリーです。

4. 次のコマンドを入力してインストール・プログラムを開始します。

```
./install.sh
```

5. 「Welcome to the IBM WebSphere Application Server Setup program (WebSphere Application Server のセットアップ・プログラムへようこそ)」ダイアログ・ボックスがオープンします。「次へ」をクリックして、次へ進んでください。
6. 「Prerequisites Check (前提条件検査)」ウィンドウがオープンします。WebSphere Application Server のインストール用の正しい前提条件製品があることを確認してから、「OK」をクリックします。
7. 「Install Options (インストール・オプション)」ダイアログ・ボックスがオープンします。「Custom Installation (カスタム・インストール)」を選択してから、「次へ」をクリックします。
8. 「Choose Application Server Components (Application Server コンポーネントの選択)」パネルが表示されます。以下のパッケージを選択します。

- Server
- Admin
- Samples
- Application Assembly and Deployment Tools
- IBM HTTP Server 1.3.19
- Web Server Plugins

すべてのパッケージを選択し終わったら、「次へ」をクリックします。

9. 「WebSphere plug-ins (WebSphere プラグイン)」パネルが表示されます。Web サーバー用のプラグインを選択し、「次へ」をクリックします。
10. 「Database Options (データベース・オプション)」ダイアログがオープンします。以下の解説どおりに行います。
 - a. 「Database Type (データベース・タイプ)」フィールドで、プルダウン・メニューから DB2 を選択します。
 - b. WebSphere Application Server とは別のマシン上にデータベースが置かれている場合、必ず「Remote DB (リモート DB)」を選択します。
 - c. 「Database Name (Database SID) (データベース名 (データベース SID))」フィールドに、WebSphere Application Server データベースの名前を入力します。例えば、WAS と入力します。

- d. 「DB ホーム」フィールドで、DB2 インスタンス所有者のホーム・ディレクトリーの絶対パス名 `/home/db2inst1` を入力するか、または「参照」ボタンを使ってホーム・ディレクトリーの絶対パス名を指定します。
 - e. 「DB URL」、「Server Name (サーバー名)」、および「Port Number (ポート番号)」フィールドは編集できません。
 - f. 「Database User ID (データベース・ユーザー ID)」フィールドで、データベース・インスタンス所有者の名前 `db2inst1` を入力します。
 - g. 「Database Password (データベース・パスワード)」フィールドに、データベース・インスタンス所有者の現在のパスワードを入力します。
 - h. 「次へ」をクリックして、次へ進みます。
11. 「Select Destination Directory (宛先ディレクトリーの選択)」ダイアログがオープンします。WebSphere Application Server のインストール先のディレクトリーを指定します。デフォルトの宛先ディレクトリーを受け入れることができます。または、絶対パス名を入力するか「参照」をクリックして別のディレクトリーを指定することもできます。注意すべきこととして、インストールの対象として IBM HTTP Server を選択した場合、宛先ディレクトリーを変更することはできません。「次へ」をクリックして、次へ進んでください。
 12. 「Install Options Selected (選択済みのインストール・オプション)」ダイアログ・ボックスがオープンします。表示内容が正しいことを確認してから「**Install (インストール)**」をクリックし、インストールを完了します。
 13. 「構成ファイルのロケーション」ダイアログ・ボックスが表示され、指定した Web サーバー構成ファイルの絶対パス名を入力するようプロンプトで指示されます。
`/opt/IBMHTTPServer/conf/httpd.conf`

重要:

この情報を入力する前に、別のコマンド・ウィンドウをオープンして、以下のコマンドを入力してください。

```
cd /opt/IBMHTTPServer/conf
mv httpd.conf httpd.conf.orig
cp httpd.conf.sample httpd.conf
```

「次へ」をクリックします。

14. 「Setup Complete (セットアップの完了)」ダイアログ・ボックスがオープンします。README ファイルを見るには、「Yes, I want to view the ReadMe File (はい、README ファイルを読みます)」が選択されていることを確認してから、「**Finish (終了)**」をクリックします。これで、デフォルトのブラウザ・ウィンドウに README ファイルが表示されます。
15. 以下を入力して、CD をアンマウントします。
`cd /`
`umount CDR0M_dir`

`CDROM_dir` は CD をマウントする際に指定したディレクトリーです。

16. 「WebSphere Application Server, Advanced Edition」の CD を除去します。
17. 以下のコマンドを実行して、IBM HTTP Server を再始動します。

```
/opt/IBMHTTPServer/bin/apachectl restart
```
18. ブラウザーを開始してから、ローカル・マシンの名前を URL で入力します。IBM HTTP Server の Web ページが表示されたら、サーバーのインストールと構成は正しく完了しているということです。

IBM HTTP Server 管理者用パスワードの作成

管理サーバーは、すべての構成フォームを含むディレクトリーに対して認証が使用可能になった状態でインストールされます。つまり、管理サーバーは、インストールの後、ユーザー ID とパスワードが入力されなければページをサービスしません。これは、IBM HTTP Server と管理サーバーが正常にインストールされた直後の無許可アクセスから IBM HTTP Server の構成ファイルを保護することを目的としたものです。インストール時には、パスワード・ファイル (`admin.passwd`) が「空」になっているので、管理サーバー・パスワード・ファイル (`admin.passwd`) にユーザー ID とパスワードを入力するまでは、管理サーバーから IBM HTTP Server の構成ページにアクセスすることはできません。

IBM HTTP Server 1.3.19.1 用のユーザー ID とパスワードを作成するには、以下のステップを実行します。

1. `cd /opt/IBMHTTPServer/bin` と入力します。
2. `./htpasswd -m ../conf/admin.passwd user_ID` と入力します。
3. パスワードの指定を求めるプロンプトが出され、次いでパスワードの確認を求めるプロンプトが出されます。

このユーザー ID とパスワードを使って、管理サーバーの構成 GUI にアクセスすることができます。このユーザー ID は、管理サーバーにアクセスするための ID として、固有なものでなければなりません。

IBM HTTP Server 管理サーバーのセットアップ

ユーザー ID やグループを作成し、さまざまな構成ファイルに対する許可を変更するセットアップ・スクリプトを、IBM HTTP Server に対して実行する必要があります。IBM HTTP Server 管理サーバーをセットアップするには、以下のステップを実行してください。

1. `cd /opt/IBMHTTPServer/bin` と入力して、HTTP Server ディレクトリーに移動します。
2. `./setupadm` を実行します。
3. プロンプトに対し、以下のように応答します。

- a. 管理サーバーを実行するためのユーザー ID を指定します (ユーザー ID は、システム管理ツールを使って作成します)。ユーザー ID を入力してください (ログオン ID と同じにはできません)。 **Enter** をクリックします。
 - b. 管理サーバーを実行するグループ名を指定します (グループは、システム管理ツールを使って作成します)。グループ名を入力し、 **Enter** をクリックします。
 - c. 許可の変更が必要なファイルのあるディレクトリーを指定するよう、プロンプトが出されます。デフォルトは /opt/IBMHTTPServer/conf です。デフォルトをそのまま使用するか、IBM HTTP Server 構成ファイルのパスを入力してください。
 - d. 変更を実行するか (1 を入力)、または変更せずに終了するか (2 を入力) を尋ねるプロンプトが出されます。 1 を入力して変更を行ってください。
 - e. 管理サーバーの構成ファイルを更新するプロンプトが出されます。続行するか (1 を入力)、または終了します (2 を入力)。 1 を入力して更新を行ってください。
 - f. 管理サーバーと IBM HTTP Server を英語以外の言語で実行するかどうかを尋ねるプロンプトが出されます。そうする場合は 1 を入力し、そうしないで終了する場合は 2 を入力します。別の言語を使用する場合は、言語の選択を求めるプロンプトが出されます。
4. 更新が実行され、setupadm プログラムが終了します。

WebSphere Application Server をインストールしてリモート Web サーバーとともに使用する

IBM HTTP Server が WebSphere Application Server および WebSphere Commerce からリモート位置にある場合、 WebSphere Application Server をインストールするには、以下のようにします。

1. 必ず root のユーザー ID でログインします。
2. マシンの CD-ROM ドライブに CD を挿入した後で 「WebSphere Application Server, Advanced Edition」 の CD をマウントします。そうするには、ターミナル・ウィンドウに以下のコマンドを入力します。

```
mount CDROM_dir
```

CDROM_dir は、CD ファイル・システムの割り振り時にマウント・ポイントと指定したディレクトリーです。

3. コマンド行で以下を入力して、CD-ROM のインストール・ディレクトリーに移動します。

```
cd /CDROM_dir/
```

CDROM_dir は、CD-ROM をマウントしているディレクトリーです。

4. 次のコマンドを入力してインストール・プログラムを開始します。

```
./install.sh
```

5. 「Welcome to the IBM WebSphere Application Server Setup program (WebSphere Application Server のセットアップ・プログラムへようこそ)」ダイアログ・ボックスがオープンします。「次へ」をクリックして、次へ進んでください。
6. 「Prerequisites Check (前提条件検査)」ウィンドウがオープンします。 WebSphere Application Server のインストール用の正しい前提条件製品があることを確認してから、「OK」をクリックします。
7. 「Install Options (インストール・オプション)」ダイアログ・ボックスがオープンします。「**Custom Installation (カスタム・インストール)**」を選択してから、「次へ」をクリックします。
8. 「Choose Application Server Components (Application Server コンポーネントの選択)」パネルが表示されます。以下のパッケージを選択します。
 - Server
 - Admin
 - Samples
 - Application Assembly and Deployment Toolsすべてのパッケージを選択し終わったら、「次へ」をクリックします。
9. 「Database Options (データベース・オプション)」ダイアログがオープンします。以下の解説どおりに行います。
 - a. 「Database Type (データベース・タイプ)」フィールドで、プルダウン・メニューから DB2 を選択します。
 - b. WebSphere Application Server とは別のマシン上にデータベースが置かれている場合、必ず「Remote DB (リモート DB)」を選択します。
 - c. 「Database Name (Database SID) (データベース名 (データベース SID))」フィールドに、 WebSphere Application Server データベースの名前を入力します。例えば、データベースが WebSphere Application Server と同じマシン上にある場合は WASLOOP、 WebSphere Application Server からリモートにある場合は WAS と入力します。
 - d. 「DB ホーム」フィールドで、 DB2 インスタンス所有者のホーム・ディレクトリーの絶対パス名 `/home/db2inst1` を入力するか、または「参照」ボタンを使ってホーム・ディレクトリーの絶対パス名を指定します。
 - e. 「DB URL」、「Server Name (サーバー名)」、および「Port Number (ポート番号)」フィールドは編集できません。
 - f. 「Database User ID (データベース・ユーザー ID)」フィールドで、データベース・インスタンス所有者の名前 `db2inst1` を入力します。
 - g. 「Database Password (データベース・パスワード)」フィールドに、データベース・インスタンス所有者の現在のパスワードを入力します。
 - h. 「次へ」をクリックして、次へ進みます。

10. 「Select Destination Directory (宛先ディレクトリーの選択)」ダイアログがオープンします。 WebSphere Application Server のインストール先のディレクトリーを指定します。デフォルトの宛先ディレクトリーを受け入れることができます。または、絶対パス名を入力するか「参照」をクリックして別のディレクトリーを指定することもできます。注意すべきこととして、インストールの対象として IBM HTTP Server を選択した場合、宛先ディレクトリーを変更することはできません。「次へ」をクリックして、次へ進んでください。
11. 「Install Options Selected (選択済みのインストール・オプション)」ダイアログ・ボックスがオープンします。表示内容が正しいことを確認してから「Install (インストール)」をクリックし、インストールを完了します。
12. 「Setup Complete (セットアップの完了)」ダイアログ・ボックスがオープンします。 README ファイルを見るには、「Yes, I want to view the ReadMe File (はい。README ファイルを読みます)」が選択されていることを確認してから、「Finish (終了)」をクリックします。これで、デフォルトのブラウザ・ウィンドウに README ファイルが表示されます。
13. 以下を入力して、CD をアンマウントします。

```
cd /  
umount CDROM_dir
```

CDROM_dir は CD をマウントする際に指定したディレクトリーです。
14. 「WebSphere Application Server, Advanced Edition」の CD を除去します。

WebSphere Application Server フィックスパックおよび eFix のインストール

フィックスパックまたは eFix をインストールする前に、以下を行う必要があります。

- WebSphere Application Server が停止していることを確認します。 WebSphere Application Server を停止するには、以下のようにします。
 1. ターミナル・ウィンドウに次のように入力して、WebSphere Application Server 管理コンソールを開始します。

```
export DISPLAY=fully_qualified_host_name:0.0  
cd /opt/WebSphere/AppServer/bin  
./adminclient.sh
```
 2. WebSphere Application Server 管理コンソールで、短いホスト名を持つノードを選択します。
 3. 「Stop (停止)」ボタンをクリックします。次のような警告メッセージが表示されます。

You are trying to stop the node that the console is connected to. (コンソールの接続先のノードを停止しようとしています。) This will cause the console to exit after the node is stopped. (停止すると、ノードの停止後にコンソールは終了してしまいます。) Do you want to continue? (続けますか?)

「はい」をクリックして続行します。

4. WebSphere Application Server 管理コンソールの後、ターミナル・ウィンドウで次のようなコマンドを発行して、WebSphere Application Server 関連のプロセスがすべて停止したことを確認します。

```
ps -ef | grep startupServer
```

5. このコマンドによって Java プロセスが戻された場合、kill コマンドを発行してそれぞれのプロセスを停止します。

- IBM HTTP Server が停止していることを確認します。

```
cd /opt/IBMHTTPServer/bin
./apachectl stop
```

- 必要であれば、WebSphere Commerce Disk 2 CD をマウントします。これを行うには、以下を入力します。

```
mount CDROM_dir
```

CDROM_dir は、マウントされた CD として指定するディレクトリーです。

WebSphere Application Server フィックスパックをインストールするには、以下のステップを完了しします。

1. CD の Software_Patches/WAS_PTF2 ディレクトリーに移動し、以下のコマンドを実行してください。

```
cp was40_ae_ptf_2_linux.intel.tar /tmp
cd /tmp
tar -xvf was40_ae_ptf_2_linux.intel.tar
./install.sh
```

2. WebSphere Application Server ルート・ディレクトリーを求めるプロンプトが出されたら、/opt/WebSphere/AppServer を入力します。以降のすべての質問について「はい」と答えます。

WebSphere Application Server eFix をインストールするには、以下のステップを完了しします。

1. WebSphere Commerce Disk 2 CD の /Software_Patches/WAS_efixes ディレクトリーに移動します。
2. 以下のコマンドを使用して、各 eFix をインストールします。

```
cp eFix_jar_file_name.jar /tmp
cd /tmp
/opt/WebSphere/AppServer/java/bin/java -jar eFix_jar_file_name.jar
    -target /opt/WebSphere/AppServer
```

ここで、*eFix_jar_file_name.jar* は各 .jar ファイルの名前です。

スクリプトがエラーなしでソフトウェアをアップグレードしたかどうかを検査するには、以下のエラー・ログを調べてください。

- /tmp/WC54efixunix.log
- /opt/WebSphere/AppServer/eFix/PQ54291/Extractor.log
- /opt/WebSphere/AppServer/eFix/PQ57814/Extractor.Log
- /opt/WebSphere/AppServer/eFix/PQ58038/Extractor.Log
- /opt/WebSphere/AppServer/eFix/PQ58443/Extractor.Log

インストール内容のテスト

この項では、WebSphere Application Server システムのインストールと構成をテストする方法について説明します。以下の解説では、サポートされている Web サーバー、データベース、および WebSphere Application Server コンポーネントをインストール済みであることを前提としています。

以下のステップを実行し、WebSphere Application Server のインストール内容をテストします。

1. 必ず、スーパーユーザー (root) 特権でマシンにログインしてください。
2. 次のような startupServer スクリプトを実行して WebSphere 管理サーバーを開始します。

```
cd /opt/WebSphere/AppServer/bin
./startupServer.sh &
```

3. /opt/WebSphere/AppServer/logs ディレクトリー内に置かれている tracefile という名前のファイルを調べて、管理サーバーの始動が正常に完了したことを確認します。サーバーの始動が正常に完了していれば、メッセージ `Server_adminServer open for e-business (e-business 用の Server_adminServer がオープンします)` がそのファイルに示されます。
4. 次のような adminclient スクリプトを実行して、管理コンソールを始動します。

```
cd /opt/WebSphere/AppServer/bin
./adminclient.sh &
```

5. メッセージ `Console Ready (コンソールは作動可能)` が表示されたら、次のようなステップを行ってアプリケーション・サーバーを管理します。
 - a. 管理コンソールがオープンすると、ツリー・ビューが表示されます。
「**WebSphere Administrative Domain (WebSphere 管理可能ドメイン)**」エントリーの横の正符号 (+) をクリックし、ビューを展開します。
 - b. 「**Nodes (ノード)**」エントリーを展開します。
 - c. ご使用のホスト・マシンの名前を確認してから、エントリーのビューを展開します。
 - d. 「**Application Servers (アプリケーション・サーバー)**」エントリーのビューを展開します。

- e. 「**Default Server (デフォルト・サーバー)**」 エントリーを選択してから、ツールバー上にある「**Start (始動)**」アイコンをクリックします。通知ウィンドウがオープンし、サーバーは始動済みであることが知らされます。「**OK**」をクリックして通知ウィンドウをクローズします。

WebSphere Application Server AdminServer を再始動すると、デフォルト・サーバーはその以前の状態に戻ります。停止していた場合は停止したままであり、実行していた場合は再始動します。

6. Web サーバーが別のマシンにインストールされている場合は、`/opt/WebSphere/AppServer/config/plugin-cfg.xml` を WebSphere Application Server マシンから Web サーバー・マシンにコピーします。

重要:

デフォルト・サーバーは、テストの目的でのみ使用されます。テストが終了したら、これを停止または除去することができます。実動システムでこれを実行するとサイトのセキュリティが低下する恐れがありますから、実動システムでは決して実行しないでください。

7. Web サーバーが実行中であることを確認してください。 Web サーバーが実行されていないなければ、始動してください。
8. ブラウザーを始動してから、デフォルトでインストールされているサンプル・サーブレットである次のようなスヌープ・サーブレットの URL を入力します。

`http://machine_name/servlet/snoop`

`/servlet/snoop` に関する解説が表示されます。

次のステップ

以上で WebSphere Application Server のインストールが完了したので、次に 45 ページの『第 6 章 WebSphere Commerce 5.4 のインストール』のステップに従って WebSphere Commerce をインストールすることができます。

第 6 章 WebSphere Commerce 5.4 のインストール

この章では、WebSphere Commerce 5.4 のインストール方法について説明します。この章のステップを実行するには、WebSphere Commerce Disk 1 CD が必要です。

WebSphere Commerce 5.4 をインストールする 前に、Web サーバー、データベース、IBM SDK for Java、および WebSphere Application Server を必ずインストールしてください。

WebSphere Commerce をインストールする前に、11 ページの『第 2 章 インストール前の要件』に記載された前提条件をすべて満たしていることを確認してください。

インストール手順

WebSphere Commerce 5.4 をインストールするには、以下のようにします。

1. ユーザー ID root でログオンします。
2. 必要であれば、WebSphere Commerce Disk 1 CD をマウントします。これを行うには、以下を入力します。

```
mount CDROM_dir
```

CDROM_dir は、マウントされた CD として指定するディレクトリーです。

3. DB2 サーバーが開始済みであることを確認します。DB2 の開始についての詳細は、137 ページの『DB2 Universal Database の開始と停止』を参照してください。
4. WebSphere Application Server が開始されている必要があります。135 ページの『WebSphere Application Server の開始と停止』を参照してください。
5. コマンド行で以下を入力して CD に移動します。

```
cd /CDROM_dir
```

CDROM_dir は、CD がマウントされているディレクトリーです。

6. コマンド行で、以下を入力します。

```
./install.sh
```
7. インストール・ウィンドウが表示された後、「次へ」をクリックして、インストールを続けます。
8. ライセンスの契約条項が表示されたら、同意して「次へ」をクリックします。
9. インストール場所と WebSphere Commerce のサイズが表示されます。「次へ」をクリックしてインストールを開始します。
10. インストールが完了したら、「終了」をクリックします。

11. 以下を入力して、CD をアンマウントします。

```
cd /  
umount CDROM_dir
```

CDROM_dir は、CD がマウントされているディレクトリーです。

12. WebSphere Commerce Disk 1 CD を除去します。

次のステップ

以上で WebSphere Commerce 5.4 のインストールは完了です。これで、47 ページの『第 7 章 IBM WebSphere Payment Manager のインストール』の説明に従って IBM Payment Manager 3.1.2 をインストールすることができます。

第 7 章 IBM WebSphere Payment Manager のインストール

この章では、Payment Manager をローカル WebSphere Commerce マシン上に、または WebSphere Commerce マシンからリモートになっているマシン上にインストールして構成する方法について説明します。この章に示されている手順を完了するには、IBM Payment Manager 3.1.2 の CD が必要です。

Payment Manager の構成に関するその他の詳細は、以下を参照してください。

- Payment Manager CD 上の *IBM WebSphere™ Payment Manager for Multiplatforms* インストール・ガイド、バージョン 3.1。
- Payment Manager CD 上の *IBM WebSphere Payment Manager for Multiplatforms* 管理者ガイド、バージョン 3.1。
- インストールを完了したら、WebSphere Commerce オンライン・ヘルプにある情報を参照し、Payment Manager を WebSphere Commerce ストアと共に作動するように構成してください。

インストールの前提条件

Payment Manager を WebSphere Commerce マシンにインストールする場合、Payment Manager のインストール前提条件のほとんどはすでに満たされています。48 ページの『Payment Manager のインストール前に』に直接進んで、Payment Manager をインストールしてください。

WebSphere Commerce からリモートの位置にあるマシンに Payment Manager をインストールする場合は、以下にリストする、マシンのハードウェアおよびソフトウェアの前提条件を満たす必要があります。

ソフトウェア要件

Payment Manager では、以下のソフトウェアがインストールされている必要があります。

1. データベース製品。Payment Manager をインストールしているマシンに、データベース・サーバーまたはクライアントがインストールされていなければなりません。
2. WebSphere Application Server 4.0.2
3. Web サーバー。(IBM HTTP Server 1.3.19.1 は、WebSphere Application Server 4.0.2 をインストールするとデフォルトでインストールされます。) サポートされている Web サーバーについては、WebSphere Application Server の資料を参照してください。

Payment Manager のインストール前に

1. 最新の README ファイル `readme.framework.html` をお読みください。これには、Payment Manager の Web サイト <http://www.ibm.com/software/websphere/paymgr/support/index.html> および Payment Manager CD-ROM 上のドキュメンテーション・リンクからアクセスします。

2. 以下のように入力して、データベース・ユーザーに変更します。

```
su - db2inst1
```

3. 以下のようにして、Payment Manager 用データベース (例えば *payman*) を作成します。

```
db2 create db payman
```

データベースがリモート・マシンにある場合は、以下のコマンドを使用してデータベースを作成できます。

```
db2 attach to node_name user user_id using password  
db2 create db payman
```

Payment Manager のインストール中は、このデータベースが実行中でなければなりません。

4. DB2 コマンド・ウィンドウに以下を入力し、このデータベースのアプリケーション・ヒープ・サイズが少なくとも 256 であることを確認します。

```
db2 update db cfg for payman using APPLHEAPSZ 256
```

5. データベースの作成が完了したら、次のように入力して DB2 をいったん停止してから開始します。

```
db2stop  
db2start
```

6. インストール中は必ず WebSphere Application Server 管理サーバーを実行中にしておいてください。さらに、別の目的をもつ WebSphere Payment Manager という名前のアプリケーション・サーバーが WebSphere Application Server 内で構成されていないことを確認してください。もしすでに構成済みなら、その名前を変更するか、または削除してください。

7. WebSphere Application Server セキュリティーが使用可能になっている場合、Payment Manager または決済カセットをインストールする前に使用不可にします。WebSphere Application Server セキュリティーが使用可能になっているかどうかを調べるには、次のようにします。

- a. WebSphere Application Server 管理コンソールをオープンします。
- b. 「コンソール」メニューから「コンソール」を選択し、「**Security Center (セキュリティ・センター)**」タスクをオープンします。
- c. 「一般」タブで、「**Enable Security (セキュリティを使用可能にする)**」チェック・ボックスのチェックを外します。

Payment Manager のインストール

IBM Payment Manager 3.1.2 をインストールするには、以下のようになります。

1. ユーザー ID root でログインします。
2. 必要であれば、IBM Payment Manager 3.1.2 の CD をマウントします。これを行うには、以下を入力します。

```
mount CDROM_dir
```

CDROM_dir は、マウントされた CD として指定するディレクトリーです。

3. 次のような Install コマンドを実行し、Payment Manager インストール・プログラムを立ち上げます。

```
./Install
```

4. 「Payment Manager Install (Payment Manager のインストール)」画面で、「次へ」をクリックします。
5. ライセンス契約を読み、ご使用条件を納得したら了承します。
6. デフォルトの宛先ディレクトリーを受け入れるか、あるいは他のディレクトリーを入力します。
7. WebSphere Application Server がどの IBM SDK for Java を使用しているかをインストール・プログラムが判断できないと、IBM SDK for Java ディレクトリーの位置を入力するように求められます。表示された場所が正しければ、「次へ」をクリックします。正しくないなら、正しい位置を入力してから「次へ」をクリックしてください。
8. Payment Manager で使用するデータベース (**DB2 Universal Database** または **Oracle8i Database** のいずれか) を選択し、「次へ」をクリックします。
9. インストール・プログラムは、JDBC™ のドライバー情報を自動的に検索します。JDBC のドライバー情報が検出されたなら、「次へ」をクリックしてください。
10. データベース名を求めるプロンプトが出されたら、Payment Manager で使用するために作成したデータベースを指定します。データベースは、WebSphere Commerce データベースとして使用しているものと同じにすることも、別にすることもできます。
11. 「Payment Manager Database Access Information (Payment Manager データベース・アクセス情報)」画面で、次のような該当する値を入力します。
 - DB2 データベース所有者のユーザー ID
 - DB2 データベース管理者のユーザー ID
 - DB2 データベース管理者のパスワード
 - Payment Manager データベース名
 - DB2 インスタンス名
 - データベース・サーバー・ホスト名 (完全修飾)

- データベース・サービス TCP ポート
- 12. 「Payment Manager WebSphere Configuration Information (Payment Manager WebSphere 構成情報)」のページで、デフォルト・ノード名をそのまま受け入れるか(ただしマシンに対して正しいものである場合)、あるいは必要に応じて短いホスト名を入力します。ノード名は、WebSphere Application Server 管理コンソールに表示される使用するマシンのノード名と同じでなければなりません。
- 13. 「Installation Summary (インストールの要約)」画面で、選択されているパラメーターを確認します。「次へ」をクリックしてインストールを続行します。

注: インストール中に、進行状況表示バーが停止したように見えることがあります。それでもインストールは継続していますので、終了しないでください。システム・リソースの状態に応じて、進行状況表示バーが再び動くようになります。

- 14. README ファイルを読みたいかどうかをたずねられます。「Yes (はい)」を選択し、「次へ」をクリックします。
- 15. 以下を入力して、CD をアンマウントします。

```
cd /  
umount CDROM_dir
```

CDROM_dir は、マウントされた CD として指定したディレクトリーです。

- 16. IBM Payment Manager 3.1.2 の CD を除去します。

CustomOffline と OfflineCard が自動的に Payment Manager とともにインストールされます。Payment Manager が WebSphere Commerce と同じマシンにインストールされると、OfflineCard は自動的に構成されます。これらのカセットをテストに使用できますが、オンライン・トランザクションを処理することはできません。

Payment Manager SET Cassette 3.1.2、Payment Manager Cassette for BankServACH 3.1.2、Payment Manager Cassette for VisaNet 3.1.2、および Payment Manager Cassette for CyberCash 3.1.2 は、WebSphere Commerce 5.4 に付属するオンライン・トランザクション処理カセットですが、デフォルトではインストールされません。実動用にサイトをオープンする前に、オンライン・トランザクションの処理で使用する決済カセット(複数可)をインストールする必要があります。決済カセットのインストールについては、インストールするカセット用の補足資料をご覧ください。これら資料の入手先に関する詳細は、172 ページの『Payment Manager 情報』を参照してください。カセットをインストールする前に、WebSphere Application Server を稼働させ、Payment Manager アプリケーション・サーバーを停止しておく必要があることに注意してください。

リモート・マシンでの Payment Manager の構成

WebSphere Commerce のあるシステムに Payment Manager をインストールするときには、WCSRealm クラスが自動的にシステムに構成されます。Payment Manager をリモート・マシンにインストールしているときは、サポートしているデフォルト・レルムとして PSDefaultRealm が提供されます。

Payment Manager がインストールされているリモート・マシンで WCSRealm を使用する場合には、WebSphere Application Server 管理コンソールを使って Payment Manager を手動で構成する必要があります。次のようにします。

1. Payment Manager マシンで WebSphere Application Server 管理コンソールをオープンします。
2. WebSphere Commerce アプリケーション・サーバーが稼働中であることを確認してください。
3. Payment Manager アプリケーション・サーバーを停止します。
 - a. 「**WebSphere Administrative Domain (WebSphere 管理可能ドメイン)**」を展開します。
 - b. 「**ノード**」を展開します。
 - c. 「*node_name*」を展開します。
 - d. 「**Application Servers (アプリケーション・サーバー)**」を展開します。
 - e. 「**WebSphere Payment Manager**」を選択します。「**停止**」ボタンをクリックして、Payment Manager アプリケーション・サーバーを停止します。
4. Payment Manager アプリケーション・サーバーが停止した後、「**JVM Settings (JVM 設定)**」タブを選択します。「System Properties (システム・プロパティ)」ボックスで、wpm.RealmClass 初期化パラメーターを選択して値を変更します。
 - com.ibm.etill.framework.payserverapi.PSDefaultRealm を com.ibm.commerce.payment.realm.WCSRealm に置き換えます。値を変更したら、「**適用**」をクリックします。
5. Payment Manager システムで SSL を使用可能にする場合、145 ページの『WebSphere Application Server へのポート・ホスト別名の追加』の説明に従って、WebSphere Application Server 管理コンソールの default_host ウィンドウに *.443 エントリーを追加します。

注: SSL を使用可能にしない場合は、WebSphere Commerce インスタンスの作成時に、WebSphere Commerce 構成マネージャーの Payment Manager 設定ページ内で、WebSphere Commerce サーバーが非 SSL Payment Manager クライアントを使用するよう構成しなければなりません。インスタンスを作成した後で Payment Manager 設定を変更することもできますが、変更内容を有効にするために、インスタンスを再始動する必要があります。

6. Payment Manager ディレクトリーの `WCSRealm.properties` ファイルをオープンします。このファイルには、`WCSHostName` と `WCSWebPath` の定義が含まれています。
`WCSHostName` には、WebSphere Commerce がインストールされているリモート・マシンの完全修飾ホスト名を入力します。(このデフォルトは、Payment Manager がインストールされているシステムのホスト名です。) `WCSWebPath` のプロパティーを変更する必要はありません。
7. WebSphere Application Server 管理コンソールから、Payment Manager アプリケーション・サーバーを再始動します。

次のステップ

以上で、IBM Payment Manager 3.1.2 のインストールは完了しました。次に、以下のことを行います。

- 53 ページの『第 5 部 WebSphere Commerce インスタンスの構成』の手順に従って、WebSphere Commerce インスタンスを作成します。

第 5 部 WebSphere Commerce インスタンスの構成

必須のソフトウェアのインストールと、使用する予定の任意のソフトウェア・パッケージのインストールが完了したら、WebSphere Commerce インスタンスを作成することができます。このインスタンスは、構成マネージャーまたはコマンド行インターフェースを使用して作成できます。最初のインスタンスを作成する場合は、構成マネージャーを使用することをお勧めします。

第 5 部は、次のような章で構成されています。

- 55 ページの『第 8 章 構成前のステップ』
- 57 ページの『第 9 章 構成マネージャーによるインスタンスの作成または変更』
- 87 ページの『第 10 章 構成後のステップ』

正しく WebSphere Commerce インスタンスを作成するためには、すべてのユーザーが、55 ページの『第 8 章 構成前のステップ』、87 ページの『第 10 章 構成後のステップ』、および 57 ページの『第 9 章 構成マネージャーによるインスタンスの作成または変更』の該当するステップを実行する必要があります。

第 8 章 構成前のステップ

この章には、WebSphere Commerce インスタンスを構成する前に完了する必要がある作業のリストが載せられています。以下のリストの該当するセクションを実行してください。

- wcpinstall.sh スクリプトを実行する
- WebSphere Application Server を開始する (すべてのユーザー)

インストール後スクリプトの実行

WebSphere Commerce および必要なコンポーネントをすべてインストールした後、インストール後スクリプトを実行する必要があります。これを実行すると、非 root ユーザーとして WebSphere Application Server、Payment Manager、および WebSphere Commerce を実行できるユーザー ID wasuser が作成されます。スクリプトを実行するには、以下のステップを完了します。

1. WebSphere Application Server が停止中で、Web サーバーに関連したすべてのプロセスも停止中であることを確認します。
2. DB2 サービスが停止中であることを確認します。
3. /opt/WebSphere/CommerceServer/bin に移動します。
`cd /opt/WebSphere/CommerceServer/bin`
4. ./wcb.sh と入力します。
5. 画面のプロンプトに従い、非 root ユーザーとして実行するかどうかを尋ねられたら、必ず「はい」を選択してください。

注:

- a. 新規ユーザーを作成せずに既存のユーザーを使用することにした場合、そのユーザーのホーム・ディレクトリーは /home でなければなりません。
- b. ./wcb.sh スクリプトによって示されるデフォルトのグループ名とユーザー名、およびデフォルト・ポート番号を使用することを強くお勧めします。別の名前やポート番号を選択する場合は、この資料全体にわたって、それらの名前で置き換える必要があります。
- c. グループやユーザーの名前は、以下のガイドラインに沿ったものでなければなりません。
 - 8 文字以内にする
 - 特殊文字は使用しない (英数字のみ)
 - すべて小文字にする

このスクリプトを実行した後は、特定のツールを立ち上げるときや特定のアプリケーションを開始または終了するときに、このスクリプトで指定したポート番号を指定する必要があります。この点の詳細は、本書の中で個々のタスクの説明に含まれています。

WebSphere Application Server の開始

WebSphere Application Server を開始します。 55 ページの『インストール後スクリプトの実行』で作成したユーザー ID `wasuser` としてログインし、以下の事柄を確認してから、以下のように入力します。

1. データベース・サーバーが実行中であることを確認します。
2. Web サーバーが実行中であることを確認します。
3. ターミナル・ウィンドウで次のコマンドを入力します。

```
su - wasuser
DISPLAY=fully_qualified_host_name :0.0
cd /opt/WebSphere/AppServer/bin
./startupServer.sh &
```

次のステップ

この章に示されている必要なステップがすべて完了したら、以下の章のステップを行うことによって、構成マネージャーを使ってインスタンスを作成できます。

- 57 ページの『第 9 章 構成マネージャーによるインスタンスの作成または変更』

第 9 章 構成マネージャーによるインスタンスの作成または変更

この章では、構成マネージャーによりインスタンスを作成または変更する方法について説明します。55 ページの『第 8 章 構成前のステップ』で説明されている手順がまだ完了していない場合、インスタンスを作成することはできません。

注:

1. IBM WebSphere Payment Manager 3.1.2 を使用してインスタンスのオンライン・トランザクションを処理するには、インスタンスを作成する前に Payment Manager をインストールしなければなりません。インスタンスは、自動的に Payment Manager を処理するように構成されます。Payment Manager をインストールする方法については、47 ページの『第 7 章 IBM WebSphere Payment Manager のインストール』を参照してください。
2. ファイル (通常 /opt/WebSphere/AppServer/bin ディレクトリーにある) をカスタマイズしてある場合は、構成マネージャーを実行する前に、そのカスタマイズを除去する必要があります。除去しないと、WebSphere Application Server 中の WebSphere Commerce アプリケーション・サーバーのセットアップが失敗します。
3. WebSphere Application Server 4.0.2 では、単一の WebSphere Commerce サーバーは、インストールされた EJB モジュール、および 1 つ以上のストアへのクライアント要求の役割を果たす、インストールされた Web モジュールから構成されます。WebSphere Commerce 構成マネージャーでは、個々の WebSphere Commerce インスタンスは、インスタンス・ツリー中の別々のルート・カテゴリーとして表示されます。WebSphere Application Server トポロジー・ビューでは、WebSphere Commerce インスタンスは、ノード・エントリーの下に独立した WebSphere Commerce アプリケーション・サーバーとして表示されます。

この章のチェックリスト

- データベース・サーバーが実行中であることを確認します。
- Web サーバーが WebSphere Commerce と同じマシンにインストールされている場合は、Web サーバーが実行中であることを確認します。
- WebSphere Application Server が開始されていることを確かめます。

重要: WebSphere Application Server セキュリティーをオンにしている場合は、インスタンスを作成する前に使用不可にしなければなりません。

構成マネージャーの起動

構成マネージャーを開始するには、以下のステップを完了します。

1. ターミナル・ウィンドウをオープンします。
2. 55 ページの『インストール後スクリプトの実行』で作成された WebSphere Application Server ユーザーとしてログオンしていることを確認します。

```
su - wasuser
```
3. WebSphere Commerce マシン上で作業中の場合でも、表示をエクスポートします。

```
export DISPLAY=fully_qualified_host_name:0.0
```

システムが Can not open DISPLAY= と応答する場合、WebSphere Commerce マシンで次のコマンドを実行します。

```
xhost +host_name
```

host_name は、構成マネージャーのアクセス元にするマシンの完全修飾ホスト名です。

4. 以下のコマンドを発行します。

```
cd /opt/WebSphere/CommerceServer/bin  
./config_server.sh
```

注:

- a. `config_server.sh` コマンドを入力したターミナル・ウィンドウは閉じないでください。閉じると、構成マネージャー・サーバーが停止してしまいます。
 - b. 構成マネージャー・サーバーをバックグラウンド・プロセスとして実行しないでください。これはセキュリティ上の潜在的な危険になります。
5. 次のメッセージを待ちます。Registry created. CMServer bound in registry.
 6. ターミナル・ウィンドウをもう 1 つオープンします。
 7. 55 ページの『インストール後スクリプトの実行』で作成された WebSphere Application Server ユーザーとしてログオンしていることを確認します。

```
su - wasuser
```

8. WebSphere Commerce マシン上で作業中の場合でも、表示をエクスポートします。

```
export DISPLAY=fully_qualified_hostname:0.0
```
9. 以下のコマンドを発行します。

```
cd /opt/WebSphere/CommerceServer/bin  
./config_client.sh &
```

10. 構成マネージャーのユーザー ID とパスワードを入力するウィンドウが表示されます。構成マネージャーのデフォルト・ユーザー ID は `webadmin`、デフォルト・パスワードは `webibm` です。
11. 初回ログイン時に、パスワードを変更するよう促されます。

インスタンス作成ウィザード

インスタンスを作成するには、WebSphere Commerce 構成マネージャーで以下のようにします。

1. ホスト名を展開します。
2. 「インスタンス・リスト」をマウスの右ボタンでクリックします。
3. 表示されるポップアップ・メニューで、「インスタンスの作成」を選択します。
4. 「インスタンス作成ウィザード」がオープンします。以下の各パネルのフィールドに入力してください。

インスタンス

インスタンス名

インスタンスのために使用する名前。デフォルトの名前は `demo` です。

インスタンスのルート・パス

WebSphere Commerce インスタンスに関連するすべてのファイルを保存するパスを入力します。デフォルトのパスは、

`/opt/WebSphere/CommerceServer/instances/instance_name` です。

マーチャント鍵

これは、構成マネージャーが暗号鍵として使用する 16 桁の 16 進数です。

「**merchant key (マーチャント鍵)**」フィールドには、**ユーザー独自の鍵**を入力してください。特に実動サーバーの場合、サイト保護に十分な鍵を入力するようにしてください。ストアを作成した後は、この鍵を変更できるのは、**データベース更新ツール**を使用する場合だけです。このツールを使用するには、構成マネージャーにアクセスし、データベース・ノードをマウスの右マウス・ボタン・クリックして、「**データベース更新ツール**」を選択します。

PDI 暗号化

このチェック・ボックスは、`ORDPAYINFO` と `ORDPAYMTHD` のテーブルに指定された情報を暗号化することを指定するのに使います。このチェック・ボックスを選択すると、支払情報がデータベースに暗号化された形式で保管されます。

PVC ヘッダー使用可能

将来のリリースのために予約済み。

URL マッピング・ファイル

URL マッピングのために使用するファイルのパスを入力します。デフォルトのファイル `/opt/WebSphere/CommerceServer/xml/mapping/urlmapper.xml` をそのまま使用することもできます。

データベース

データベース管理者名

データベース管理者のユーザー名を入力します。代替りのデータベース管理者名を定義していなければ、これはインストールを実行する際に使用するユーザー名になります。

データベース管理者パスワード

データベース管理者のユーザー ID のパスワードを入力します。代替りのデータベース管理者名を定義していなければ、これはインストールを実行する際に使用するユーザー名のパスワードになります。

データベース管理者ホーム・ディレクトリー

データベース管理者のホーム・ディレクトリー。デフォルトは /home/db2inst1 です。

データベース・ユーザーのホーム・ディレクトリー

データベース・ユーザーのホーム・ディレクトリー。デフォルトは /home/db2inst1 です。

データベース名

データベースに割り当てる名前を入力するか、またはデフォルトを受け入れません。

DB2 の場合、デフォルトを受け入れるか、データベースに割り当てる名前を入力します。この名前の長さは 8 文字以下にしてください。

データベースに割り当てる名前として、デフォルトを受け入れるか、または入力します。この名前は、長さが 8 文字以下でなければなりません。

データベース・タイプ

このドロップダウン・リストには、使用しているデータベース管理システムが表示されます。サポートされているデータベースは DB2 Universal Database のみです。

データベース・ユーザー名

データベース管理者以外にデータベースの DB2 ユーザーを作成した場合は、そのユーザー ID をこのフィールドに入力することができます。作成していない場合は、データベース管理者と同じユーザー名を使用してください。

データベース・ユーザー・パスワード

上記のデータベース・ユーザー名に関連したパスワードです。

データベース・パフォーマンス・ウィザードの実行

DB2 データベース最適化を実行するため、「データベース・パフォーマンス・ウィザードの実行」チェック・ボックスを選択します。

ステージング・サーバーの使用

「ステージング・サーバーの使用」を選択すると、構成マネージャーは、このデータベースをステージング・サーバーで使用するものとして定義します。ス

テージング・サーバーについては、WebSphere Commerce のオンライン情報をご覧ください。(その情報にアクセスする方法については、171 ページの『オンライン・ヘルプの使用』を参照してください。)

アクティブ・データベースとして設定

WebSphere Commerce インスタンスでこのデータベースを使用する場合、このオプションをオンにします。インスタンスとして別のデータベースを使用する場合は、このオプションを使用不可にします。

リモート・データベースの使用

データベース・サーバーが WebSphere Commerce とは異なるノード上にある場合は、このチェック・ボックスを使用可能にします。

注: WebSphere Commerce とは別のノードにデータベース・サーバーをインストールした場合 (たとえば、2 層または 3 層の環境を構成している場合) は、このチェック・ボックスを選択する必要があります。

データベース・サーバー・ホスト名

このフィールドは、「リモート・データベースの使用」を選択した場合に使用可能です。データベースが存在するノードの完全修飾ホスト名を入力します。

データベース・サーバー・ポート

このフィールドは、「リモート・データベースの使用」を選択した場合に使用可能です。DB2 のデフォルト・ポートは、50000 です。DB2 のデフォルト・ポートは、50000 です。

データベース・ノード名

このフィールドは、「リモート・データベースの使用」を選択して、データベースとして DB2 を使用する場合に使用可能です。リモート・データベースのノードをまだカタログに入れていない場合は、ユーザーに代わって構成マネージャーがノードをカタログに入れます。

言語

構成マネージャーの「言語」パネルは、必要なすべての言語をサポートするようにデータベースを構成する場合に使います。ドロップダウン・リストからデフォルトの言語を選択します。デフォルトの言語に一致する `wcs.bootstrap_multi_xx_XX.xml` ファイルが「選択言語」ウィンドウに表示されるはずですが、追加言語へのサポートをデータベースに追加するには、以下のステップを完了します。

1. 「使用可能な言語」ウィンドウから、該当する言語の `.xml` ファイルを選択します。`.xml` ファイルは、`wcs.bootstrap_multi_xx_XX.xml` という形式です (xx_XX は選択する言語の 4 文字のロケール・コード)。
2. 「選択言語」ウィンドウを指す矢印をクリックします。選択した言語が「選択言語」ウィンドウに表示されます。
3. ステップ 1 と 2 を、サポートの必要な言語ごとに実行します。

注: 複数の言語をサポートするストア、たとえば英語でもスペイン語でも使用可能なストアを作成しようとする場合、ストアがサポートするすべての言語を選択する必要があります。この場合、「選択言語」ウィンドウには英語とスペイン語が両方ある必要があります。WebSphere Commerce で提供されるサンプル・ストアは複数の言語をサポートしています。「言語」パネルで 1 つの言語だけを選択する場合、実際は複数言語をサポートするサンプル・ストアの一定部分は表示されません。

Web サーバー

リモート Web サーバーの使用

Web サーバーを WebSphere Commerce サーバーとは別のマシンにインストールする場合は、このチェック・ボックスを選択します。このボックスが選択されると、Web サーバーは構成マネージャーでは構成されません。

注: WebSphere Commerce とは別のノードに Web サーバーをインストールした場合 (たとえば、3 層の環境を構成している場合) は、このチェック・ボックスを選択する必要があります。

ホスト名

デフォルトを受け入れるか、Web サーバー・マシンの完全修飾 ホスト名を入力します (完全修飾名は `hostname.domain.com` という形式です)。デフォルトは、WebSphere Commerce マシンのホスト名です。ホスト名フィールドには、`www` 接頭部を入力しないようにしてください。デフォルトのホスト名を受け入れる場合は、受け入れる前にデフォルトのホスト名が完全修飾されていることを確認してください。

Web サーバー・タイプ

ドロップダウン・リストから、使用する予定の Web サーバー・ソフトウェアを選択します。

1 次文書ルート

Web サーバーの文書ルートのパスとして、デフォルトをそのまま受け入れるか、または入力します。入力するパスは、既存のパスでなければなりません。

サーバー・ポート

WebSphere Commerce サーバーで使用するポート番号を入力します。デフォルト値は、80 です。

認証モード

この WebSphere Commerce インスタンスで使用する認証モードを選択します。選択肢は以下のとおりです。

基本 認証は、カスタム証明書を使って実行されます。

X.509 認証は、X.509 証明書規格を使って実行されます。

セキュア・サーバー構成パス

セキュア Web サーバー (ポート 443) 用の `obj.conf` ファイルのディレクトリ

ー・パスを入力します。このフィールドは、Web サーバーとして Netscape iPlanet を使用する場合のみ表示されます。リモート Web サーバーをご使用の場合には、このフィールドは表示されません。

非セキュア・サーバー構成パス

非セキュア Web サーバー (ポート 80) 用の obj.conf ファイルのディレクトリー・パスを入力します。このフィールドは、Web サーバーとして Netscape iPlanet を使用する場合のみ表示されます。リモート Web サーバーをご使用の場合には、このフィールドは表示されません。

セキュア・ツール・サーバー構成パス

このフィールドは、Netscape iPlanet を Web サーバー (ポート 8000) として選択した場合のみ表示されます。Netscape iPlanet セキュア・ツール・サーバーの obj.conf ファイルの絶対パスを入力します。リモート Web サーバーをご使用の場合には、このフィールドは表示されません。

WebSphere

データ・ソース名

WebSphere Commerce が作業するデータベースにアクセスするための接続プールのセットアップに使用します。

ポート番号

55 ページの『インストール後スクリプトの実行』で指定されているとおり、WebSphere Application Server が listen するポート・アドレスを入力します。デフォルトは 2222 です。

JDBC ドライバーの場所

システム上の db2java.zip ファイルの位置を入力するか、またはデフォルト値をそのまま受け入れます。

ストア Web アプリケーション

WebSphere Application Server において WebSphere Commerce Server の下にデフォルトのストア Web アプリケーションを構成する場合、これを選択します。

ツール Web アプリケーション

WebSphere Application Server において WebSphere Commerce Server の下にデフォルトのツール Web アプリケーションを構成する場合、これを選択します。

ツールのポート番号

WebSphere Commerce の管理ツールへのアクセスに使用されるポート番号。デフォルト・ポート番号は、8000 です。Domino Web サーバーをご使用の場合は、このポート番号を 443 に変更する必要があります。

WebSphere Catalog Manager

このチェック・ボックスを選択すると、WebSphere Catalog Manager WebEditor

がインストールされます。これには、`https://host_name:8000/wcm/webeditor` からアクセスできます。デフォルトで、これはインストールされます。

Payment Manager

ホスト名

Web サーバー・マシンの完全修飾ホスト名を入力します。デフォルトは、WebSphere Commerce のホスト名です。WebSphere Commerce からリモートの位置に Payment Manager または Web サーバーをインストールした場合は、Payment Manager が使用する Web サーバー・マシンの完全修飾ホスト名がこのフィールドに入っていることを確認してください。

プロファイル・パス

WebSphere Commerce Payment Manager Cashier の標準のプロファイルの保存先ディレクトリーの絶対パス名。デフォルト値は `/opt/WebSphere/CommerceServer/instances/instance_name/xml/payment` です。

非 SSL Payment Manager クライアントの使用

WebSphere Commerce に非 SSL Payment Manager クライアントを使用して Payment Manager サーバーと通信させる場合は、このチェック・ボックスをオンにします。それにより、WebSphere Commerce は、SSL を使わずに Payment Manager と通信できるようになります。

Web サーバー・ポート

Payment Manager が使用する Web サーバーの TCP ポートを入力します。「非 SSL Payment Manager クライアントの使用」チェック・ボックスを選択した場合、このフィールドのデフォルト値は 80 (非セキュア・ポート) です。「非 SSL Payment Manager クライアントの使用」チェック・ボックスをオンにしなかった場合、このフィールドのデフォルト値は 443 (SSL ポート) です。

Socks サーバーの使用

WebSphere Commerce が Payment Manager にアクセスするために Socks サーバーが必要な場合、このチェック・ボックスをオンにします。

Socks ホスト名

このフィールドは、「Socks サーバーの使用」チェック・ボックスを選択した場合に使用可能になります。Socks サーバーの完全修飾ホスト名を入力してください。

Socks ポート番号

このフィールドは、「Socks サーバーの使用」チェック・ボックスを選択した場合に使用可能になります。Socks サーバーが使用するポート番号を入力してください。

ログ・システム

トレース・ファイルの場所

これは、デバッグ情報の収集先となるファイルの場所です。その中には、英語のデバッグ・メッセージが入れられます。注: 「トレース・ファイルの場所」が「メッセージ・ファイルの場所」と同じときは、それらのファイルの内容はマージされます。

トレース・ファイル・サイズ

これは、トレース・ファイルの最大サイズ (MB) です。トレース・ファイルがこのサイズに達すると、別のトレース・ファイルが作成されます。

メッセージ・ファイルの場所

これは、WebSphere Commerce システムの状態を記述するメッセージの収集先ファイルの場所です。メッセージは、ロケールに依存します。注: 「トレース・ファイルの場所」が「メッセージ・ファイルの場所」と同じときは、それらのファイルの内容はマージされます。

メッセージ・ファイル・サイズ

これは、メッセージ・ファイルの最大サイズ (MB) です。メッセージ・ファイルがこのサイズに達すると、追加のメッセージ・ファイルが作成されます。

アクティビティ・ログ・キャッシュ・サイズ

アクティビティ・ログのキャッシュの最大サイズを入力します。

通知使用可能

エラー・レベル・メッセージが通知されるようにする場合には、このチェック・ボックスを選択します。それらのメッセージを受け取るには、WebSphere Commerce 管理コンソールでも通知情報を変更する必要があります。

メッセージング

ユーザー・テンプレート・ファイル

これは、新しいインバウンド XML メッセージがシステムでサポートされるようにするための XML メッセージ・テンプレート定義ファイルの名前です。このファイルには、サポートする新しい XML メッセージごとに 1 つのアウトラインを追加する必要があります。テンプレート・パス・ディレクトリーに保存されるデフォルトの `user_template.xml` を使用することをお勧めします。

インバウンド・メッセージ DTD パス

これは、インバウンド XML メッセージのすべての DTD ファイルの保存先となるパスです。デフォルトは `/opt/WebSphere/CommerceServer/xml/messaging` です。

WebController ユーザー ID

これは、すべての WebSphere Commerce MQSeries® アダプター・インバウンド・メッセージを実行するために WebSphere Commerce が使用する ID です。この ID は、サイト管理者権限が付与されたものでなければなりません。

デフォルトは `wcsadmin` です。ユーザー・テンプレート・ファイルとシステム・テンプレート・ファイルを更新するための権限は、許可された人だけに付与されるようにしてください。というのは、この ID の使用により WebSphere Commerce コマンドを実行するためにインバウンド XML メッセージをマッピングできるからです。

システム・テンプレート・ファイル

これは、WebSphere Commerce MQSeries アダプターによってサポートされるすべてのインバウンド XML メッセージのアウトラインを含む XML メッセージ・テンプレート定義ファイルの名前です。このファイルは、メッセージを該当する WebSphere Commerce コントローラー・コマンドにマッピングし、メッセージ内の各フィールドをそのコマンドの該当するパラメーターにマッピングすることにより、各メッセージのデータ・フィールドを定義します。テンプレート・パス・ディレクトリーに保存されるデフォルトの `sys_template.xml` を使用することをお勧めします。

テンプレート・パス

これは、ユーザー・テンプレート・ファイルとシステム・テンプレート・ファイルの保存先のパスです。デフォルトは `/opt/WebSphere/CommerceServer/xml/messaging` です。

インバウンド・メッセージ DTD ファイル

これは、インバウンド XML メッセージのための DTD および組み込みファイルのリストです。新しいインバウンド XML メッセージを追加する場合は、それをこのフィールドに追加する必要があります。

オークション

オークションを使用可能にする

オークションを使用可能にする場合、「使用可能」チェック・ボックスを選択します。

SMTP サーバー

E メール・メッセージを受け取るのに使う SMTP サーバーを定義します。

応答 E メール

送信側の E メール情報を定義します。

インスタンス作成の開始

すべてのパネルに必要な情報を入力したなら、「終了」ボタンが使用可能になります。「終了」をクリックすると、WebSphere Commerce インスタンスが作成されます。

システムの速度によって、インスタンスの作成に数分から数時間かかることがあります。インスタンス作成が開始されると進行状況表示バーが表示されます。プロセスが完了すると、そのことが進行状況表示バーに示されます。インスタンスが作成されると WebSphere Commerce は、そのインスタンスに関連する WebSphere Commerce Server

の開始を試行します。この試行が正常に完了したら、「OK」をクリックして、「インスタンス作成」ウィザードをクローズしてから、コンピューターを再始動します。

インスタンス作成の検査

インスタンスが正しく作成されたことを確認するには、以下のファイルを調べます。

- /opt/WebSphere/CommerceServer/instances/*instance_name*/xml/*instance_name.xml*。このファイルには、作成される WebSphere Commerce インスタンスについての構成情報がすべて入れられます。
- /opt/WebSphere/CommerceServer/instances/*instance_name*/logs/createdb.log。このファイルには、WebSphere Commerce データベース作成に関する情報が入れられます。
- /opt/WebSphere/CommerceServer/instances/*instance_name*/logs/populatedb.log。このファイルには、WebSphere Commerce データベース移植処理に関する情報が入れられます。
- /opt/WebSphere/CommerceServer/instances/*instance_name*/logs/WASConfig.log。このファイルには、WebSphere Application Server 中の新規 WebSphere Commerce インスタンスのインストールと構成に関する情報が入れられます。
- /opt/WebSphere/CommerceServer/instances/*instance_name*/logs/sec_check.log。このファイルには、機密漏れの可能性に関する情報が入れられます。
- /opt/WebSphere/CommerceServer/instances/*instance_name*/logs/wcs.log。このファイルには、WebSphere Commerce アプリケーション・サーバーの操作に関する情報が記録されます。このログを使用して、サーバーが正しく開始されたことを確認してください。

インスタンスの開始と停止

インスタンスが作成されると、インスタンスは自動的に開始されます。あとでインスタンスを変更する場合は、WebSphere Application Server 管理コンソールで、インスタンスの停止と再始動を行う必要があります。そのためには、以下のステップを完了します。

1. WebSphere Application Server 管理コンソールをオープンします。
2. **WebSphere Administrative Domain (WebSphere 管理可能ドメイン)** を展開します。
3. 「ノード」を展開します。
4. ホスト名を展開します。
5. 「**Application Servers (アプリケーション・サーバー)**」を展開します。
6. 「**WebSphere Commerce Server — *instance_name***」を選択し、右マウス・ボタン・クリックします。必要に応じて「**開始**」または「**停止**」を選択します。

構成の追加オプション

基本インスタンスを作成して開始したら、以下のノードで、WebSphere Commerce をさらに構成することができます。

インスタンス・プロパティ

インスタンス作成ウィザードで使用可能だったすべてのパネルが、「構成マネージャー」の「インスタンス・プロパティ」ノードの下に表示されます。以下のパネルは新規のものか、または「インスタンス作成ウィザード」パネルから変更されたものです。

データベース

構成マネージャーの「データベース」パネルを使用して、WebSphere Commerce を特定のデータベースで作業するように構成します。以下のようにフィールドに入力します。

データベース管理者名

データベース管理者の名前を入力します。

データベース管理者パスワード

データベース管理者のパスワードを入力します。

データベース管理者のホーム・ディレクトリー

データベース管理者のホーム・ディレクトリー。デフォルトは /home/db2inst1 です。

データベース・ユーザーのホーム・ディレクトリー

データベース・ユーザーのホーム・ディレクトリー。デフォルトは /home/db2inst1 です。

データベース名

このインスタンス用に作成するデータベースの名前を入力するか、または作成するインスタンスに関連付ける既存のデータベースの名前を入力します。

データベース・タイプ

データベース管理システムとして使用する製品を選択します。

データベース・ユーザー名

このデータベースのユーザー名を入力します。

データベース・ユーザー・パスワード

このデータベースのユーザー名に関連付けられているパスワードを入力します。

データベース・パフォーマンス・ウィザードの実行

DB2 Universal Database の最適化を実行するには、このチェック・ボックスを選択します。

ステージング・サーバーの使用

このデータベースをステージング・サーバーに使用する場合は、このチェック・ボックスを選択します。

アクティブ・データベースとして設定

このデータベースが WebSphere Commerce インスタンスで使用するデータベースの場合は、このチェック・ボックスを選択します。インスタンスの作成後、追加のデータベースを複数作成して、インスタンスで使用するものを選択することができます。

リモート・データベースの使用

データベース・サーバーが WebSphere Commerce とは異なるノード上にある場合は、このチェック・ボックスを使用可能にします。

注: WebSphere Commerce とは別のノードにデータベース・サーバーをインストールした場合は、このチェック・ボックスを選択する必要があります。(たとえば、2 層または 3 層の環境を構成している場合です。)

データベース・サーバー・ホスト名

このフィールドは、「リモート・データベースの使用」を選択した場合に使用可能です。データベースが存在するノードの完全修飾ホスト名を入力します。

データベース・サーバー・ポート

このフィールドは、「リモート・データベースの使用」を選択した場合に使用可能です。DB2 のデフォルト・ポートは、50000 です。DB2 のデフォルト・ポートは、50000 です。

データベース・ノード名

このフィールドは、「リモート・データベースの使用」を選択して、データベースとして DB2 を使用する場合に使用可能です。リモート・データベースのノードをまだカタログに入れていない場合は、ユーザーに代わって構成マネージャーがノードをカタログに入れます。

WebSphere

構成マネージャーの「WebSphere」パネルを使用して、WebSphere Application Server が WebSphere Commerce と対話する方法を構成します。以下のようにフィールドに入力します。

データ・ソース名

WebSphere Commerce が作業するデータベースにアクセスするための接続プールのセットアップに使用します。

ポート番号

WebSphere Application Server が接続されているポート・アドレスを入力します。55 ページの『インストール後スクリプトの実行』で指定されているとおり、WebSphere Application Server が listen するポート・アドレスを入力します。デフォルトは 2222 です。WebSphere Application Server の開始時に別のポートを指定していなければ、デフォルトを受け入れることができます。

JDBC ドライバーの場所

システム上の db2java.zip ファイルの場所を入力します。

ストア **Web** アプリケーション

WebSphere Application Server において WebSphere Commerce Server の下にデフォルトのストア Web アプリケーションを構成する場合、これを選択します。

ツール **Web** アプリケーション

WebSphere Application Server において WebSphere Commerce Server の下にデフォルトのツール Web アプリケーションを構成する場合、これを選択します。

ツールのポート番号

WebSphere Commerce の管理ツールへのアクセスに使用されるポート番号。デフォルト・ポート番号は、8000 です。Domino Web サーバーをご使用の場合は、このポート番号を 443 に変更する必要があります。

WebSphere Catalog Manager

このチェック・ボックスを選択すると、WebSphere Catalog Manager WebEditor がインストールされます。これには、http://host_name:8000/webeditor でアクセス可能です。デフォルトで、これはインストールされます。

Web サーバー

「Web サーバー」パネルの「一般」タブには、「インスタンス作成」ウィザードで表示されるバージョンのパネルと同じパラメーターが含まれています。

構成マネージャーの「Web サーバー」パネルを使って、WebSphere Commerce を Web サーバーを使用するように構成します。以下のようにフィールドに入力します。

リモート **Web** サーバーの使用

Web サーバーを WebSphere Commerce サーバーとは別のマシンにインストールする場合は、このチェック・ボックスを選択します。このボックスが選択されると、Web サーバーは 構成マネージャーでは構成されません。

注: WebSphere Commerce とは別のノードに Web サーバーをインストールした場合は、このチェック・ボックスを選択する必要があります。(たとえば、3 層の環境を構成している場合です。)

ホスト名

WebSphere Commerce インスタンスの完全修飾ホスト名を入力します (完全修飾は `hostname.domain.com` という形式です)。「ホスト名」フィールドに `www` を入力しないでください。デフォルトは、Web サーバーがインストールされているマシンの完全修飾ホスト名です。

Web サーバー・タイプ

ドロップダウン・リストから、使用する Web サーバー・ソフトウェアを選択します。

1 次文書ルート

Web サーバーの文書ルートのパスとして、デフォルトをそのまま受け入れるか、または入力します。入力するパスは、既存のパスでなければなりません。

サーバー・ポート

Web サーバーが実行されるポート番号を入力します。デフォルト値は、80 です。

認証モード

この WebSphere Commerce インスタンスで使用する認証モードを選択します。選択肢は以下のとおりです。

- 基本認証は、カスタム証明書を使って実行されます。
- X509 認証は、X509 証明書規格を使って実行されます。

セキュア・サーバー構成パス

セキュア Web サーバー (ポート 443) 用の `obj.conf` ファイルのディレクトリー・パスを入力します。このフィールドは、Web サーバーとして Netscape iPlanet を使用する場合のみ表示されます。リモート Web サーバーをご使用の場合には、このフィールドは表示されません。

非セキュア・サーバー構成パス

非セキュア Web サーバー (ポート 80) 用の `obj.conf` ファイルのディレクトリー・パスを入力します。このフィールドは、Web サーバーとして Netscape iPlanet を使用する場合のみ表示されます。リモート Web サーバーをご使用の場合には、このフィールドは表示されません。

セキュア・ツール・サーバー構成パス

このフィールドは、Netscape iPlanet を Web サーバー (ポート 8000) として選択した場合のみ表示されます。Netscape iPlanet セキュア・ツール・サーバーの `obj.conf` ファイルの絶対パスを入力します。リモート Web サーバーをご使用の場合には、このフィールドは表示されません。

「**拡張**」タブには、すべての Web サーバーの別名のリストが含まれています。新規の別名を追加するには、「**拡張**」タブを選択し、マウスの右ボタンでクリックして、

「**Add row (行の追加)**」を選択します。別名を削除するには、削除したい別名を選択し、マウスの右ボタンでクリックして、「**Delete row (行の削除)**」を選択します。

インスタンス

構成マネージャーの「インスタンス」パネルは、インスタンスに関する基本情報を指定するときに使用します。複数のインスタンスを作成する場合は、各インスタンスが異なる名前とルート・パスを持つようにしてください。

インスタンス名

WebSphere Commerce インスタンスに付ける名前を入力します。デフォルト名 "demo" を受け入れることもできます。この名前はあとで変更できないため、慎重に選んでください。

インスタンスのルート・パス

WebSphere Commerce インスタンスに関連するすべてのファイルを保存するパスを入力します。インスタンスが作成されたら、このパスを変更することはできません。デフォルト・パスは次のとおりです。

```
/opt/WebSphere/CommerceServer/instances/instance_name
```

マーチャント鍵

これは、構成マネージャーが暗号鍵として使用する 16 桁の 16 進数です。マーチャント鍵には 1 つ以上の英数字 (a ~ f) と 1 つ以上の数字 (0 ~ 9) が必要になります。英数字は小文字で入力しなければならず、1 行に 5 回以上同じ文字を入力することはできません。ストアを作成した後は、この鍵を変更できません。「**merchant key (マーチャント鍵)**」フィールドには、デフォルトの鍵がすでに入力されている場合でも、ユーザー独自の鍵を入力しなければなりません。特に実動サーバーの場合、サイト保護に十分な鍵を入力するようにしてください。

PDI 暗号化

ORDPAYINFO および ORDPAYMTHD テーブルに指定された情報を暗号化するには、このチェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択すると、支払情報がデータベースに暗号化された形式で保管されます。

PVC ヘッダー使用可能

将来のリリリースのために予約済み。

URL マッピング・ファイル

URL マッピングのために使用するファイルのパスを入力します。デフォルトのファイル `/opt/WebSphere/CommerceServer/properties/urlmapper.xml` をそのまま使用することもできます。

Payment Manager

ホスト名

Web サーバー・マシンのドメイン修飾ホスト名を入力します。デフォルトは WebSphere Commerce ホスト名です。リモート・マシンに Payment Manager をインストールしている場合は、このフィールドには Web サーバー・マシンの完全修飾ホスト名を入れてください。

プロファイル・パス

WebSphere Commerce Payment Manager Cashier の標準のプロファイルの保存先ディレクトリーの絶対パス名。デフォルト値は `/opt/WebSphere/CommerceServer/instances/instance_name/xml/payment` です。

非 SSL Payment Manager クライアントの使用

WebSphere Commerce に非 SSL Payment Manager クライアントを使用して Payment Manager サーバーと通信させる場合は、このチェック・ボックスをオ

にします。それにより、WebSphere Commerce Server は、SSL を使わずに Payment Manager と通信できるようになります。

Web サーバー・ポート

Payment Manager が使用する Web サーバーの TCP ポートを入力します。

「非 SSL Payment Manager クライアントの使用」をオンにした場合、このフィールドのデフォルト値は 80 (非セキュア・ポート) です。そのチェック・ボックスをオンにしなかった場合、このフィールドのデフォルト値は 443 (SSL ポート) です。

Socks サーバーの使用

WebSphere Commerce が Payment Manager にアクセスするために Socks サーバーが必要な場合、このチェック・ボックスをオンにします。

Socks ホスト名

このフィールドは、「**Socks サーバーの使用**」チェック・ボックスを選択した場合に使用可能になります。Socks サーバーの完全修飾ホスト名を入力してください。

Socks ポート番号

このフィールドは、「**Socks サーバーの使用**」チェック・ボックスを選択した場合に使用可能になります。Socks サーバーが使用するポート番号を入力してください。

メンバー・サブシステム

構成マネージャーの「メンバー・サブシステム」パネルを使用して、WebSphere Commerce をディレクトリー・サーバーを使用するように構成します。

認証モード

「LDAP」、「データベース」、または「その他」を選択して、認証の代替モードを選択します。「LDAP」を選択すると、このパネルの他のフィールドは使用できません。

LDAP バージョン

WebSphere Commerce Server が LDAP サーバーとの通信に使用する LDAP プロトコルのバージョン。

LDAP タイプ

WebSphere Commerce で使用するディレクトリー・サーバーのソフトウェアを選択します。

単一サインオン

WebSphere Application Server によってすでに認証済みのユーザーが WebSphere Commerce で認識されるようにするには、このチェック・ボックスを選択します。現時点では、単一サインオンは WebSphere Commerce によってサポートされていません。

ホスト LDAP サーバーがインストールされている場所を指定する完全修飾ホスト名。

ポート LDAP サーバーで使用されるポート。デフォルト・ポートは、389 です。

管理者識別名

LDAP サーバー管理者の識別名。

管理者のパスワード

LDAP サーバー管理者のパスワード。

確認パスワード

LDAP 管理者のパスワードを再入力します。

LDAP 認証モード

LDAP サーバーが使用する認証メカニズムを指定します。「なし」の場合は、WebSphere Commerce は LDAP サーバーに認証されないことになります。「シンプル」の場合は、WebSphere Commerce は LDAP サーバーへの認証に識別名とパスワードを使用することになります。

タイムアウト

LDAP の検索がタイムアウトになるまでの時間 (秒数)。

エントリー・ファイル名

LDAP サーバーの初期設定に使用されるエントリー・ファイル。

メッセージング

ユーザー・テンプレート・ファイル

これは、新しいインバウンド XML メッセージがシステムでサポートされるようにするための XML メッセージ・テンプレート定義ファイルの名前です。このファイルには、サポートする新しい XML メッセージごとに 1 つのアウトラインを追加する必要があります。テンプレート・パス・ディレクトリーに保存されるデフォルトの `user_template.xml` を使用することをお勧めします。

インバウンド・メッセージ DTD パス

これは、インバウンド XML メッセージのすべての DTD ファイルの保存先となるパスです。デフォルトは `/opt/WebSphere/CommerceServer/xml/messaging` です。

WebController ユーザー ID

これは、すべての WebSphere Commerce MQSeries アダプター・インバウンド・メッセージを実行するために WebSphere Commerce が使用する ID です。この ID は、サイト管理者権限が付与されたものでなければなりません。デフォルトは `wcsadmin` です。ユーザー・テンプレート・ファイルとシステム・テンプレート・ファイルを更新するための権限は、許可された人だけに付与されるようにしてください。というのは、この ID の使用により WebSphere Commerce コマンドを実行するためにインバウンド XML メッセージをマッピングできるからです。

システム・テンプレート・ファイル

これは、WebSphere Commerce MQSeries アダプターによってサポートされる

すべてのインバウンド XML メッセージのアウトラインを含む XML メッセージ・テンプレート定義ファイルの名前です。このファイルは、メッセージを該当する WebSphere Commerce コントローラー・コマンドにマッピングし、メッセージ内の各フィールドをそのコマンドの該当するパラメーターにマッピングすることにより、各メッセージのデータ・フィールドを定義します。テンプレート・パス・ディレクトリーに保存されるデフォルトの `sys_template.xml` を使用することをお勧めします。

テンプレート・パス

これは、ユーザー・テンプレート・ファイルとシステム・テンプレート・ファイルの保存先のパスです。デフォルトは `/opt/WebSphere/CommerceServer/xml/messaging` です。

インバウンド・メッセージ DTD ファイル

これは、インバウンド XML メッセージのための DTD および組み込みファイルのリストです。新しいインバウンド XML メッセージを追加する場合は、それをこのフィールドに追加する必要があります。

セッション管理

構成マネージャーの「セッション管理」パネルには、以下に示す 2 つのタブがあります。

「一般」タブ:

cookie 使用可能

このチェック・ボックスは、サイトがセッション管理に cookie を使用するよう指定します。これは、WebSphere Commerce の場合は、常に使用可能になっています。

URL 再書き込み使用可能

セッション管理に URL 再書き込みを使用する場合は、このチェック・ボックスを選択します。

cookie 受け入れテスト

ショッピングのブラウザーが、cookie のみサポートしているサイトの cookie を受け入れるかどうか調べる場合は、このチェック・ボックスを選択します。

cookie セッション・マネージャー

cookie の管理に、WebSphere Commerce と WebSphere Application Server の、どちらを使用するかを選択することができます。デフォルトは WebSphere Commerce です。

「拡張」タブ:

cookie パス

cookie のパスを指定します。これは cookie の送信先の URL のサブセットです。

cookie 有効期限

このフィールドは変更できません。デフォルトでは、ブラウザがクローズされたときに cookie の有効期限が切れます。

cookie ドメイン

ドメインの制限パターンを指定します。cookie を受け取るサーバーを、ドメインで指定します。デフォルトでは、cookie はその発信元の WebSphere Commerce サーバーだけに返送されます。

セキュリティー

セキュリティーは、構成マネージャーを介して構成できます。

セキュリティー使用可能

EJB セキュリティーを使用可能にするには、このチェック・ボックスを選択します。

注: このチェック・ボックスを選択する前に、WebSphere Application Server 内でグローバル・セキュリティー設定を有効にしてください。

認証モード

ユーザーの認証に使用するレジストリーのタイプを決定します。オペレーティング・システムのユーザー・レジストリーと LDAP のユーザー・レジストリーがあります。

ユーザー ID

各 EJB にアクセスできるユーザー名を入力します。

ユーザー・パスワード

上記のユーザー ID に関連付けられているパスワードを入力します。

パスワード無効化

パスワード無効化機能を使用可能または使用不可にするには、「構成マネージャー」の「パスワード無効化」ノードを使用します。この機能を使用可能にすると、WebSphere Commerce ユーザーのパスワードの有効期限が切れると、そのユーザーはパスワードの変更を要求されます。その場合、ユーザーは、パスワードの変更が必要となるページにリダイレクトされます。ユーザーは、パスワードの変更を完了するまで、そのサイトのどのセキュア・ページにもアクセスすることができません。この機能を使用可能にするには、以下のようにします。

1. 構成マネージャーの「パスワード無効化」ノードに移動します。これは、「*instance_name*」→「**インスタンス・プロパティ**」の下にあります。
2. パスワード無効化機能をアクティブにするには、「**使用可能**」チェック・ボックスをクリックします。
3. インスタンスの変更を適用するには、「**適用**」をクリックします。
4. インスタンスの構成が正常に更新されると、更新が正常に行われたことを示すメッセージが表示されます。

ログイン・タイムアウト

構成マネージャーの「ログイン・タイムアウト」ノードを使って、ログイン・タイムアウト機能を使用可能または使用不可にします。この機能を使用可能にすると、長時間にわたって非アクティブの WebSphere Commerce ユーザーは、システムからログオフされ、ログオンし直すように要求されます。その後ユーザーが正常にログオンすると、WebSphere Commerce は、そのユーザーによって行われていた元の要求を実行します。ユーザーのログオンが失敗した場合は、元の要求は廃棄され、そのユーザーはシステムからログオフされたままになります。この機能を使用可能にするには、以下のようにします。

1. 「構成マネージャー」を呼び出し、次のようにして、インスタンスの「ログイン・タイムアウト」ノードに移動します。
 「WebSphere Commerce」 → 「*host_name*」 → **「インスタンス・リスト」**
 → 「*instance_name*」 → **「インスタンス・プロパティ」** → **「ログイン・タイムアウト」**
2. ログイン・タイムアウト機能をアクティブにするには、「使用可能」チェック・ボックスをクリックします。
3. 「ログイン・タイムアウト値」フィールドに、ログイン・タイムアウト値を秒単位で入力します。
4. インスタンスの変更を適用するには、「適用」をクリックします。
5. インスタンスの構成が正常に更新されると、更新が正常に行われたことを示すメッセージが表示されます。

パスワード保護されたコマンド

「パスワード保護されたコマンド」機能を使用可能または使用不可にするには、「構成マネージャー」の「パスワード保護されたコマンド」ノードを使用します。この機能を使用可能にすると、WebSphere Commerce は、まずパスワードを入力してから、指定した WebSphere Commerce コマンドの実行要求を続行するよう登録済みユーザーに求めます。この機能を使用可能にするには、以下のようにします。

1. 構成マネージャーをオープンし、次のようにして、インスタンスの「パスワード保護されたコマンド」ノードに移動します。
 「WebSphere Commerce」 → 「*host_name*」
 → **「インスタンス・リスト」** → 「*instance_name*」 → **「インスタンス・プロパティ」** → **「パスワード保護されたコマンド」**
2. 「一般」タブで、以下のようにします。
 - a. 「パスワード保護されたコマンド」機能をアクティブにするには、「使用可能」をクリックします。
 - b. 「再試行」フィールドに再試行の回数を入力します。（デフォルトの再試行回数は 3 です。）
3. 「拡張」タブで、以下のようにします。
 - a. 保護したい WebSphere Commerce コマンドを「Password Protected Command List (パスワード保護されたコマンドのリスト)」ウィンドウのリストから選択して、

「追加」をクリックします。選択したコマンドが「Current Password Protected List (現行のパスワード保護されたコマンドのリスト)」ウィンドウにリストされます。

- b. いずれかの WebSphere Commerce コマンドのパスワード保護を使用不可にしたい場合は、「Current Password Protected Command list (現行のパスワード保護されたコマンドのリスト)」ウィンドウにあるコマンドを選択して、「除去」をクリックします。
4. インスタンスの変更を適用するには、「適用」をクリックします。
 5. インスタンスの構成が正常に更新されると、更新が正常に行われたことを示すメッセージが表示されます。

注: WebSphere Commerce では、使用可能コマンドのリストの CMDREG テーブルで「認証済み」として指定されているコマンドのみ表示します。

サイト間スクリプト保護

サイト間スクリプト保護機能を使用可能または使用不可にするには、「構成マネージャー」の「サイト間スクリプト保護」ノードを使用します。この機能を使用可能にすると、許可しないものとして指定されている属性または文字を含むユーザー要求は、すべて拒否されます。構成マネージャーのこのノードで、許可しない属性と文字を指定することができます。この機能を使用可能にするには、以下のようになります。

1. 構成マネージャーをオープンし、次のようにして、インスタンスの「サイト間スクリプト保護」ノードに移動します。
「WebSphere Commerce」→「*host_name*」→「インスタンス・リスト」
→「*instance_name*」→「インスタンス・プロパティ」→「サイト間スクリプト保護」
2. サイト間スクリプト保護機能をアクティブにするには、次のように「一般」タブを使用します。
 - a. 「使用可能」をクリックします。
 - b. WebSphere Commerce コマンドで許可しない属性を追加するには、「禁止属性」テーブルをマウスの右ボタンでクリックして、「行の追加」を選択します。許可しない属性をコンマ (,) で区切って追加します。たとえば、`user_id, passwd` のようになります。
 - c. 「禁止属性」テーブルから属性を除去するには、そのテーブルにあるその属性を含む行を強調表示して、それをマウスの右ボタンでクリックし、「行の削除」を選択します。
 - d. WebSphere Commerce コマンドで許可しない文字を追加するには、「禁止文字」テーブルをマウスの右ボタンでクリックして、「行の追加」を選択します。許可しない文字をコンマ (,) で区切って追加します。たとえば、`<, >` のようになります。

- e. 「禁止文字」テーブルから文字を除去するには、「禁止文字」テーブルにあるその文字を含む行を強調表示して、それをマウスの右ボタンでクリックし、「**行の削除**」を選択します。
3. 選択した WebSphere Commerce コマンドの指定した属性のサイト間スクリプト保護を使用不可にするには、次のように「**拡張**」タブを使用します。
 - a. 「**コマンド・リスト**」ボックスからコマンドを選択します。
 - b. 属性をコマンドで区切ったリストを入力します。それらについては、「**例外属性のリスト**」ウィンドウで禁止文字が許可されます。「**追加**」をクリックします。
 - c. コマンドをその属性とともに除去するには、「**例外コマンドのリスト**」ウィンドウからそのコマンドを選択して、「**除去**」をクリックします。属性を選択して「**除去**」をクリックすることにより、コマンドから特定の属性を除去することもできます。
 4. 構成マネージャーへの変更を適用するには、「**適用**」をクリックします。
 5. インスタンスの構成が正常に更新されると、更新が正常に行われたことを示すメッセージが表示されます。

取引

取引は、構成マネージャーを介して構成できます。

XML パス

取引コンポーネント用の xml ファイルが保管される場所のパス。

DTD パス

取引コンポーネント用の dtd ファイルが保管される場所のパス。

DTD ファイル名

取引コンポーネント用の dtd ファイル名。

コラボレーション - SameTime

Lotus Sametime は、カスタマー・ケアのコラボレーションを可能にします。これは、顧客サービス担当者とストアの顧客またはバイヤーの間で、Lotus Sametime を使用して、同期テキスト・インターフェース (インスタント・メッセージング (IM)) を介した顧客サービス・リアルタイム・サポートを提供します。

使用可能

カスタマー・ケアのコラボレーション機能をサイトで使用可能にする場合は、このチェック・ボックスを選択します。

ホスト名

Sametime サーバーの完全修飾ホスト名を入力します (完全修飾は hostname.domain.com という形式です)。「ホスト名」フィールドに www を入力しないでください。デフォルトは、WebSphere Commerce サーバーがインストールされているマシンの完全修飾ホスト名です。

登録 URL

Sametime サーバーの登録 URL を入力します。サイト管理者は、WebSphere Commerce 管理コンソールのユーザー・リスト「Register Customer Care (カスタマー・ケアの登録)」ボタンを使用して、Sametime サーバーにお客様サービス担当者を登録できます。

アプレット CodeBase URL

すべてのアプレット・コードが配置されているアプレット CodeBase URL を入力します。アプレット・コードが Sametime サーバー・マシンにインストールされていることを確認してください。

モニター・タイプ

カスタマー・ケア・アプレットで使用するモニターのタイプを選択します。

- 待ち状態のキューをモニターする。
- ストアのすべてのショッパーをモニターする。
- 待ち状態のキューおよびストアのすべてのショッパーをモニターする。

デフォルトは、待ち状態のキューのモニターです。

開始タイプ

カスタマー・ケアのコラボレーション中にヘルプ要求を開始できる人物を選択します。

- ショッパーがヘルプを開始する。
- 顧客と CSR の両方がヘルプを開始する。

ヘルプ・セッション限度

顧客サービス担当者が一度にオープンできるヘルプ・セッションの数を設定する値を入力します。この値は整数でなければなりません。デフォルト値は 7 です。

コラボレーション・ワークスペース - ディレクトリー・アクセス

▶ Business

ディレクトリー・アクセスを適正に構成するためには、メンバー・サブシステムの認証モードとして LDAP を指定しなければなりません。

BaseDN

WebSphere Commerce メンバー・サブシステムで使用される LDAP の接尾部です (例、o= ルート組織)。

コラボレーション・ワークスペース - QuickPlace

Business

QuickPlace は、チーム・コラボレーションに使用されるセルフサービスの Web ツールです。QuickPlace によって、Web 上に安全な中央ワークスペースをただちに作成できます。即時に参加できるように構造化されているため、チームは QuickPlace を使用して以下のことを実行できます。

- 調整: 人々、タスク、計画、およびリソース。
- コラボレート: アイデアの共用とディスカッション、問題の解決、文書の共著、ファイルの交換、および情報共有の管理。
- 通信: アクションと決定、キー検索とレッスン、広範囲の読者を対象とした出版知識。

チームは、プロジェクト管理、随時イニシアチブに対する迅速な応答、および拡張された企業と値のチェーンに及ぶ個別のビジネス・プロセスを促進するために QuickPlace を使用します。

ドメイン

QuickPlace サーバーのドメイン。

ホスト名

QuickPlace サーバーのホスト名。

管理者ログイン

Domino 管理者のログイン名の末尾 /domain を追加したもの。

管理者のパスワード

Domino 管理者のパスワード。

コラボレーション管理者

コラボレーション・ワークスペース機能のスーパーユーザーのログイン名の末尾に /domain を追加したもの。

コラボレーション管理パスワード

コラボレーション・ワークスペースのスーパーユーザーのパスワード。

ロケール

QuickPlace サーバーのロケール。

コンポーネント

WebSphere Commerce インスタンスのために作成されたすべてのコンポーネントのリストを含むコンポーネント・ノード。コンポーネントを選択して「Enable Component (コンポーネント使用可能)」チェック・ボックスを選択することにより、任意のコンポーネントを使用可能または使用不可にすることができます。個々のコンポーネントについての詳細は、WebSphere Commerce のオンライン・ヘルプを参照してください。

このノードで、コンポーネントの作成または削除も行うことができます。コンポーネントを除去するには、それを選択し、マウスの右ボタンをクリックして「**コンポーネントの除去**」を選択します。コンポーネントを追加するには、「**コンポーネント**」を選択し、マウスの右ボタンをクリックして、「**コンポーネントの作成**」を選択します。そのコンポーネントに付ける名前、およびそのコンポーネントに関連付けるクラスを入力して、「**コンポーネント使用可能**」を選択します。

保護パラメーター

保護パラメーターとは、WebSphere Commerce で生成されるトレース・ファイルの中のプレーン・テキストには値が現れないパラメーターのことです。これらには、クレジット・カード番号やユーザー・パスワードなどの機密情報が含まれています。構成マネージャーの「保護パラメーター」パネルには、現在保護されているすべてのパラメーターのリストが表示されます。

このリストにパラメーターを追加するには、以下のステップを完了します。

1. 「保護パラメーター」パネルでマウスの右ボタンをクリックして、「**行の追加**」を選択します。
2. 作成されているテーブルの行に、保護するパラメーターの名前を入力します。
3. 「**適用**」をクリックします。

このリストからパラメーターを除去するには、パラメーターをマウスの右ボタンでクリックして、「**行の削除**」を選択します。

レジストリー

レジストリーは通常、データベースに保管される、比較的静的な情報をキャッシュに入れるために使用されます。RequestServlet の初期化の際に、レジストリー・マネージャーが、構成マネージャーを介して定義されたすべてのレジストリーを、WebSphere Commerce の内部定義されたレジストリーとともに初期化します。データベース情報は、パフォーマンスの向上のためにレジストリー内のキャッシュに入れられます。

レジストリーを作成するには、「**レジストリー**」をマウスの右ボタンでクリックして、「**レジストリーの作成**」を選択します。これにより「レジストリーの作成」ウィザードが起動します。以下のようにフィールドに入力します。

レジストリー名

作成するレジストリーに割り当てる名前を入力します。

レジストリー・クラス名

新規のレジストリーに関連付けるクラスの名前を入力します。

オークション

オークションを使用可能にする

オークションを使用可能にする場合、「使用可能」チェック・ボックスを選択します。

SMTP サーバー

E メール・メッセージを受け取るのに使う SMTP サーバーを定義します。

応答 E メール

送信側の E メール情報を定義します。

外部サーバー・リスト

外部サーバー・リストには、デフォルトの LikeMinds サーバー・アドレスが含まれています。また、外部イベントを処理するリスナー・クラスのリストも含まれています。

LikeMinds リスナーは、デフォルトで追加されています。このリスナーにより、外部イベントが LikeMinds サーバーに追加されます。

Commerce アクセラレーター

構成マネージャーの Commerce アクセラレーター・ノードを使用すると、WebSphere Commerce のビジネス・インテリジェンス・コンポーネントを構成して、それを WebSphere Commerce Analyzer に組み込むことができます。Commerce Analyzer は、WebSphere Commerce に付属のオプションのソフトウェア・パッケージです。Commerce Analyzer のインストールと構成についての詳細は、*WebSphere Commerce 追加ソフトウェア・ガイド* を参照してください。

ビジネス・インテリジェンスを構成するには、以下のフィールドに入力します。

統計ソース

統計データが保持されているマシンの完全修飾ホスト名を入力します。これは、実動サーバーかステージング・サーバーのどちらかにすることができます。デフォルト値は、WebSphere Commerce がインストールされているマシンです。

WebSphere Commerce Analyzer はインストールされていますか?

Commerce Analyzer をインストールし、構成してある場合に、それを WebSphere Commerce で使用するには、「はい」を選択します。

レポート文書ルート

Commerce Analyzer によって作成されるレポートを保管する場所のパスを入力します。このフィールドに入力されたパスは、インスタンス・ディレクトリー・ルートの終わりに付加されます。デフォルトのパスは、`/opt/WebSphere/CommerceServer/instances/instance_name` です。

ログ・システム

「ログ・システム」ノードの「一般」タブには、インスタンス作成ウィザードに含まれているすべてのパラメーターが含まれています。「拡張」タブを使用すると、トレース・ファイルに出力するコンポーネントを、トレース・ファイルに含める障害追跡のレベルとともに選択できます。トレースするコンポーネントとそのトレース・レベルを選択して、「適用」をクリックします。

個々のコンポーネントについての詳細は、WebSphere Commerce のオンライン・ヘルプを参照してください。

キャッシング・サブシステム

構成マネージャーのキャッシュ・ノードを使用して、キャッシュの構成、キャッシュへのコマンドの追加、コマンドからの鍵セットの除去、および鍵セットからの鍵の除去を行うことができます。

キャッシュ・ノードを選択して、適切な値を入力することにより、キャッシュを構成します。これらの値についての追加情報は、構成マネージャーの「ヘルプ」をクリックするか、または「Caching Parameters (キャッシュ・パラメーター)」でのオンライン・ヘルプで参照してください。

キャッシュにコマンドを追加するには、キャッシュ・ウィザードを使用します。このウィザードを起動するには、「キャッシュ」をマウスの右ボタンでクリックして、「**Add a command to cache (キャッシュへコマンドを追加)**」を選択します。3つのパネルのフィールドをすべて入力して、すべてのパラメーターを入力したら「終了」をクリックします。キャッシュからコマンドを除去するには、除去するコマンドを選択してマウスの右ボタンでクリックし、「**Remove a command from the cache (キャッシュからコマンドを除去)**」を選択します。

鍵セットを削除するには、削除する鍵セットを選択してマウスの右ボタンでクリックして、「このキャッシュされたコマンドから鍵セットを削除」を選択します。鍵を削除するには、関連する鍵セットを選択します。「拡張」タブで削除する鍵を選択し、マウスの右ボタンでクリックして、「**行の削除**」を選択します。

ストア・サービス構成

ストア・サービスを利用すると、WebSphere Commerce 付属のサンプルに基づくストア・アーカイブを短時間で作成できます。ストア・サービスの使用方法に関する追加情報については、WebSphere Commerce のオンライン・ヘルプを参照してください。

構成マネージャーの「ストア・サービス構成」ノードを使用して、ストア・サービスの以下の3つのパラメーターを構成できます。

一時パス

ストア・サービスが、一時ファイルを発行時にコピーする際に使用するディレ

クトリーです。発行が完了したら、それらのファイルはこのディレクトリーから自動的に除去されます。デフォルト・ディレクトリーは、`/opt/WebSphere/CommerceServer/tools/devtools/temp` です。

最大エラー

発行プロセスがストア・データのロード中に許容できるエラーの最大数です。この数を越えた場合は、発行が停止してロールバックします。デフォルト値は、1 です。

コミット・カウント

この数は発行時に使用されます。レコードの各コミット・カウント数がロードされた後、データベースがコミットされます。データの中にエラーがあると、データベースは最新のコミット・ポイントまでロールバックされます。ロードするデータの量に応じてこの数を変更してください。その場合、コミット・カウントをアーカイブ内の行の数より大きな数に設定すると、ロールバックが発生した場合に、アーカイブ全体がロールバックされることとなります。デフォルト値は、1000 です。

トランスポート

デフォルトでは、E メール・トランスポート・システムが使用可能になっています。ただし、エラーの発生を防ぐために、メール・ホストを設定する必要があります。E メール・ホストを設定するには、以下のステップを完了します。

1. 「トランスポート」、「アウトバウンド」、「**JavaMail**」と展開して、「**ConnectionSpec**」を選択します。
2. 「**拡張**」タブを選択します。
3. ホストの行の値のフィールドに、SMTP メール・サーバーの完全修飾ホスト名を入力します。
4. プロトコルの行の値のフィールドに、値として `smtp` がリストされていることを確認してください。
5. 「**適用**」をクリックします。
6. WebSphere Application Server 管理コンソールで WebSphere Commerce Server を停止してから、再始動します。

アウトバウンド・トランスポートまたはインバウンド・トランスポートの対話仕様の構成には、構成マネージャーは使用できません。トランスポート関連の作業については、オンライン・ヘルプを参照してください。

インバウンド・トランスポート接続仕様を構成するには、「接続仕様」パネルの「**拡張**」タブを選択して、必要に応じてその情報を変更します。トランスポート・パラメーターに関する追加情報は、オンライン・ヘルプを参照してください。

ライセンス・ユーザー管理

「ライセンス・ユーザー管理 (LUM)」パネルは、WebSphere Commerce について購入したストア・ライセンスの数を入力するために使用します。以下のようにフィールドに入力します。

ストア・ライセンス

購入したライセンスの数を入力します。

ハード・ストップ

購入したライセンスの数を超えないように WebSphere Commerce で防止するには、「ハード・ストップ」をオンにします。

ソフト・ストップ

購入したライセンスの数を超えた場合に WebSphere Commerce によって警告メッセージが表示されるようにするには、「ソフト・ストップ」をオンにします。

次のステップ

WebSphere Commerce インスタンスを構成して開始したら、システムのセットアップを終了するために、87 ページの『第 10 章 構成後のステップ』のステップを完了する必要があります。その章のステップを完了しないと、WebSphere Commerce Accelerator または WebSphere Commerce 管理コンソールにアクセスできません。

第 10 章 構成後のステップ

この章には、WebSphere Commerce の構成を終了するために完了する必要があるすべてのステップが記載されています。この章は 2 つのセクションに分かれています。1 つは Web サーバーが WebSphere Commerce と同じマシンにある構成の場合であり、もう 1 つは Web サーバーが WebSphere Commerce からリモートの位置にある構成の場合です。ご使用の構成に一致するセクションの該当するステップをすべて完了してください。

ローカル Web サーバーの構成後のステップ

このセクションでは、以下の作業について説明します。

- テストのための SSL の使用可能化 (すべてのユーザー)
- Payment Manager を WebSphere Commerce とともに作動するように構成する (すべてのユーザー)
- JavaServer Pages™ ファイルのコンパイル (すべてのユーザー)

テスト用セキュリティ鍵ファイルの作成

このセクションで作成したセキュリティ鍵ファイルは、ショッパーのトランザクションが無許可の個々のユーザーに対して表示されないように保護するわけではありませんが、ストアを作成するのに必要です。ストアをショッパーに対してオープンする前に、107 ページの『第 12 章 IBM HTTP Server との実動用に SSL を使用可能にする』の手順に従ってください。

このセクションでは、IBM HTTP Server を使って鍵ファイルを作成する方法を説明します。別の Web サーバーを使用している場合は、そのマニュアルを参照して SSL を使用可能にする方法を決定してください。

テスト用セキュリティ鍵ファイルを作成するには、以下のようになります。

1. 136 ページの『IBM HTTP Server の開始と停止』の説明に従って、IBM HTTP Server を停止します。
2. オペレーティング・システムに SuSE Linux Enterprise Server を使用している場合は、テキスト・エディターで以下のファイルをオープンします。

```
/usr/local/ibm/gsk5/bin/gsk5ikm
```

196 番目の行を以下に置き換えます。

```
type -p $JAVA_HOME/bin/java 2>&1 > /dev/null
```

3. 以下のコマンドを実行して、`JAVA_HOME` をエクスポートします。

```
DISPLAY=host_name:0.0
export DISPLAY
JAVA_HOME=/opt/WebSphere/AppServer/java
export JAVA_HOME
```

ここで、`host_name` は、現在使用しているマシンの完全修飾のホスト名です。

4. `/usr/bin/ikeyman` コマンドを実行して、「**IBM Key Management (IBM 鍵管理)**」ウィンドウをオープンします。「**IBM Key Management (IBM 鍵管理)**」ウィンドウで、「**Key Database File (鍵データベース・ファイル)**」メニューをクリックして、「**新規**」を選択します。
5. IBM 鍵管理の「**新規**」ウィンドウで、ファイル名 (`keyfile.kdb`) とファイルの場所 (`/opt/IBMHTTPServer/ssl`) を入力します。「**OK**」をクリックします。
6. 「**Password Prompt (パスワード・プロンプト)**」ウィンドウが表示されます。
7. IBM HTTP Server パスワードを入力および確認し、「**Stash the password to a file (パスワードをファイルに隠す)**」をオンにします。「**OK**」をクリックします。
8. 「**作成**」メニューをクリックし、「**New Self-Signed Certificate (新規自己署名証明書)**」を選択します。
9. 表示されるウィンドウで、オプション以外のすべてのフィールドに入力します。「**OK**」をクリックして、IBM 鍵管理ユーティリティーをクローズします。
10. 136 ページの『IBM HTTP Server の開始と停止』に説明されている方法で、IBM HTTP Server を開始します。

作成した鍵をテストするには、次の URL にアクセスしてください。

```
https://host_name.domain.com
```

Payment Manager を WebSphere Commerce とともに作動するように構成する

Payment Manager を WebSphere Commerce とともに作動するように構成するには、以下のようになります。

1. WebSphere Application Server 管理コンソールをオープンします。

```
su - wasuser
export DISPLAY=host_name:0.0
cd /opt/WebSphere/AppServer/bin
./adminclient.sh host_name port_number
```

ここで、`host_name` は使用するマシンの完全修飾名、`port_number` は 55 ページの『インストール後スクリプトの実行』で指定されている、WebSphere Application Server にアクセスする際に使用するポートです。デフォルトは 2222 です。

2. 以下のようにして、別名を作成します。
 - a. **WebSphere Administrative Domain (WebSphere 管理可能ドメイン)** を展開します。
 - b. 「**Virtual Hosts (仮想ホスト)**」を選択します。
 - c. 右側のパネルで `default_host` を選択します。
 - d. 「**一般**」タブで、「**追加**」をクリックします。
 - e. 「**別名**」フィールドに `*:443` と入力し、「**適用**」をクリックします。

注: SSL を使用可能にしない場合は、WebSphere Commerce インスタンスの作成時に、WebSphere Commerce 構成マネージャーの Payment Manager 設定ページ内で、WebSphere Commerce サーバーが非 SSL Payment Manager クライアントを使用するよう構成しなければなりません。インスタンスを作成した後で Payment Manager 設定を変更することもできますが、変更内容を有効にするために、インスタンスを再始動する必要があります。

3. 以下のようにして、Web サーバー・プラグインを再生成します。
 - a. コマンド行で、次のディレクトリーに移動します。

```
/opt/WebSphere/AppServer/bin
```

- b. 以下のコマンドを実行します。

```
./GenPluginCfg.sh -adminNodeName node_name -nameServicePort port_number
```

ここで、*node_name* はノードの短い論理名、*port_number* は、55 ページの『インストール後スクリプトの実行』で指定されている、WebSphere Application Server にアクセスする際に使用するポートです。(デフォルトでは、インストール後スクリプトはポート 2222 を使用します。)

4. WebSphere Application Server を停止します。WebSphere Application Server を停止するには、135 ページの『WebSphere Application Server の開始と停止』の指示に従います。

注: ステップ 4 ~ 6 が必要とされるのは、Payment Manager が WebSphere Commerce と同じマシンにインストールされている場合だけです。

5. テキスト・エディターで、以下のファイルをオープンします。

```
/opt/WebSphere/AppServer/config/plugin-cfg.xml
```

6. `plugin-cfg.xml` ファイルの `<Config>` の下に、以下の行を直接追加します。

```
<Property Name="CacheLibrary" value="/opt/WebSphere/CommerceServer/bin/libwccache.so" />
```

7. Web サーバーを停止してから、再始動します。IBM HTTP Server を使用する場合は、136 ページの『IBM HTTP Server の開始と停止』を参照して追加情報を調べてください。

8. WebSphere Application Server を始動します。 WebSphere Application Server を開始するには、以下のようにします。

```
su - wasuser
export DISPLAY=fully_qualified_host_name:0.0
cd /opt/WebSphere/AppServer/bin
./startupServer.sh
```

JavaServer Pages ファイルのコンパイル

この時点で JavaServer Pages ファイルをコンパイルすることをお勧めします。

JavaServer Pages ファイルをコンパイルすれば、WebSphere Commerce ツールのロードにかかる時間が大幅に短縮されます。 JavaServer Pages (JSP) ファイルのバッチ・コンパイルを実行するには、以下のようにします。

1. 必ず `wasuser` としてログインします。
2. コマンド・プロンプトで、`/opt/WebSphere/CommerceServer/bin` に切り替えます。
3. 以下のコマンドを実行します。

注: `enterpriseApp`、`webModule`、または `nameServerHost` 名にスペースが含まれている場合は、以下のように二重引用符で囲まなければなりません。

```
./WCSJspBatchCompiler.sh -enterpriseApp "WebSphere
Commerce Enterprise Application - instance_name"
-webModule "WCS Tools" -nameServerHost short_host_name
-nameServerPort port_number
```

ここで、`instance_name` は WebSphere Commerce インスタンスの名前 (デフォルトは `demo`)、`short_host_name` は WebSphere Commerce マシンの名前、および `port_number` は 55 ページの『インストール後スクリプトの実行』で指定されたポート (デフォルトは 2222) です。

それらのコンパイルを実行すると、いくつかのエラーが発生することがあります。これらのエラーは無視しても安全です。

リモート Web サーバーの構成後のステップ

このセクションでは、以下の作業について説明します。

- テストのための SSL の使用可能化 (すべてのユーザー)
- IBM HTTP Server のインストールの完了 (すべての IBM HTTP Server ユーザー)
- Web サーバーへの資産のコピー (すべてのユーザー)
- Payment Manager を WebSphere Commerce とともに作動するように構成する (すべてのユーザー)
- JavaServer Pages ファイルのコンパイル (すべてのユーザー)

テスト用に SSL を使用可能にする

このセクションで作成したセキュリティー鍵ファイルは、ショッパーのトランザクションが無許可の個々のユーザーに対して表示されないように保護するわけではありませんが、ストアを作成するのに必要です。顧客に対してストアをオープンする前に、107ページの『第12章 IBM HTTP Server との実動用に SSL を使用可能にする』の指示に従ってください。

このセクションでは、IBM HTTP Server を使って鍵ファイルを作成する方法を説明します。別の Web サーバーを使用している場合は、そのマニュアルを参照して SSL を使用可能にする方法を決定してください。

テスト用セキュリティー鍵ファイルを作成するには、以下のようになります。

1. 136 ページの『IBM HTTP Server の開始と停止』の説明に従って、IBM HTTP Server を停止します。
2. オペレーティング・システムに SuSE Linux Enterprise Server を使用している場合は、テキスト・エディターで以下のファイルをオープンします。

```
/usr/local/ibm/gsk5/bin/gsk5ikm
```

196 番目の行を以下に置き換えます。

```
type -p $JAVA_HOME/bin/java 2>&1 > /dev/null
```

3. IBM HTTP Server が WebSphere Application Server からリモートの位置にインストールされている場合は、以下のステップを実行して IBM HTTP Server 構成ファイルを変更してください。
 - a. ディレクトリーを /opt/IBMHTTPServer/conf に移動します。
 - b. httpd.conf をテキスト・エディターでオープンします。
 - c. 以下の行のコメントを解除します。
 - 1) #LoadModule ibm_ssl_module ;。ここで *encryption-level* は、ロケールに応じた適切な暗号化のレベルです。
 - 2) #Listen 443
 - 3) #<VirtualHost host.some_domain.com:443>。この行を完全修飾ホスト名に置き換える必要もあります。
 - 4) #SSLEnable
 - 5) #</VirtualHost>
 - 6) #SSLDisable
 - 7) Keyfile "/opt/IBMHTTPServer/ssl/keyfile.kdb"
 - 8) #SSLV2Timeout 100
 - 9) #SSLV3Timeout 1000
 - d. 変更を保管します。

4. 「**IBM Key Management (IBM 鍵管理)**」ウィンドウで、「**Key Database File (鍵データベース・ファイル)**」メニューをクリックして、「**新規**」を選択します。
5. IBM 鍵管理の「**新規**」ウィンドウで、ファイル名 (keyfile.kdb) とファイルの場所 (/opt/IBMHTTPServer/ssl) を入力します。「**OK**」をクリックします。
6. 「**Password Prompt (パスワード・プロンプト)**」ウィンドウが表示されます。
7. IBM HTTP Server パスワードを入力および確認し、「**Stash the password to a file (パスワードをファイルに隠す)**」をオンにします。「**OK**」をクリックします。
8. 「**作成**」メニューをクリックし、「**New Self-Signed Certificate (新規自己署名証明書)**」を選択します。
9. 表示されるウィンドウで、オプション以外のすべてのフィールドに入力します。「**OK**」をクリックして、IBM 鍵管理ユーティリティをクローズします。
10. 136 ページの『IBM HTTP Server の開始と停止』に説明されている方法で、IBM HTTP Server を開始します。

作成した鍵をテストするには、次の URL にアクセスしてください。

`https://host_name.domain.com`

IBM HTTP Server インストールの完了

WebSphere Application Server とは別のマシンにある Web サーバーとして IBM HTTP Server を使用する場合は、このセクションのステップを完了する必要があります。3 層構成では、Web サーバー・マシンにある httpd.conf ファイルは自動的に構成されません。必要な別名を含むサンプル・ファイル (unixaliases.txt) は、Software_Patches ディレクトリーの WebSphere Commerce Disk 2 CD にあります。httpd.conf ファイルは、手動で編集する必要があります。

IBM HTTP Server を停止し、/opt/IBMHTTPServer/conf/httpd.conf ファイルのバックアップを作成します。/opt/IBMHTTPServer/conf/httpd.conf ファイルをオープンし、以下に示す変更を行います。置き換えるものは次のとおりです。

- ディレクトリー
- インスタンス名
- 言語
- ホスト名
- IP アドレス

これらについては、サンプルにリストされているものを、ご使用のシステムの値に変更してください。

1. 置換前:

```
<Directory>
Options FollowSymLinks
AllowOverride None
</Directory>
```

置換後:

```
##### IBM WebSphere Commerce #####
#Instance name : instance_name
<Directory "HTTP_dir/htdocs/en_US">
Options Indexes
AllowOverride None
order allow,deny
allow from all
</Directory>
<Directory WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear/wctools.war>
<Files *.jsp>
order allow,deny
deny from all
</Files>
</Directory>
<Directory WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear/wcstores.war>
<Files *.jsp>
order allow,deny
deny from all
</Files>
</Directory>
<Directory WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear/wcwebeditor.war>
<Files *.jsp>
order allow,deny
deny from all
</Files>
</Directory>
```

2. Listen 443 で始まる行の下に、以下の行を追加します。

注: 下記の各行が途中で改行されているのは、単に読みやすくするためです。Alias で始まる各行、またはパスを含む各行 (*WCS_dir/web/doc* など) は、*httpd.conf* ファイルでは 1 行で表示されなければなりません。

```
##### IBM WebSphere Commerce (Do not edit this section)#####
Listen 8000
##### End of IBM WebSphere Commerce (Do not edit this section) ###
## VirtualHost: Allows the daemon to respond to requests for more than
## one server address, if your server machine is configured to accept IP
## packets for multiple addresses. This can be accomplished with the
## ifconfig alias flag, or through kernel patches like VIF.
#
## Any httpd.conf or srm.conf directive may go into a VirtualHost command.
## See also the BindAddress entry.
#
##### IBM WebSphere Commerce #####
#Instance name : instance_name
<VirtualHost webserver_IP_address>
ServerName fully_qualified_webserver_name
DocumentRoot "HTTP_dir/htdocs"
Alias /wcsdoc      "WCS_dir/web/doc"
Alias /wchelp      "WCS_dir/web/doc/en_US"
Alias /storeservices "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear
/wctools.war/tools/devtools/storeservices.html"
```

```

Alias /adminconsole "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear
/wctools.war/tools/adminconsole/wcsadmincon.html"
Alias /wcsstore "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear
/wcstores.war"
Alias /accelerator "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear
/wctools.war/tools/common/accelerator.html"
Alias /orgadminconsole "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear
/wcstores.war/tools/buyerconsole/wcsbuyercon.html"
Alias /wcs "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear
/wctools.war"
Alias /webeditor "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear
/wcwebeditor.war"
</VirtualHost>
<VirtualHost webserver_IP_address:443>
SSLEnable
SSLClientAuth 0
ServerName fully_qualified_webserver_name
DocumentRoot "HTTP_dir/htdocs"
Alias /wcsdoc "WCS_dir/web/doc"
Alias /wchelp "WCS_dir/web/doc/en_US"
Alias /storeservices "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear
/wctools.war/tools/devtools/storeservices.html"
Alias /adminconsole "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear
/wctools.war/tools/adminconsole/wcsadmincon.html"
Alias /wcsstore "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear
/wcstores.war"
Alias /accelerator "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear
/wctools.war/tools/common/accelerator.html"
Alias /orgadminconsole "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear
/wcstores.war/tools/buyerconsole/wcsbuyercon.html"
Alias /wcs "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear
/wctools.war"
Alias /webeditor "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear/
wcwebeditor.war"
</VirtualHost>
<VirtualHost webserver_IP_address:8000>
SSLEnable
SSLClientAuth 0
ServerName fully_qualified_webserver_name
DocumentRoot "HTTP_dir/htdocs"
Alias /wcsdoc "WCS_dir/web/doc"
Alias /wchelp "WCS_dir/web/doc/en_US"
Alias /storeservices "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear
/wctools.war/tools/devtools/storeservices.html"
Alias /adminconsole "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear
/wctools.war/tools/adminconsole/wcsadmincon.html"
Alias /wcsstore "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear
/wcstores.war"
Alias /accelerator "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear
/wctools.war/tools/common/accelerator.html"
Alias /orgadminconsole "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear
/wcstores.war/tools/buyerconsole/wcsbuyercon.html"
Alias /wcs "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear
/wctools.war"
Alias /webeditor "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear

```

```
/wcwebeditor.war"  
</VirtualHost>  
##### End of IBM WebSphere Commerce #####
```

Payment Manager を WebSphere Commerce とともに作動するように構成する

Payment Manager を WebSphere Commerce とともに作動するように構成するには、以下のようにします。

1. WebSphere Application Server 管理コンソールをオープンします。

```
su - wasuser  
export DISPLAY=host_name:0.0  
cd /opt/WebSphere/AppServer/bin  
./adminclient.sh host_name port_number
```

ここで、*host_name* は使用するマシンの完全修飾名、*port_number* は 55 ページの『インストール後スクリプトの実行』で指定されている、WebSphere Application Server にアクセスする際に使用するポートです。デフォルトは 2222 です。

2. 以下のようにして、別名を作成します。
 - a. **WebSphere Administrative Domain (WebSphere 管理可能ドメイン)** を展開します。
 - b. 「**Virtual Hosts (仮想ホスト)**」を選択します。
 - c. 右側のパネルで *default_host* を選択します。
 - d. 「**一般**」タブで、「**追加**」をクリックします。
 - e. 「**別名**」フィールドに **:443* と入力し、「**適用**」をクリックします。

注: SSL を使用可能にしない場合は、WebSphere Commerce インスタンスの作成時に、WebSphere Commerce 構成マネージャーの Payment Manager 設定ページ内で、WebSphere Commerce サーバーが非 SSL Payment Manager クライアントを使用するよう構成しなければなりません。インスタンスを作成した後で Payment Manager 設定を変更することもできますが、変更内容を有効にするために、インスタンスを再始動する必要があります。

3. Payment Manager アプリケーション・サーバーを選択します。「**JVM Settings (JVM 設定)**」タブにおいて、「**System Properties (システム・プロパティ)**」リストで、*wpmui.PaymentServerHostname* を編集して、それが Web サーバーの完全修飾ホスト名を参照するようにし、「**適用**」をクリックします。
4. Payment Manager ディレクトリー (*/opt/PaymentManager*) で *WCSRealm.properties* ファイルを編集し、*WCSHostname* パラメーターが Web サーバーの完全修飾ホスト名を参照するようにします。
5. 以下のようにして、インスタンス構成ファイルの Payment Manager パラメーターが、リモート Web サーバーを指し示すようにします。
 - a. テキスト・エディターで、以下のファイルをオープンします。

```
/opt/WebSphere/CommerceServer/instances/instance_name
/xml/instance_name.xml
```

- b. Payment Manager セクションを検索します。
 - c. このセクションの中で、<hostname> ディレクティブが、Payment Manager によって使用される Web サーバーの完全修飾ホスト名を指し示すようにします。
6. WebSphere Application Server を停止します。 WebSphere Application Server を停止するには、135 ページの『WebSphere Application Server の開始と停止』の指示に従います。

注: ステップ 6 ~ 8 が必要とされるのは、Payment Manager が WebSphere Commerce と同じマシンにインストールされている場合だけです。

7. テキスト・エディターで、以下のファイルをオープンします。
- ```
/opt/WebSphere/AppServer/config/plugin-cfg.xml
```
8. plugin-cfg.xml ファイルの <Config> の下に、以下の行を直接追加します。
9. 更新済み構成ファイルを WebSphere Commerce マシンから Web サーバーにコピーします。
- ```
/opt/WebSphere/AppServer/config/plugin-cfg.xml
```
10. Web サーバーと Payment Manager を停止してから、再始動します。 IBM HTTP Server を使用する場合は、136 ページの『IBM HTTP Server の開始と停止』を参照して追加情報を調べてください。
11. WebSphere Application Server を始動します。 WebSphere Application Server を開始するには、以下のようになります。

JavaServer Pages ファイルのコンパイル

この時点で JavaServer Pages ファイルをコンパイルすることをお勧めします。 JavaServer Pages ファイルをコンパイルすれば、WebSphere Commerce ツールのロードにかかる時間が大幅に短縮されます。 JavaServer Pages (JSP) ファイルのバッチ・コンパイルを実行するには、以下のようになります。

1. 必ず wasuser としてログインします。
2. コマンド・プロンプトで、/opt/WebSphere/CommerceServer/bin に切り替えます。
3. 以下のコマンドを実行します。

注: *enterpriseApp*、*webModule*、または *nameServerHost* 名にスペースが含まれている場合は、以下のように二重引用符で囲まなければなりません。

```
./WCSJspBatchCompiler.sh -enterpriseApp "WebSphere
Commerce Enterprise Application - instance_name"
-webModule "WCS Tools" -nameServerHost short_host_name
-nameServerPort port_number
```


ここで、*instance_name* は WebSphere Commerce インスタンスの名前 (デフォルトは demo)、*short_host_name* は WebSphere Commerce マシンの名前、および *port_number* は 55 ページの『インストール後スクリプトの実行』で指定されたポート (デフォルトは 2222) です。

それらのコンパイルを実行すると、いくつかのエラーが発生することがあります。これらのエラーは無視しても安全です。

次のステップ

WebSphere Commerce の構成を完了するために必要なステップをすべて終了したら、続いて以下のいずれか 1 つ以上を行います。

- ストア・サービスを使って、独自のストアを作成して発行します。ストア・サービスの使用法については、WebSphere Commerce のオンライン・ヘルプを参照してください。WebSphere Commerce のオンライン・ヘルプへのアクセスについては、171 ページの『付録 C. 詳細情報の入手方法』に記載されています。
- 典型的なストアの構築方法を理解するために、WebSphere Commerce で用意されているデモンストレーション・ストアの InFashion を発行します。ストア・サービスを使って InFashion を発行します。ストア・サービスの使用法については、WebSphere Commerce のオンライン・ヘルプを参照してください。WebSphere Commerce のオンライン・ヘルプへのアクセスについては、171 ページの『付録 C. 詳細情報の入手方法』に記載されています。
- 次のような追加オプションを構成します。

- 107 ページの『第 12 章 IBM HTTP Server との実動用に SSL を使用可能にする』
- 111 ページの『第 13 章 複数の WebSphere Commerce インスタンスの作成』
- 117 ページの『第 14 章 WebSphere Application Server のセキュリティーを使用可能にする』
- 123 ページの『第 15 章 複製』
- 129 ページの『第 16 章 単一サインオン』

追加オプションの構成については、99 ページの『第 6 部 オプション構成』に記載されています。

- WebSphere Commerce には、追加のソフトウェアが含まれています。次の製品のインストールおよび構成に関する情報は、*IBM WebSphere Commerce 追加ソフトウェア・ガイド* にあります。
 - DB2 Text Extender
 - WebSphere Commerce Analyzer
 - Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) を WebSphere Commerce とともに使用する
 - SilkPreview

- LikeMinds Personalization Server
- Sametime
- QuickPlace

重要

Payment Manager を使用する前に、少なくとも一度 WebSphere Commerce 管理コンソールにログインすることをお勧めします。 WebSphere Commerce 管理コンソールにログインするには、次のページに移動します。

`https://host_name :8000/adminconsole`

デフォルトの管理コンソールのユーザー ID (wcsadmin)、およびデフォルトのパスワード (wcsadmin) を入力します。初回ログイン時に、パスワードを変更するよう促されます。

第 6 部 オプション構成

WebSphere Commerce Suite インスタンスを構成した後、付加的なオプションの構成ができます。これらのタスクを実行する方法については、以下の章で説明します。

- 101 ページの『第 11 章 サンプル・ストア・アーカイブからストアを作成する』
- 107 ページの『第 12 章 IBM HTTP Server との実動用に SSL を使用可能にする』
- 111 ページの『第 13 章 複数の WebSphere Commerce インスタンスの作成』
- 117 ページの『第 14 章 WebSphere Application Server のセキュリティーを使用可能にする』
- 123 ページの『第 15 章 複製』
- 129 ページの『第 16 章 単一サインオン』

付加的なオプションを構成し終わったら、ストア・サービスを使用してストアの作成と発行を開始できます。また、典型的なストアの構築方法を理解するために、WebSphere Commerce で用意されているデモンストレーション・ストアの InFashion を発行することもできます。ストア・サービスの使用法については、WebSphere Commerce オンライン・ヘルプを参照してください。WebSphere Commerce のオンライン・ヘルプへのアクセスについては、171 ページの『付録 C. 詳細情報の入手方法』に記載されています。

第 11 章 サンプル・ストア・アーカイブからストアを作成する

この章では、WebSphere Commerce に付属のストア・アーカイブの 1 つからサンプル・ストアを作成するプロセスを示します。さらに別のストアの作成方法やストアのカスタマイズについては、WebSphere Commerce のオンライン・ヘルプをご覧ください。

WebSphere Commerce において、オンライン・ストアを作成するための最も速くて簡単な方法は、WebSphere Commerce に付属のサンプル・ストアの 1 つを使用し、ストア・サービスで利用できるブラウザー・ベースのツールを使用することです。サンプル・ストアは、ストア・アーカイブとして提供されています。

ストア・アーカイブは、ストアの作成に必要な資産すべて (Web 資産やデータベース資産を含む) が含まれている圧縮ファイルです。独自のストアを作成するには、サンプル・ストア・サービスの 1 つに基づいて、ストア・サービスのツールを使用して新しいストア・アーカイブを作成します。新しいストア・アーカイブはサンプル・ストア・アーカイブに基づくものなので、それはサンプル・ストア・アーカイブに含まれる資産の正確なコピーを、新しいファイル名およびディレクトリー構造で保存したものです。

この時点で、2 種類の選択肢があります。つまり、ストア・アーカイブをコマース・サーバーに対して発行することによりサンプル・ストアの 1 つに基づく機能的ストアを作成する方法と、まず新しいストア・アーカイブに変更を加えてから、それをサーバーに対して発行する方法です。

ストア・アーカイブ中のデータベース情報を変更するには、資産を直接編集するか、またはストア・サービスのツール (「ストア・プロファイル」ノートブック、「税」ノートブック、および「配送」ノートブック) を使います。

ストア・アーカイブに含まれる Web 資産 (ストア・ページ) を変更したり、新しい Web 資産を作成したりするには、WebSphere Commerce Studio のツール、またはその他の選択したツールを使用します。

ストアの作成については、*IBM WebSphere Commerce ストア開発者ガイド* をご覧ください。

サンプル・ストアのいずれかを使用してストアを作成するには、以下のようにします。

1. ストア・アーカイブを作成します。
2. ストア・アーカイブを発行します。

ストア・アーカイブの作成

サンプル・ストアのいずれかを使用してストア・アーカイブを作成するには、以下のようになります。

1. 以下が実行中であることを確認してください。
 - DB2
 - Web サーバーで必要とされるすべてのサービス
 - WebSphere Application Server
 - WebSphere Application Server 管理コンソールで、以下のものが開始済みであることを確認します。
 - Websphere Commerce Server - *instance_name*
 - WebSphere Payment Manager
2. 次のようにして Payment Manager を始動します。
 - a. コマンド・ウィンドウを開き、IBM Payment Manager がインストールされているディレクトリに移動します。
 - b. 以下のコマンドを入力します。

```
./IBMPayServer
```

Payment Manager が Web サーバーからリモートの位置にあるマシンにインストールされている場合は、以下のコマンドを使用してこれを開始させてください。

```
./IBMPayServer -pmhost fully_qualified_web_server_host_name
```

Payment Manager のパスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。これは Payment Manager データベースへの接続時に使用するよう指定したユーザーのパスワードです。

3. Microsoft Internet Explorer 5.5 をオープンしてから以下の URL を入力して、「ストア・サービス」を開始します。

```
https://host_name.domain.com:8000/storeservices
```

「ストア・サービス・ログオン」ページが表示されます。デフォルトのインスタンス管理者ユーザー ID (wcsadmin) とデフォルトのパスワード (wcsadmin) を入力して、「ログオン」をクリックします。初回ログイン時に、パスワードを変更するよう促されます。

4. 「ストア・アーカイブの作成」ページが表示されます。「ストア・アーカイブ」フィールドに、ストア・アーカイブの名前を入力します。入力した名前に拡張子 .sar が付けられます (例えば *Mystore.sar*)。この名前がストア・アーカイブのファイル名になります。ストア・アーカイブの作成が終了すると、それは以下の場所に保管されます。

```
/opt/WebSphere/CommerceServer/instances/instance_name/sar
```

5. 「ストア・ディレクトリー」フィールドに、ストアのディレクトリー名を入力します。このディレクトリー名は、サーバー上で Web 資産の発行先となるディレクトリーを定義するものです。ストア・アーカイブが発行されると、デフォルトとして、それはここで定義するストア・ディレクトリーに発行されます。例えば、「ストア・ディレクトリー」フィールドにディレクトリー名 "Mystore" を入力した場合、以下のディレクトリーが作成されます。

```
/opt/WebSphere/AppServer/installedApps/WC_Enterprise_App_  
instance_name.ear/wcstores.war/Mystore
```

6. **Business** 「ストア所有者」ドロップダウン・リストから、ストアの所有者である組織を選択します (例えば、「Seller Organization (セラー組織)」)。

注: 「デフォルト組織」は、購買組織を持たない顧客のために提供されています。デフォルト組織をストア所有者として選択しないでください。

7. 「View (表示)」ドロップダウン・リストから、表示したいサンプル・ストアを選択します。
8. 「サンプル」リスト・ボックスから、ストアの基本となるストア・アーカイブを選択します。「サンプルの説明」ボックスに、サンプルの説明が表示されます。サンプル・ストアをまず表示するには、「プレビュー」をクリックします。
9. 「OK」をクリックします。
10. ストア・アーカイブの作成が正常に完了したことを知らせるダイアログ・ボックスがオープンします。「OK」をクリックします。
11. 「ストア・アーカイブの発行」リストが表示されます。作成したストア・アーカイブがリスト中に表示されており、「ストア名」フィールドの名前がサンプル・ストアの名前と同じであることを注意してください。この名前は、「ストア・プロフィール」ノートブックを使って変更できます。

これで、サンプル・ストアに基づく新しいストア・アーカイブが作成されました。その結果、新しいストア・アーカイブには、サンプル・ストアと同じ内容が含まれることになります。独自のストアを作成する場合は、その情報を変更することになります。その情報を変更する方法については、WebSphere Commerce のオンライン・ヘルプと *IBM WebSphere Commerce* ストア開発者ガイド をご覧ください。このマニュアルでは、今のところその情報を変更しないでおいてください。

ストア・アーカイブの発行

ストア・アーカイブを WebSphere Commerce Server に対して発行すると、実際に稼働するストアを作成できます。ストア・アーカイブの発行には、2 種類の方法があります。

- ストア・サービスからストア・アーカイブを発行する
- コマンド行からストア・アーカイブを発行する

ここでは、ストア・サービスからの発行についてのみ説明します。発行については詳しくは、WebSphere Commerce のオンライン・ヘルプ、および *IBM WebSphere Commerce* ストア開発者ガイド をご覧ください。

ストア・サービスからストア・アーカイブを発行する

ストア・アーカイブを WebSphere Commerce Server に対して発行すると、実際に稼働するストアを作成できます。ストア・アーカイブを発行するには、以下のようになります。

1. 以下が実行中であることを確認してください。
 - DB2
 - Web サーバーで必要とされるすべてのサービス
 - WebSphere Application Server
 - WebSphere Application Server 管理コンソールで、以下のものが開始済みであることを確認します。
 - Websphere Commerce Server - *instance_name*
 - WebSphere Payment Manager
2. Payment Manager が実行中でなければ、次のようにして IBM Payment Manager を始動します。
 - a. コマンド・ウィンドウを開き、IBM Payment Manager がインストールされているディレクトリーに移動します。
 - b. 以下のコマンドを入力します。

```
./IBMPayServer
```

Payment Manager が Web サーバーからリモートの位置にあるマシンにインストールされている場合は、以下のコマンドを使用してこれを開始させてください。

```
./IBMPayServer -pmhost fully_qualified_web_server_host_name
```

Payment Manager のパスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。これは、*payman* データベースに接続する際に使用するよう指定したユーザーのパスワードです。
3. サイト管理者またはストア管理者のアクセス権が必要です。ストア管理者のアクセス権が付与されている場合は、すべてのストアに対するアクセス権があることを確認してください。
4. 「ストア・サービス」の「ストア・アーカイブ」リストで、発行したいストア・アーカイブの横のチェック・ボックスを選択します。
5. 「発行」をクリックします。「ストア・アーカイブの発行」ページが表示されます。
6. 発行オプションを選択します。発行オプションについては、「ヘルプ」をご覧ください。

注:十分に機能するストアを作成するためには、ストア・アーカイブを初めて発行する時点で、商品データ・オプションを含むすべての発行オプションを選択してください。

7. 「OK」をクリックします。ストアが発行されると、「ストア・アーカイブ」リストのページに戻ります。「発行の状況」の列に、発行の状態が示されます。システムの速度によって、発行プロセスに数分かかることがあります。「最新表示」をクリックすると、状況が更新されます。
8. リストからストア・アーカイブを選択し、「発行の要約」をクリックすると、発行の結果が表示されます。
9. Web サーバーが WebSphere Commerce マシンに対してリモートにある場合は、以下のディレクトリーの内容 (サブディレクトリーも含む) を WebSphere Commerce マシンから Web サーバー・マシンにコピーしてください。

```
/opt/WebSphere/AppServer/installedApps/  
WC_Enterprise_App_instance_name.ear/wcstores.war/Mystore
```

Web サーバー・マシン側で、このディレクトリーの中にある JSP ファイルをすべて削除してください。
10. 発行が完了したら、「ストアの立ち上げ」をクリックしてストアを表示し、テストしてください。完了したら、そのサイトにブックマークを付けてブラウザをクローズします。

JavaServer Pages ファイルのコンパイル

JavaServer Pages をコンパイルすれば、ストアのロードにかかる時間が大幅に短縮されます。JavaServer Pages (JSP) ファイルのバッチ・コンパイルを実行するには、WebSphere Commerce マシン上で以下を行ってください。

1. コマンド・プロンプトで、`/opt/WebSphere/CommerceServer/bin` に切り替えます。
2. 以下のコマンドを実行します。

```
./WCSJspBatchCompiler.sh -enterpriseApp "WebSphere  
Commerce Enterprise Application - instance_name"  
-webModule "WCS Stores" -nameServerHost "short_host_name"  
-nameServerPort port_number
```

それらのコンパイルを実行すると、いくつかのエラーが発生することがあります。これらのエラーは無視しても安全です。

重要:

- 一度に発行できるストア・アーカイブは 1 つだけです。複数同時の発行はサポートされておらず、同時発行すると、どのストアの発行も失敗します。
- 発行中に、整合性検査ルーチンにより、ストア・アーカイブによって参照されているファイルが存在するかどうかを確認されます。エラーがあると、ログにそのエラーが書き込まれます。発行は、通常のとおり継続されます。

- ストアを再発行する場合は、その前にディレクトリー
`/opt/WebSphere/CommerceServer/instances/instance_name/cache` からファイルを削除してください。

ストア開発段階では、キャッシングをオフにしてください。そうするには、構成マネージャの「Caching (キャッシング)」パネルをオープンして、「Enable Cache (キャッシュの使用可能化)」が選択解除されていることを確認します。

- ストア・サービスからストアを立ち上げる場合、ストア・サービスへのログインで使ったのと同じユーザー名とパスワードを使用してストアにログインします。ストアでパスワードを変更すると、そのユーザーのパスワードも変更することになります。あるいは、パスワードの変更も含めてストアの機能をテストする場合は、そのサイトにブックマークを付け、ブラウザをクローズしてから、再度ストアにログオンしてください。さらに、ブラウザで以下の URL を入力することによって、ストアを立ち上げることもできます。

`https://host_name/webapp/wcs/stores/store_directory/index.jsp`

ストアにテスト・オーダーを発行する

ストアにテスト・オーダーを発行するには、以下のようにします。

1. Web サーバーが WebSphere Commerce サーバーとは別のマシンにインストールされている場合は、必ず、WebSphere Commerce サーバーにある発行済みストアのディレクトリーを Web サーバーにコピーし、ストアを立ち上げる前に JSP をすべて削除してください。
2. 以下のようにして、ストアをオープンします。
 - a. 「ストア・サービス」ウィンドウで、特定のストアを選択して「発行の要約」をクリックします。
 - b. 「発行の要約」画面で、「ストアの立ち上げ」を選択します。
 - c. ストアの Web アプリケーションの Web パスを尋ねるウィンドウがオープンします。適切なパスを入力します (デフォルトは `/webapp/wcs/stores` です)。
 - d. ストアの場所を Web ブラウザーのブックマークに登録します。
 - e. 開いていた Web ブラウザーをすべてクローズして、新しく Web ブラウザーをオープンします。
 - f. ストアのホーム・ページにナビゲートします。
3. ホーム・ページで、商品を選択します。商品ページで、「ショッピング・カートに追加」をクリックします。
4. オーダー・プロセスを完了します。テストでは、VISA のクレジット・カード番号として 0000000000000000 (16 個のゼロ) を使用できます。オーダーが完了していれば、オーダーの確認のページが表示されます。

第 12 章 IBM HTTP Server との実動用に SSL を使用可能にする

WebSphere Commerce インスタンスと IBM HTTP Server をともに作成し終わると、SSL はテストのために使用可能になります。サイトをショッパーに対してオープンする前に、この章の以下のステップを実行して、SSL を実動用に使用可能にしなければなりません。

セキュリティーについて

IBM HTTP Server は暗号化テクノロジーを使用して、商取引のための機密保護機能のある環境を提供します。暗号化とは、インターネット上の情報トランザクションをスクランブルし、受信側がスクランブル解除するまで判読不能にすることです。送信側は算法パターンつまり鍵を使用してトランザクションをスクランブル (暗号化) し、受信側は復号鍵を使用します。これらの鍵は、Secure Sockets Layer (SSL) プロトコルで使用されます。

Web サーバーは認証プロセスを使用して、ビジネス上の取引をしている個人の識別を検証します (つまり、当人が呼称されるとおりの人物であることを確認します)。これには、認証局 (CA) と呼ばれる信頼のおける第三者機関によって署名された証明書を取得することが含まれます。IBM HTTP Server ユーザーの場合、CA は Equifax[®] や VeriSign[®] Inc. などです。他の CA も同様に使用可能です。

実動鍵ファイルを作成するには、以下のステップを完了します。

1. 実動用のセキュリティー鍵ファイルを作成します。
2. 認証局からセキュアな証明書を要求します。
3. 実動鍵ファイルを現行鍵ファイルとして設定します。
4. 証明書を受け取り、実動鍵ファイルをテストします。

これらのステップについて、以下に詳細に説明します。

注:

1. 認証局が署名した実動鍵ファイルをすでに使用している場合、これらのステップを省略することもできます。この章を読んで決定してください。
2. これらのステップを実行する際に、ブラウザーにセキュリティー・メッセージが表示されることがあります。それぞれのメッセージに示された情報を注意深く確認して、続行する方法を判別してください。

実動用のセキュリティー鍵ファイルを作成する

実動用のセキュリティー鍵ファイルを作成するには、Web サーバー・マシンで以下のようになります。

- 136 ページの『IBM HTTP Server の開始と停止』の説明に従って、IBM HTTP Server を停止します。
- ディレクトリーを /opt/IBMHTTPServer/conf に移動します。
- httpd.conf のバックアップ・コピーを作成します。
- httpd.conf をテキスト・エディターでオープンします。
- ポート 443 について、以下の行がコメント化されていないことを確認します。
 - #LoadModule ibm_ssl_module
 - #AddModule mod_ibm_ssl.c
 - #Listen 443
 - #<VirtualHost host.some_domain.com:443> この行の完全修飾ホスト名の置き換えも行わなければなりません。
 - #SSLEnable
 - #</VirtualHost>
 - #SSLDisable
 - 鍵ファイル "/opt/IBMHTTPServer/ssl/keyfile.kdb"
 - #SSLV2Timeout 100
 - #SSLV3Timeout 1000
- ポート 8000 について、以下の行がコメント化されていないことを確認します。
 - #Listen 8000
 - #<VirtualHost host.some_domain.com:8000> この行の完全修飾ホスト名の置き換えも行わなければなりません。
 - #SSLEnable
 - #</VirtualHost>
- 変更を保管します。
- httpd.conf ファイルに構文エラーが入らないようにするには、/opt/IBMHTTPServer/bin ディレクトリーに移動して次のコマンドを実行します。

```
./httpd -t
```
- 136 ページの『IBM HTTP Server の開始と停止』に説明されている方法で、IBM HTTP Server を開始します。

認証局からセキュアな証明書を要求する

前のステップで作成したセキュリティー鍵を妥当性検査するには、Equifax や VeriSign などの認証局 (CA) が発行した証明書が必要です。証明書には、サーバーの公開鍵、サーバーの証明書に関連した識別名、および証明書のシリアル番号と有効期限が含まれています。

他の CA を使用する場合、実行する手順については、直接各 CA に問い合わせてください。

Equifax ユーザー

Equifax からセキュア・サーバー証明書を要求するには、以下の Web アドレスを参照して、示される指示に従ってください。

<http://www.equifax.com>

Equifax からの証明書は E メールで 2 ~ 4 日以内に送られてきます。

VeriSign ユーザー

VeriSign からセキュア・サーバー証明書を要求するには、以下の URL を参照して、示される指示に従ってください。

<http://www.verisign.com>

示される指示に従ってください。要求を送信すると、証明書は 3 ~ 5 日以内に送られてきます。実動鍵ファイルをまだ作成していないならば、証明書ファイルを受け取ったときに、前のセクションで説明した方法によってそれを作成してください。

実動鍵ファイルを受け取って、現行鍵ファイルとして設定する

CA からの証明書が到着した後、Web サーバーが実動鍵ファイルを使用するように設定する必要があります。以下のステップを完了します。

1. 認証局から受け取った *certificatename.kdb*、*certificatename.rdb*、および *certificatename.sth* ファイルを、`/opt/IBMHTTPServer/ssl` ディレクトリーにコピーします。*certificatename* は認証要求と共に指定した証明書名です。
2. 136 ページの『IBM HTTP Server の開始と停止』の説明に従って、IBM HTTP Server を停止します。
3. 鍵管理ユーティリティー (ikeyman) をオープンします。
4. *certificatename.kdb* ファイルをオープンして、プロンプトが出たらパスワードを入力します。
5. 「**Personal Certificates (個人用証明書)**」を選択して、「受け取り」をクリックします。
6. 「参照」をクリックします。

7. 認証局から受け取ったファイルを格納しているフォルダーを選択します。
`certificatename.txt` ファイルを選択して、「OK」をクリックします。
8. これで「**Personal Certificates (個人用証明書)**」リスト・ボックスには、VeriSign `certificatename` 証明書または Equifax `certificatename` 証明書がリストされます。
9. 鍵管理ユーティリティを終了します。
10. ディレクトリーを `/opt/IBMHTTPServer/conf` に移動します。
11. `httpd.conf` のバックアップ・コピーを作成します。
12. `httpd.conf` をテキスト・エディターでオープンします。
13. ステップ 5 (108 ページ) でリストされた行がコメント化されていないことを確認します。
14. Keyfile "`/opt/IBMHTTPServer/ssl/keyfile.kdb`" を検索して、上記のステップで作成されたファイルを指し示すようにパス名を変更します。
15. 136 ページの『IBM HTTP Server の開始と停止』の説明に従って、IBM HTTP Server を再始動します。

実動鍵ファイルのテスト

実動鍵をテストするには、以下のようにします。

1. ブラウザーを使用して以下の URL を表示します。

```
https://host_name
```

注:

- a. Web サーバーをカスタマイズしている場合、ホスト名の後に Web サーバーのフロントページの名前を入力しなければならないことがあります。
- b. `http` ではなく `https` と入力します。

鍵が正しく定義されていれば、新規の証明書に関するいくつかのメッセージが表示されます。

2. 「**New Site Certificate (新規のサイト証明書)**」パネルで、この証明書を受け入れた場合、「**Accept this certificate forever (until it expires) (この証明書を永続的に (有効期限が切れるまで) 受け入れる)**」ラジオ・ボタンを選択します。
3. Web ブラウザーから、キャッシングおよびプロキシ (または Socks) サーバーの設定値を初期値に戻します。

これで、サーバー上で SSL が使用可能になりました。

第 13 章 複数の WebSphere Commerce インスタンスの作成

WebSphere Commerce 5.4 は、複数の WebSphere Commerce インスタンスの作成をサポートしています。つまり、WebSphere Commerce 5.4 を使用すると、それぞれの WebSphere Commerce インスタンスに異なるホスト名を使用しながら、2 つ以上の WebSphere Commerce インスタンスを同時に実行することができます。この場合、顧客は *host1.domain.com* および *host2.domain.com* にアクセスできます。この方法には、仮想ホスト名の使用が関係しています。

注:

1. 以下の例は、*demo1*、*demo2*、*host1*、*host2*、*htdocs1*、および *htdocs2* を参照します。これらの例は 1 番目と 2 番目のインスタンスのパラメーター値を表しており、これらの値がインスタンス間で固有であることを示す目的があります。
2. 通常は操作可能な既存の WebSphere Commerce インスタンスがあるので、追加のインスタンスを作成するだけで済みます。既存のインスタンスがある場合、他のインスタンスを追加するためにそのインスタンスのパラメーター値を変更する必要はありません。オプションで、複数インスタンス環境の編成を改善するために、最初のインスタンスのパラメーターの一部を変更することもできます。例えば、文書ルート・ディレクトリーを *.../htmldocs* から *.../htdocs1* に変更して、最初のインスタンスに対応するようにすることができます。

仮想ホスト名を使用する複数のインスタンス

このセクションでは、仮想ホスト名を使用して複数 WebSphere Commerce インスタンスを作成する方法を示しています。

前提条件

1. 通常は、インスタンスごとに 1 つのインターネット・プロトコル (IP) アドレス、さらにマシンのために 1 つの IP アドレスが必要となります。例えば、2 つのインスタンスがある場合、通常は合計 3 つの IP アドレスが必要となります。これら 3 つの IP アドレスはネットワーク上で有効であり、関連するホスト名がドメイン・ネーム・システム (DNS) サーバーに存在しなければなりません。以下の例では、既存のインスタンスがあることを想定しており、追加のインスタンスを作成する方法を示しています。この例で、IP アドレスとホスト名は以下のとおりです。
 - *m.mm.mm.mmm*、ホスト名は *host1.domain.com* (既存)
 - *n.nn.nn.nnn*、ホスト名は *host2.domain.com* (追加のインスタンス)



- マシンの IP アドレスとホスト名をインスタンスの 1 つに使用することもできます。この場合、2 つのインスタンスのために 2 つの IP アドレスだけが必要になります。

注: IBM HTTP Server 1.3.19.1 では、ホスト名に下線文字 (_) を使用できません。

ifconfig コマンドについて詳しくは、Solaris オペレーティング環境の資料を参照してください。

2. 各インスタンスのホスト名は、IP アドレスを分離するために完全に解決されなければなりません。例えば、構成マネージャーを実行して複数インスタンスを作成できることを調べるために、nslookup コマンドを各インスタンスのホスト名と IP アドレスの両方で実行します。ホスト名は正しい IP アドレスに解決して、IP アドレスは正しいホスト名に解決するはずです。

```
nslookup host1.domain.com
nslookup m.mm.mm.mmm
```

```
nslookup host2.domain.com
nslookup n.nn.nn.nnn
```

3. 2 番目のインスタンスを作成する前に、WebSphere Application Server 管理サーバーが稼働していることを確認します。
4. 追加のインスタンスごとに、マシンのメモリーを 512 MB ずつ、スペースをプロセッサーごとに 1GB ずつ増やす必要があります。

複数インスタンスの作成

新規インスタンスを作成する前に、以下のとおりにする必要があります。

1. インスタンスごとに 1 つの有効な文書ルートがなければなりません。これを行う最も簡単な方法は、既存の文書ルートをコピーして名前変更することです。

IBM HTTP Server を使用している場合、`/opt/IBMHTTPServer/htdocs/locale` (`locale` は、Web サーバー・マシンが使用する言語環境のロケール・コード) をコピーし、それを `/opt/IBMHTTPServer/htdocs2` に名前変更します。オプションで、`/opt/IBMHTTPServer/htdocs/locale` を再度コピーして、`/opt/IBMHTTPServer/htdocs1` に名前変更することもできます。

最初の WebSphere Commerce インスタンスを作成したと想定する場合、57 ページの『第 9 章 構成マネージャーによるインスタンスの作成または変更』の指示に従って、必要な追加のインスタンスを 1 つずつ作成できます。以下の表で、既存のインスタンスは **インスタンス 1** で表され、新規のインスタンスは **インスタンス 2** で表されます。既存のインスタンスの値を変更する必要はありません。この表は、新しいインスタンスの変更済みデフォルト値をリストしています。これらの値をインスタンスで使用したい実際の値 (インスタンス名、ホスト名、など) に置き換えてください。

構成マネージャーのフィールド	インスタンス 1	インスタンス 2
インスタンス - インスタンス名	<i>demo1</i>	<i>demo2</i>
インスタンス - インスタンス・ルート・パス		
データベース - データベース名	<i>mall1</i>	<i>mall2</i>
Web サーバー - ホスト名	<i>host1.domain.com</i>	<i>host2.domain.com</i>
Web サーバー - プライマリー (IBM HTTP Server 用)	<i>/opt/IBMHTTPServer/htdocs1</i>	<i>/opt/IBMHTTPServer/htdocs2</i>
Payment Manager - ホスト名	<i>host1.domain.com</i>	<i>host2.domain.com</i>

インスタンスの開始

WebSphere Commerce インスタンスが作成されると、以下のことを行います。

1. WebSphere Application Server 管理コンソールで以下のエントリが作成されていることを確認します。
 - WebSphere Commerce Server demo1
 - WebSphere Commerce Server demo2
 - WebSphere Commerce DB2 DataSource demo1
 - WebSphere Commerce DB2 DataSource demo2
 - WebSphere Commerce DB2 JDBC Driver demo1
 - WebSphere Commerce DB2 JDBC Driver demo2
 - VH_demo1 (demo1 に対応)
 - VH_demo2
2. IBM HTTP Server を使用している場合、以下の <VirtualHost> セクションが IBM HTTP Server 構成ファイル (*/opt/IBMHTTPServer/conf/httpd.conf*) の Virtual Host セクションに存在することを調べます。

```
<VirtualHost m.mm.mm.mmm>
  ServerName host1.domain.com
  DocumentRoot "/opt/IBMHTTPServer/htdocs1/en_US"
</VirtualHost>
```

```

.
.
.
<VirtualHost m.mm.mm.mmm:443>
SSLEnable
SSLClientAuth 0
ServerName host1.domain.com
DocumentRoot "/opt/IBMHTTPServer/htdocs1/en_US"
.
.
.
<VirtualHost m.mm.mm.mmm:8000>
SSLEnable
SSLClientAuth 0
ServerName host1.domain.com
DocumentRoot "/opt/IBMHTTPServer/htdocs1/en_US"
.
.
.
<VirtualHost n.nn.nn.nnn>
ServerName host2.domain.com
DocumentRoot "/opt/IBMHTTPServer/htdocs2/en_US"
</VirtualHost>
.
.
.
<VirtualHost n.nn.nn.nnn:443>
SSLEnable
SSLClientAuth 0
ServerName host2.domain.com
DocumentRoot "/opt/IBMHTTPServer/htdocs2/en_US"
.
.
.
<VirtualHost n.nn.nn.nnn:8000>
SSLEnable
SSLClientAuth 0
ServerName host2.domain.com
DocumentRoot "/opt/IBMHTTPServer/htdocs2/en_US"

```

上記の例で SSLClientAuth 0 ディレクティブは、インスタンスの構成マネージャーの Web サーバー・ノードで基本認証モードを選択したことを表していることに注意してください。 Web サーバー・ノードで X.509 認証モードを選択した場合、ディレクティブは SSLClientAuth 2 となります。

3. IBM HTTP Server を使用している場合、以下の 2 つの <Directory> セクションが IBM HTTP Server 構成ファイル (/opt/IBMHTTPServer/conf/httpd.conf) の Document Root セクションに存在することを調べます。

```

<Directory "/opt/IBMHTTPServer/htdocs1">
Options Indexes
AllowOverride None
order allow,deny
allow from all

```

```
</Directory>
```

```
<Directory "/opt/IBMHTTPServer/htdocs2">  
Options Indexes  
AllowOverride None  
order allow,deny  
allow from all  
</Directory>
```

4. インスタンスの Web サーバー構成ファイルに変更を加えて、いずれの Web サーバー・エントリーも、そのインスタンスで使用される Web サーバーの完全修飾ホスト名を指すようにします。
5. インスタンスごとに Web サーバー・ホーム・ページをロードできることを確認してください (例えば、 <http://host1.domain.com> および <http://host2.domain.com>)。
6. インスタンスごとにソース Web サーバー・ホーム・ページをロードできることを確認してください (例えば、 <https://host1.domain.com> および <https://host2.domain.com>)。
7. インスタンスごとに、55 ページの『インストール後スクリプトの実行』の説明に従って、インストール後スクリプトを実行したことを確認してください。その際、それぞれのインスタンスに固有の正しい情報を入力している必要があります。その情報には、第 2 のインスタンスのロケール、Web サーバー文書ルート・ディレクトリー、および各インスタンスの Web サーバーのホスト名が含まれます (これらに限られるわけではありません)。
8. WebSphere Application Server 管理コンソールで各インスタンスを開始します。
9. 各インスタンスの WebSphere Commerce Accelerator をロードできることを確認してください。

第 14 章 WebSphere Application Server のセキュリティーを使用可能にする

この章では、WebSphere Application Server のセキュリティーを使用可能にする方法について説明します。 WebSphere Application Server のセキュリティーを使用可能にすると、すべての Enterprise JavaBean コンポーネントが何者かによってリモートで呼び出されることを防ぎます。

注: WebSphere Application Server セキュリティーを使用可能にする場合には、ご使用のマシンが以下の要件を満たしているよう強くお勧めします。

- 1 GB 以上のマシン・メモリー
- WebSphere Commerce アプリケーションの場合は、384 MB 以上のヒープ・サイズ

始める前に

セキュリティーを使用可能にする前に、セキュリティーが使用可能になった WebSphere Application Server がユーザー ID の妥当性を検査する方法を知る必要があります。 WebSphere Application Server は LDAP またはオペレーティング・システムのユーザー・レジストリーを WebSphere Application Server ユーザー・レジストリーとして使用できます。

LDAP ユーザー・レジストリーを使用してセキュリティーを使用可能にする

LDAP を WebSphere Application Server ユーザー・レジストリーとして使用しているときに WebSphere Application Server を使用可能にするには、システムに wasuser としてログインし、以下のようにします。

1. WebSphere Application Server 管理サーバーを開始して、WebSphere Application Server 管理コンソールをオープンします。
2. コンソールで、以下のようにグローバル・セキュリティー設定値を変更します。
 - a. 「コンソール」メニューから、「**Security Center (セキュリティー・センター)**」を選択します。
 - b. 「一般」タブで、「**Enable Security (セキュリティーを使用可能にする)**」を選択します。
 - c. 「認証」タブで、「**Lightweight Third Party Authentication (LTPA)**」を選択します。 LTPA 設定を入力し、この機能を使用しない場合は「**Enable Single Sign On (単一サインオンを使用可能にする)**」チェック・ボックスのチェックを外します。使用しているディレクトリー・サーバーのタイプに応じて、以下のよ

うに「LDAP Settings (LDAP 設定)」タブに値を入力します。

表 1. SecureWay ユーザー

フィールド名	定義	サンプル値	備考
セキュリティー・ サーバー ID	ユーザー ID	<i>user_ID</i>	<ul style="list-style-type: none"> これは LDAP 管理者にすることはできません。 cn=xxx として指定されているユーザーは使用しないでください。 このユーザーのオブジェクト・クラスが、「LDAP Advanced Properties (LDAP 拡張プロパティ)」ウィンドウの「User Filter (ユーザー・フィルター)」フィールドに指定されたオブジェクト・クラスと互換性があることを確認します。
セキュリティー・ サーバー・ パスワード	ユーザー・ パスワード	<i>password</i>	
ホスト	LDAP サーバーの ホスト名	<i>hostname.domain</i>	
ディレクトリー・ タイプ	LDAP サーバーの タイプ	SecureWay	
ポート	LDAP サーバーが 使用しているポート		
基本識別名	検索に使用される 識別名	o=ibm、c=us	
バインド識別名	検索時にディレクトリーにバインドするための識別名		このフィールドは不要です。
バインド・ パスワード	バインド識別名の パスワード		このフィールドは不要です。

- d. 「役割マッピング」タブで、「WebSphere Commerce Enterprise Application」を選択し、「マッピングの編集」をクリックします。
 - 1) 「WCSecurityRole」を選択し、「**Select (選択)**」ボタンをクリックします。
 - 2) 「Select users/groups (ユーザー / グループの選択)」チェック・ボックスを選択し、ステップ 2c (117 ページ) で使用したユーザー ID を「検索」フィールドに入力して、「**検索**」をクリックします。「Available Users/Groups (使用可能なユーザー / グループ)」リストからそのユーザーを選択し、「**追加**」をクリックして「Selected Users/Groups (選択したユーザー / グループ)」リストに追加します。次に、各パネルで「**OK**」をクリックし、セキュリティー・センターを終了します。
 - e. ユーザー登録として初めて LTPA を選択するとき、LTPA 用のパスワード入力のプロンプトが出されます。LTPA 用のパスワードを入力します。
3. WebSphere Commerce 構成マネージャーをオープンし、「**インスタンス・リスト**」→「*instance_name*」→「**インスタンス・プロパティ**」→「**セキュリティー**」を選択し、「**セキュリティーを使用可能にする**」チェック・ボックスを選択します。認証モードとして「**オペレーティング・システムのユーザー・レジストリー**」を選択し、ステップ 2c (117 ページ) で入力したユーザー名とパスワードを入力します。「**適用**」をクリックして、構成マネージャーを終了します。
 4. WebSphere Application Server 管理サーバーを停止してから、再始動します。この後は、WebSphere Application Server 管理コンソールをオープンするとき、セキュリティー・サーバー ID とパスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

オペレーティング・システム・ユーザー・レジストリーを使用してセキュリティーを使用可能にする

オペレーティング・システムのユーザー検証を WebSphere Application Server ユーザー・レジストリーとして使用しているときに WebSphere Application Server セキュリティーを使用可能にするためには、管理権限を持つユーザーとしてログインし、以下のステップを実行してください。

1. WebSphere Application Server 管理コンソールで、以下のようにグローバル・セキュリティー設定値を変更します。
 - a. 「コンソール」メニューから、「**Security Center (セキュリティー・センター)**」を選択します。
 - b. 「一般」タブで、「**Enable Security (セキュリティーを使用可能にする)**」チェック・ボックスを選択します。
2. 「**Authentication (認証)**」タブを選択し、「**Local Operating System (ローカル・オペレーティング・システム)**」ラジオ・ボタンを選択します。

3. 「**Security Server ID (セキュリティー・サーバー ID)**」フィールドにセキュリティー・サーバー ID を入力します。以下のようにユーザー名を入力します。

表 2.

フィールド名	サンプル値	備考
ユーザー ID	<i>user_ID</i>	
セキュリティー・サーバー・パスワード	<i>password</i>	これはログインの際に使用した、オペレーティング・システム管理権限のあるユーザーのパスワードです。

4. 「**Role Mapping (役割マッピング)**」タブで、WC エンタープライズ・アプリケーションを選択し、「**Edit Mappings (マッピングの編集)**」ボタンをクリックします。
 - a. 「WCSecurityRole」を選択し、「**Select (選択)**」ボタンをクリックします。
 - b. 「Select users/groups (ユーザー / グループの選択)」チェック・ボックスを選択し、3 で使用したユーザー ID を「検索」フィールドに入力して、「**検索**」をクリックします。「Available Users/Groups (使用可能なユーザー / グループ)」リストからそのユーザーを選択し、「**追加**」をクリックして「Selected Users/Groups (選択したユーザー / グループ)」リストに追加します。次に、各パネルで「**OK**」をクリックし、セキュリティー・センターを終了します。
5. WebSphere Commerce 構成マネージャーをオープンし、「**インスタンス・リスト**」→「*instance_name*」→「**インスタンス・プロパティ**」→「**セキュリティー**」と選択し、「**セキュリティーを使用可能にする**」チェック・ボックスを選択します。認証モードとして「**オペレーティング・システムのユーザー・レジストリー**」を選択し、ステップ 3 で入力したユーザー名とパスワードを入力します。「**適用**」をクリックして、構成マネージャーを終了します。
6. WebSphere Application Server 管理サーバーを停止してから、再始動します。この後は、WebSphere Application Server 管理コンソールをオープンするとき、セキュリティー・サーバー ID とパスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

WebSphere Commerce EJB セキュリティーを使用不可にする

WebSphere Commerce では、EJB セキュリティーを使用不可にすることができます。WebSphere Commerce EJB セキュリティーを使用不可にするには、以下のようになります。

1. WebSphere Application Server 管理コンソールを始動します。
2. 「コンソール」→「**Security Center (セキュリティー・センター)**」をクリックし、「**一般**」タブの「**Enable Security (セキュリティーを使用可能にする)**」チェック・ボックスを選択解除します。

3. WebSphere Commerce 構成マネージャーをオープンし、「インスタンス・リスト」→「*instance_name*」→「インスタンス・プロパティ」→「セキュリティ」と選択し、「セキュリティを使用可能にする」チェック・ボックスのチェックを外します。
4. WebSphere Application Server 管理サーバーを停止してから、再始動します。

WebSphere Commerce セキュリティー・デプロイメント・オプション

WebSphere Commerce は、さまざまなセキュリティ・デプロイメント構成をサポートしています。以下の表には、使用できるセキュリティ・デプロイメント・オプションが示されています。

表 3. 単一マシンのセキュリティのシナリオ

WebSphere Application Server セキュリティーが使用可能。	<ul style="list-style-type: none"> • オペレーティング・システムを WebSphere Application Server レジストリーとして使用する。 • データベースを WebSphere Commerce レジストリーとして使用する。 <hr/> <ul style="list-style-type: none"> • LDAP を WebSphere Application Server レジストリーとして使用する。 • LDAP を WebSphere Commerce レジストリーとして使用する。 <hr/> <ul style="list-style-type: none"> • LDAP を WebSphere Application Server レジストリーとして使用する。
WebSphere Application Server セキュリティーが使用不可、および WebSphere Commerce サイトがファイアウォールに守られている。	<ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server レジストリーは不要。 • データベースを WebSphere Commerce レジストリーとして使用する。 <hr/> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server レジストリーは不要。 • LDAP を WebSphere Commerce レジストリーとして使用する。

表4. 複数マシンのセキュリティーのシナリオ

<p>WebSphere Application Server セキュリティーが使用可能。LDAP が常にデプロイされている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • LDAP を WebSphere Application Server レジストリーとして使用する。 • LDAP を WebSphere Commerce レジストリーとして使用する。 <hr/> <ul style="list-style-type: none"> • LDAP を WebSphere Application Server レジストリーとして使用する。 • データベースを WebSphere Commerce レジストリーとして使用する。 • LDAP をセットアップし、LDAP レジストリー中に 1 つの管理エントリーを組み込む必要がある。
<p>WebSphere Application Server セキュリティーが使用不可、および WebSphere Commerce サイトがファイアウォールに守られている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • データベースを WebSphere Commerce レジストリーとして使用する。 • WebSphere Application Server レジストリーは不要。 • 単一サインオンはサポートされない。 <hr/> <ul style="list-style-type: none"> • LDAP を WebSphere Application Server レジストリーとして使用する。 • WebSphere Application Server レジストリーは不要。

注: ファイアウォールの内部で WebSphere Commerce サイトを操作する場合は、WebSphere Application Server セキュリティーを使用不可にすることができます。WebSphere Application Server セキュリティーを使用不可にするのは、ファイアウォールの内部で有害なアプリケーションが稼働していないことが確認されている場合に限る必要があります。

第 15 章 複製

この章では、3 層構成 (リモート Web サーバーとリモート・データベース) を想定した WebSphere Application Server 複製メカニズムの使用方を示します。1 層または 2 層 (リモート・データベースを使用する場合) の構成など、より単純な WebSphere Commerce 構成に対して WebSphere Application Server 複製メカニズムを使用することもできます。負荷分散を拡張するために、WebSphere Application Server 水平複製モデルを使用して WebSphere Commerce マシンを追加したい場合に、この章をお読みください。

このセクションの優れた情報源は IBM Redbooks です。コピーを入手するには、以下の IBM Redbook の Web サイトをご覧ください。

<http://www.redbooks.ibm.com/>

水平複製

水平複製は、複数の物理マシン上のアプリケーション・サーバーの複製を定義する伝統的な手法であり、これによって、単一の WebSphere アプリケーションが複数のマシンにわたって、なおかつ単一システム・イメージを提示することが可能になります。水平複製はスループットの改善をもたらします。

水平複製を構成するには、以下のようにします。

- 3 層構成で WebSphere Commerce をインストールします。
 - マシン A は Web サーバー
 - マシン B はデータベース・サーバー
 - マシン C は WebSphere Commerce サーバー
- 複製を行うマシンで、WebSphere Commerce をインストールして構成します。このマシンをマシン D と呼びます。マシン D で以下のステップを完了する必要があります。
 - 17 ページの『第 3 章 IBM DB2 Universal Database 7.1.0.60 のインストール』の説明に従って、マシン D にデータベース・クライアントをインストールします。その際、該当する箇所で、リモート・データベース・サーバーおよび Web サーバーを指し示します。以下のようにして、データベースをカタログ化します。
 - 1) ターミナル・ウィンドウに以下のコマンドを入力します。

```
su - db2inst1
db2 catalog tcpip node node_name remote db_server_name
server DB2_server_port
```

```
db2 attach to node_name user user_id using password
db2 catalog database WAS_db as WAS_db at node node_name
db2 catalog database WC_db as WC_db at node node_name
```

ここで、*node_name* はこのノードに割り当てる名前、*db_server_name* はデータベース・サーバーの完全修飾ホスト名、*DB2_server_port* は DB2 への接続に使用するポート (デフォルトの DB2 サーバー・ポートは 50000)、*WAS_db* および *WC_db* は、WebSphere Application Server および WebSphere Commerce インスタンスにより使用されるデータベースです。これらのコマンドは、読みやすいように行を分けて記載されていますが、入力は必ず 1 行で行ってください。

その上で、17 ページの『第 3 章 IBM DB2 Universal Database 7.1.0.60 のインストール』の説明に従い、DB2 アップグレードを適用する必要があります。

- b. 39 ページの『WebSphere Application Server をインストールしてリモート Web サーバーとともに使用する』の説明に従って、マシン D に WebSphere Application Server をインストールします。その際、該当する箇所で、リモート・データベース・サーバーおよび Web サーバーを指し示します。
- c. /opt/WebSphere/AppServer/bin ディレクトリーの admin.config ファイルを編集します。以下の値が false に設定されていることを確認します。

```
install.initial.config=false
com.ibm.ejs.sm.adminServer.createTables=false
```
- d. 45 ページの『第 6 章 WebSphere Commerce 5.4 のインストール』の説明に従って、マシン D に WebSphere Commerce をインストールします。
- e. 55 ページの『インストール後スクリプトの実行』で概説されているように、インストール後スクリプトを実行します。このスクリプトの実行時に指定するユーザーとポートは、スクリプトが最初に実行されたときに指定したものと同一でなければなりません。
- f. 以下のファイルをマシン C からマシン D にコピーします。

```
/opt/WebSphere/AppServer/config/plugin-cfg.xml
```
- g. マシン C とマシン D で WebSphere Application Server を開始します。
- h. WebSphere Application Server 管理コンソールをオープンします。両方の WebSphere Application Server マシンのノードが表示されるはずですが。

WebSphere Commerce マシンを構成する必要があります。マシンを構成するには、以下のようにします。

1. マシン D のデータ・ソースを以下のように構成します。
 - a. WebSphere Application Server が開始されていることを確かめます。
 - b. WebSphere Application Server 管理コンソールをオープンします。
 - c. 最新の JDBC ドライバーを使用していることを確認してください。システム上の db2java.zip ファイルの位置を入力します。

- d. 「**WebSphere Administrative Domain (WebSphere 管理可能ドメイン)**」
→ 「**Resources (リソース)**」 → 「**JDBC Providers (JDBC プロバイダー)**」 →
WebSphere Commerce JDBC Driver *instance_name* の順に展開します。
 - e. 右の画面区画で、「Nodes (ノード)」タブを選択し、「**Install New (新規インストール)**」をクリックします。
 - f. 新しいドライバーをインストールするノードを選択し、「**Specify Driver (ドライバーの指定)**」をクリックし、「**追加**」をクリックして、オープンされるウィンドウで正しい JDBC ドライバーを探します (db2java.zip)。「**設定**」、次いで「**インストール**」をクリックします。
 - g. 「**適用**」をクリックします。
2. マシン C でサーバー・グループを作成します。
 - a. WebSphere Application Server を始動します。
 - b. WebSphere Application Server 管理コンソールをオープンします。
 - c. 「**WebSphere Administrative Domain (WebSphere 管理可能ドメイン)**」 → 「**ノード**」 → 「*host_name*」 → 「**Application Servers (アプリケーション・サーバー)**」の順に展開します。
 - d. **WebSphere Commerce Server - *instance_name*** アプリケーション・サーバーを停止します。
 - e. 「**WebSphere Commerce Server - *instance_name***」を右クリックし、「**Create Server Group (サーバー・グループの作成)**」を選択します (サーバー・グループがすでに存在しているのではない限り)。
 - f. サーバー・グループ名を入力して「**OK**」をクリックします。
 3. 以下のようにして、WebSphere Commerce Server Group に水平複製を追加します。
 - a. マシン C で WebSphere Application Server 管理コンソールをオープンします。
 - b. 「**WebSphere Administrative Domain (WebSphere 管理可能ドメイン)**」 → 「**Server Groups (サーバー・グループ)**」の順に展開します。
 - c. WebSphere Server Group を右クリックします。
 - d. 「**新規**」 → 「**Clone (複製)**」を選択します。
 - e. 新しい複製名を入力します (たとえば、WebSphere Commerce - *instance_name*)。
 - f. マシン D のノードを選択し、「**作成**」をクリックします。
 4. 以下のディレクトリーをマシン C からマシン D にコピーします。


```
/opt/WebSphere/AppServer/installedApps/  
WC_Enterprise_App_instance_name.ear
```
 5. マシン D でこのディレクトリーを名前変更し、以下の名前に一致させます。


```
/opt/WebSphere/AppServer/installedApps/  
WebSphere_Commerce_Enterprise_Application_-_instance_name.ear
```

6. 以下のディレクトリーをマシン C からマシン D にコピーします (既存のディレクトリーに上書き)。

```
/opt/WebSphere/CommerceServer/instance
```

7. マシン D で、以下のファイルをテキスト・エディターでオープンします。

```
/opt/WebSphere/CommerceServer/instance/instance_name/xml/  
instance_name.xml
```

WC_Enterprise_App_instance_name.ear のすべての出現箇所を
WebSphere_Commerce_Enterprise_Application_-_instance_name.ear に変更しま
す。

8. 以下のようにして、Web サーバー・プラグインを再生成します。

- a. コマンド行で、次のディレクトリーに移動します。

```
/opt/WebSphere/AppServer/bin
```

- b. 以下のコマンドを実行します。

```
./GenPluginCfg.sh -adminNodeName node_name -nameServicePort  
port_number
```

ここで、*node_name* はノードの短い論理名、*port_number* は、55 ページの『イ
ンストール後スクリプトの実行』で指定されている、WebSphere Application
Server にアクセスする際に使用するポートです。(デフォルトでは、インストー
ル後スクリプトはポート 2222 を使用します。)

9. テキスト・エディターで、以下のファイルをオープンします。

```
/opt/WebSphere/AppServer/config/plugin-cfg.xml
```

10. 以下の行を、plugin-cfg.xml ファイルの <Config> の下に直接追加します。

```
<Property name="CacheLibrary" value="/opt/WebSphere/CommerceServer/bin/  
libwccache.so" />
```

11. plugin-cfg.xml ファイルを Web サーバー・マシン (マシン A) およびマシン D
にコピーします。

12. Web サーバー (マシン A) を再始動します。

13. WebSphere Application Server 管理コンソールで、サーバー・グループを開始しま
す。

垂直複製

垂直複製 は、同じ物理マシン上にアプリケーション・サーバーの複数の複製を定義する
手法です。経験によると、単一の JVM プロセスによってインプリメントされた単一の
アプリケーション・サーバーは、大型のマシンの CPU 能力を十分に利用していないこ
とが示されています。このことは大型のマルチプロセッサ・マシンについて特に言え
ることで、単一の Java 仮想マシン (JVM) の中での並行性の制限に起因しています。垂
直複製は複数の JVM プロセスを作成するための直接的なメカニズムを提供し、複数の
JVM プロセスが一緒になってすべての処理能力を十分に利用することができます。

垂直複製を構成するには、以下のようにします。

1. WebSphere Application Server 管理コンソールをオープンします。
2. WebSphere Commerce 複製を作成するため、以下のようにします。
 - a. 「**WebSphere Administrative Domain (WebSphere 管理可能ドメイン)**」 → 「**ノード**」 → 「*host_name*」 → 「**Application Servers (アプリケーション・サーバー)**」の順に展開します。
 - b. 「**WebSphere Commerce Server (WebSphere Commerce サーバー)**」 → 「*instance_name*」を選択して、右マウス・ボタンでクリックします。「**停止**」を選択します。
 - c. 「**WebSphere Commerce Server**」 → 「*instance_name*」を右マウス・ボタン・クリックし、「**Create Server Group (サーバー・グループの作成)**」を選択します(サーバー・グループがすでに存在しているのではない限り)。
 - d. サーバー・グループ名(たとえば WebSphere Commerce Server Group)を入力して「**OK**」をクリックします。
 - e. 「**WebSphere Administrative Domain (WebSphere 管理可能ドメイン)**」 → 「**Server Groups (サーバー・グループ)**」の順に展開します。
 - f. 新規サーバー・グループ(たとえば WebSphere Commerce Server Group)を右マウス・ボタン・クリックし、「**新規**」 → 「**Clone (複製)**」を選択します。
 - g. 複製されるアプリケーション・サーバーの名前を入力します。
 - h. 「**作成**」を選択します。
3. WebSphere Application Server プラグインを再生成します。プラグインを再生成するには、以下のようにします。
 - a. コマンド・ウィンドウを開き、次のディレクトリーに移動します。

```
/opt/WebSphere/AppServer/bin
```
 - b. 以下のコマンドを入力します。

```
/GenPluginCfg.sh -adminNodeName node_name -nameServicePort port_number
```

ここで、*node_name* はノードの短い論理名、*port_number* は WebSphere Application Server が使用するポートです(デフォルトは 2222)。
 - c. WebSphere Application Server を停止します。
 - d. テキスト・エディターで、以下のファイルをオープンします。

```
/opt/WebSphere/AppServer/config/plugin-cfg.xml
```
 - e. 以下の行を、plugin-cfg.xml ファイルの <Config> の下に直接追加します。

注: リモート Web サーバーを使用している場合は、plugin-cfg.xml を WebSphere Application Server から Web サーバー・マシンにコピーしてください。
 - f. Web サーバーを再始動します。

4. WebSphere Application Server を始動します。
5. WebSphere Application Server 管理コンソールをオープンします。
6. 「**WebSphere Administrative Domain (WebSphere 管理可能ドメイン)**」
→ 「**Server Groups (サーバー・グループ)**」 → 「*server_group_name*」の順に展開します。
7. サーバー・グループを右クリックし、「**開始**」を選択します。

第 16 章 単一サインオン

この章では、WebSphere Commerce の単一サインオンのセットアップ方法の概要を示します。単一サインオンについての詳細は、*IBM WebSphere Commerce セキュリティー・ガイド*、バージョン 5.4 を参照してください。

前提条件

単一サインオンを使用可能にするには、以下の要件に適合している必要があります。

- 既存の LDAP サーバーがインストール済みで構成済みであること。LDAP サーバーを構成するには、*IBM WebSphere Commerce 追加ソフトウェア・ガイド*、バージョン 5.4 を参照してください。
- WebSphere Commerce がインストール済みで構成済みであること。
- WebSphere Application Server セキュリティーが使用可能であること。WebSphere Application Server セキュリティー使用可能にするには、117 ページの『第 14 章 WebSphere Application Server のセキュリティーを使用可能にする』を参照してください。

単一サインオンの使用可能化

制限および前提条件

単一サインオンを WebSphere Commerce と一緒に使用するときには、いくつかの主要な制限があります。制限は次のとおりです。

- LPTA cookie は、異なる Web サーバー・ポートを行き来することができません。
- `ldapentry.xml` ファイルに変更を加え、オブジェクト・クラス `ePerson` を追加する必要があります。これは `ldapocs` エレメントの属性です。
- `instance.xml` に変更を加え、マイグレーションが LDAP コンポーネント内のユーザーを対象に「オン」になっていることを確認する必要があります。
- 単一サインオン構成に参加するマシンは、それぞれのシステム・クロックが同期している必要があります。
- 単一サインオンは、WebSphere Application Server Light Weight Third Party Authentication (LTPA) トークンを読み取りおよび送出できるアプリケーション間でのみサポートされます。

単一サインオンを使用可能にするには、以下のようにする必要があります。

1. WebSphere Application Server 内で単一サインオンを使用可能にします。詳しくは、次のアドレスにある WebSphere Application Server InfoCenter で「single sign-on」を検索してください。

<http://www.ibm.com/software/webservers/appserv/doc/v40/ae/infocenter/index.html>

「**Single Sign-On: WebSphere Application Server (単一サインオン: WebSphere Application Server)**」を選択し、以下のセクションを完了します。

- **WebSphere Application Server 用の SSO の構成。**
 - **WebSphere Application Server セキュリティー設定の変更。**

注: LDAP フィールドへの記入方法の詳細を説明するステップは無視してかまいません。

- **ファイルへの LTPA 鍵のエクスポート。**
2. WebSphere Commerce マシンで、WebSphere Commerce 構成マネージャーを開始します。
 3. メンバー・サブシステム・ノードを構成するために、以下のようにします。
 - a. 「**WebSphere Commerce**」→「*host_name*」→「**インスタンス・リスト**」→「*instance_name*」→「**インスタンス・プロパティ**」→「**Member Subsystem (メンバー・サブシステム)**」の順に展開します。
 - b. 「**Authentication Mode (認証モード)**」ドロップダウン・メニューで、「**LDAP**」を選択します。
 - c. 「**Single sign-on (単一サインオン)**」チェック・ボックスにチェックを付けます。
 - d. 「**ホスト**」フィールドに、LDAP サーバーの完全修飾ホスト名を入力します。
 - e. 「**Administrator Distinguished Name (管理者識別名)**」フィールドに、管理者の識別名を入力します。これは、LDAP サーバーで使用しているのと同じ名前にしてください。
 - f. 「**Administrator Password (管理者パスワード)**」フィールドに、管理者のパスワードを入力します。これは、LDAP サーバーで使用しているのと同じパスワードにしてください。「**確認パスワード**」フィールドで、パスワードを確認します。
 - g. 残りのフィールドをそれぞれ完成させます。
 - h. 「**適用**」をクリックしてから「**OK**」をクリックします。
 4. 以下のファイルを編集してください。

`/opt/WebSphere/CommerceServer/demo/xml/demo.xml`

`MigrateUserFromWCsdb="OFF"` を `MigrateUserFromWCsdb="ON"` に変更します。

5. WebSphere Application Server を再始動します。

第 7 部 管理用タスク

第 17 章 WebSphere Commerce コンポーネントの開始と停止

ここでは、WebSphere Commerce パッケージの一部を成す各プロダクトを開始および停止する方法について説明します。任意のコンポーネントを再始動する必要がある場合に、以下の情報を参考にしてください。

WebSphere Commerce の開始と停止

WebSphere Commerce インスタンスを開始または停止するには、以下のようになります。

1. データベース管理システムと WebSphere Application Server が開始済みであることを確認してください。DB2 を使用している場合は、137 ページの『DB2 Universal Database の開始と停止』を参照してください。WebSphere Application Server の場合、『WebSphere Application Server の開始と停止』を参照してください。
2. ターミナル・ウィンドウで以下のように入力して、WebSphere Application Server 管理コンソールを立ち上げます。

```
su - wasuser
export DISPLAY=fully_qualified_host_name:0.0
cd /opt/WebSphere/AppServer/bin
./adminclient.sh host_name port_number
```

3. 「**WebSphere Administrative Domain (WebSphere 管理可能ドメイン)**」を展開します。
4. 「**Nodes (ノード)**」を展開します。
5. ホスト名を展開します。
6. 「**Application Servers (アプリケーション・サーバー)**」を展開します。
7. 「**WebSphere Commerce Server — instance_name**」を選択して、右マウス・ボタンでクリックします。必要に応じて「**開始**」または「**停止**」を選択します。

WebSphere Application Server の開始と停止

WebSphere Application Server を開始するには、以下のようになります。

1. データベース管理システムが開始していることを確認してください。
2. ターミナル・ウィンドウに次のように入力します。

```
su - wasuser
export DISPLAY=fully_qualified_host_name:0.0
cd /opt/WebSphere/AppServer/bin
./startupServer.sh &
```

/opt/WebSphere/AppServer/logs/tracefile を調べて、WebSphere Application Server が正常に開始済みであることを確認します。

WebSphere Application Server を停止するには、以下のようにします。

1. ターミナル・ウィンドウに次のように入力して、WebSphere Application Server 管理コンソールを開始します。

```
su - wasuser
export DISPLAY=fully_qualified_host_name:0.0
cd /opt/WebSphere/AppServer/bin
./adminclient.sh host_name port_number
```

2. WebSphere Application Server 管理コンソールで、短いホスト名を持つノードを選択します。
3. 「Stop (停止)」ボタンをクリックします。次のような警告メッセージが表示されます。

You are trying to stop the node that the console is connected to. (コンソールの接続先のノードを停止しようとしています。) This will cause the console to exit after the node is stopped. (停止すると、ノードの停止後にコンソールは終了してしまいます。) Do you want to continue? (続けますか?)

「はい」をクリックして続行します。

4. WebSphere Application Server 管理コンソールの後、ターミナル・ウィンドウで次のようなコマンドを発行して、WebSphere Application Server 関連のプロセスがすべて停止したことを確認します。

```
ps -ef | grep startupServer
```

5. このコマンドによって Java プロセスが戻された場合、kill コマンドを発行してそれぞれのプロセスを停止します。

IBM HTTP Server の開始と停止

IBM HTTP Server には、開始および停止できる以下のような 2 つのサーバーがあります。

- IBM HTTP Server
- IBM HTTP 管理サーバー

IBM HTTP Server を開始するには、ターミナル・ウィンドウで以下のコマンドを入力します。

```
su - root
cd /opt/IBMHTTPServer/bin
./apachectl start
```

IBM HTTP Server を停止するには、以下のようにします。

1. WebSphere Commerce と WebSphere Application Server が停止していることを確認します。
2. ターミナル・ウィンドウに以下のコマンドを入力します。

```
su - root
cd /opt/IBMHTTPServer/bin
./apachectl stop
```

IBM HTTP Administration Server を開始するには、ターミナル・ウィンドウで以下の一連のコマンドを入力します。

```
su - root
cd /opt/IBMHTTPServer/bin
./adminctl start
```

IBM HTTP Administration Server を停止するには、ターミナル・ウィンドウで以下の一連のコマンドを入力します。

```
su - root
cd /opt/IBMHTTPServer/bin
./adminctl stop
```

DB2 Universal Database の開始と停止

DB2 Universal Database を開始するには、以下のようにします。

1. DB2 インスタンス ID でログオンします。
2. db2start と入力します。

DB2 を停止するには、以下のようにします。

1. 135 ページの『WebSphere Commerce の開始と停止』の手順に従って、WebSphere Commerce を停止します。
2. 135 ページの『WebSphere Application Server の開始と停止』の手順に従って、WebSphere Application Server を停止します。
3. DB2 インスタンス ID でログオンしたうえで、db2stop と入力します。いずれかのアプリケーションが DB2 に接続している場合、代わりに次のようなコマンドを使います。

```
db2stop force
```

Payment Manager の開始と停止

Payment Manager の開始

Payment Manager を開始します。

1. データベースが開始されていることを確認します。
2. Web サーバーを開始します。

3. WebSphere Application Server が開始されていることを確認します。
4. 『Payment Manager アプリケーション・サーバーの開始』の説明に従って、WebSphere Application Server 管理コンソールで Payment Manager アプリケーション・サーバーを開始します。
5. 『Payment Manager の開始』の説明に従って、Payment Manager を開始します。

Payment Manager アプリケーション・サーバーの開始

WebSphere Application Server 4.0.2 の使用時には、Payment Manager アプリケーション・サーバーを開始することによって、すべてのサブレットを開始できます。Payment Manager アプリケーション・サーバーを開始するには、次のようにします。

1. WebSphere Application Server 管理コンソールをオープンします。
2. 「**WebSphere Administrative Domain (WebSphere 管理可能ドメイン)**」を展開します。
3. 「**Nodes (ノード)**」を展開します。
4. Payment Manager がインストールされているノードを展開します。
5. 「**Application Servers (アプリケーション・サーバー)**」を展開します。
6. 「**WebSphere Payment Manager**」を右クリックして、「**開始**」を選択します。

Payment Manager の開始

IBMPayServer スクリプトを使用して Payment Manager を開始するには、データベース管理者のパスワードを指定する必要があります。

ターミナル・ウィンドウに以下のコマンドを入力します。

```
su - wasuser
export DISPLAY=fully_qualified_host_name:0.0
cd /opt/PaymentManager
./IBMPayServer
```

Payment Manager が Web サーバーからリモートの位置にインストールされている場合、以下のコマンドを使用して開始します。

```
./IBMPayServer -pmhost fully_qualified_Web_server_host_name
```

Payment Manager パスワードを求めるプロンプトが出されます。

別の方法として、Payment Manager のインストール中に自動的に作成されたパスワード・ファイル (.payment ファイル) を使用して Payment Manager を開始することもできます。Payment Manager を開始するコマンドの構文は、次のとおりです。

```
./IBMPayServer -file
```

このファイルにはクリア・テキストの Payment Manager パスワードが含まれているため、この方法で Payment Manager を開始する予定がなければ、このファイルを削除するよう強くお勧めします。

Payment Manager ユーザー・インターフェースの開始

Payment Manager および Payment Manager アプリケーション・サーバーを開始した後、次のようにして Payment Manager ユーザー・インターフェースを開始します。

1. Web ブラウザーで以下を指し示します。

```
http://host_name/webapp/PaymentManager/
```

host_name は、実際の Web サーバーの完全修飾ホスト名です。

2. Payment Manager のログオン・ウィンドウで、Payment Manager 管理者のユーザー ID およびパスワードを入力して、「OK」をクリックします。デフォルトのユーザー ID は wcsadmin、パスワードは wcsadmin パスワードです (デフォルトは wcsadmin ですが、ユーザー ID wcsadmin を使っていないかどの WebSphere Commerce コンポーネントに初めてログオンするとき、これを変更する必要があります)。

Payment Manager と WebSphere Commerce を併用している場合、WebSphere Commerce 管理者はすべて Payment Manager ユーザーにもなります。ただし、最初は管理者 ID "wcsadmin" にのみ、「Payment Manager 管理者」役割が割り当てられています。Payment Manager ユーザー・インターフェースにログインするには、以下の 4 つの Payment Manager 役割のうちのいずれかが割り当てられた管理者 ID を使用する必要があります。

- Payment Manager 管理者
- マーチャント管理者
- スーパーバイザー
- クラーク

Payment Manager 役割の詳細については、*Payment Manager 管理者ガイド* を参照してください。

wcsadmin ID で Payment Manager ユーザー・インターフェースにログインする前に、wcsadmin ユーザー ID で WebSphere Commerce 管理コンソールにログインし、ID のデフォルト・パスワードを変更しておく必要があります。そこで、パスワードを変更するよう促されます。

WebSphere Commerce 管理コンソールで Payment Manager 管理機能にアクセスすることもできます。

Payment Manager の停止

Payment Manager を停止するには、次のようにする必要があります。

1. データベースが開始されていることを確認します。

2. WebSphere Application Server が開始されていることを確認します。
3. Payment Manager を停止します。
4. WebSphere Application Server の下の Payment Manager アプリケーション・サーバーを停止します。

Payment Manager の停止

Payment Manager は、StopIBMPayServer コマンドを使用して停止できます。

1. /opt/PaymentManager ディレクトリーに移動します。
2. ./StopIBMPayServer と入力します。 StopIBMPayServer スクリプトには、引き数は指定しません。
3. プロンプトが出されたら、Payment Manager パスワードを入力します。

Payment Manager アプリケーション・サーバーの停止

WebSphere Application Server の使用時には、Payment Manager アプリケーション・サーバーを停止することによって、すべてのサブレットを停止できます。Payment Manager アプリケーション・サーバーを停止するには、次のようにします。

1. WebSphere Application Server 管理コンソールをオープンします。
2. 「**WebSphere Administrative Domain (WebSphere 管理可能ドメイン)**」を展開します。
3. 「**Nodes (ノード)**」を展開します。
4. Payment Manager がインストールされているノードを展開します。
5. 「**Application Servers (アプリケーション・サーバー)**」を展開します。
6. 「**WebSphere Payment Manager**」を右クリックして、「**停止**」を選択します。

第 18 章 パスワードの設定と変更

WebSphere Commerce Suite のほとんどのコンポーネントでは、オペレーティング・システムによって検証されるユーザー ID とパスワードを使用します。これらのパスワードの変更については、オペレーティング・システムの資料を参照してください。この章では、オペレーティング・システム経由でユーザー ID やパスワードの検証を行わずに、WebSphere Commerce Suite コンポーネントでパスワードを設定および変更する方法を扱います。

構成マネージャー・パスワードの変更

構成マネージャー・パスワードを変更するには、構成マネージャーを立ち上げてから、ユーザー ID とパスワードを入力するウィンドウで「変更」をクリックします。

あるいは、コマンド・ウィンドウに以下のコマンドを入力して、構成マネージャーのユーザー ID とパスワードを変更します。

```
cd /opt/WebSphere/CommerceServer/bin
./config_env.sh
java com.ibm.commerce.config.server.PasswordChecker -action [action type]
    -pwfile [password file] -userid [user ID]
    -password [userid password] [-newpassword [new userid password]]
```

ここで、action type (アクション・タイプ) は、Add、Check、Delete、または Modify です。各パラメーターについて以下に説明します。

pwfile

ファイルが保管されるパス。デフォルトのパスは、
/opt/WebSphere/CommerceServer/bin です。このパラメーターは常に必須です。

userid

追加、作成、削除、または変更するユーザー ID を入力します。このパラメーターは常に必須です。

password

検査、作成、削除、または変更したいパスワードを入力します。このパラメーターは、userid パラメーターと組み合わせて使用する必要があります。このパラメーターは常に必須です。

newpassword

特定のユーザー ID のパスワードを変更するには、このパラメーターを使用します。このパラメーターは、userid および password パラメーターと組み合わせて使用する必要があります。このパラメーターが必要なのは、アクション・タイプ Modify を指定する場合です。

暗号化された WebSphere Commerce 管理コンソール・パスワードの判別

セキュリティ上の理由から、WebSphere Commerce 管理コンソール・システムによって割り当てられたパスワードは暗号化されます。暗号化されたパスワードを判別する必要がある場合は、次のようにします。

1. 次のように入力します。

```
cd /opt/WebSphere/CommerceServer/bin
./wcs_encrypt.sh wcsadmin_password [merchant_key]
```

merchant_key には、WebSphere Commerce を構成した際に使用したマーチャント鍵を入れます。デフォルトのマーチャント鍵を使用した場合は、このパラメーターを省略してもかまいません。コマンドの応答は 2 つの文字ストリング (一方は ASCII 文字ストリングで、もう一方は 16 進数文字ストリング) で戻されることを覚えておいてください。

WebSphere Commerce 管理コンソール・パスワードの更新

コマンド行からデータベース作成スクリプトを使用する場合は、パスワードを二重引用符で囲わないと、WebSphere Commerce 管理コンソール・パスワードでログインできません。

WebSphere Commerce 管理コンソールにログインするときにパスワードの問題が生じた場合は、次のようにしてください。

1. DB2 インスタンス ID でログインした状態で、以下のように入力してデータベースに接続します。

```
db2 connect to db_name user user_name using password
```

変数は以下のように定義されています。

db_name

WebSphere Commerce データベースの名前。例えば、**wcs** など。

user_name

DB2 インスタンス名。

password

DB2 インスタンス名に対応するパスワード。

2. 以下のコマンドを入力して、USERREG テーブルの WebSphere Commerce 管理コンソール・パスワードが `wcs_encrypt` 暗号化ストリング (ASCII) と一致していることを確認してください。

```
db2 "select logonpassword from userreg where logonid='wcsadmin'"
```

3. 以下のコマンドを入力します。

```
./wcs_password.sh password SALT merchant_key
```

ここで、*password* はプレーン・テキスト・パスワード、*SALT* はパスワードと一緒に使用される *SALT* です。これは、パスワードを更新している特定ユーザーの *USERREG* データベース・テーブルの *SALT* 列にあります。また、*merchant_key* は、WebSphere Commerce インスタンスを作成したときに使用したマーチャント鍵です。

コマンドの出力の例を示すと、次のようになります。

```
IBM*
Licensed Materials - Property of IBM
5697-A16
(C) Copyrights by IBM and by other(s) 1978, 1997. All Rights Reserved.
* Trademark of International Business Machines Corp.
=== WCS Encrypted Password ===
ASCII Format: pArp97jT4NOXN6MyWswTQpwaPbIFsEWQGwfeu08yIyM=
Hex Format: 7041727039376a54344e4f584e364d79577377545170776d
```

この暗号化された値を使用して、パスワードを更新します。例えば、次のように入力します。

```
db2 "update USERREG set LOGONPASSWORD='pArp97jT4NOXN6MyWswTQpwaPbIFs
EWQGwfeu08yIyM= 'where LOGONID='wcsadmin'"
```

LOGONPASSWORD の値は暗号化されたストリング (ASCII) になりますので注意してください。

WebSphere Commerce 管理コンソール・パスワードの変更

パスワードは、WebSphere Commerce 管理コンソールで変更できます。

WebSphere Commerce 管理コンソールでパスワードを変更するには、次のようにします。

1. WebSphere Commerce 管理コンソールを始動します。
2. 「ログオン」ページで、インストールの際に作成された管理コンソールのログオン・ユーザー名とパスワードを入力します。初期設定では、ユーザー名とパスワードは両方とも *wcsadmin* になっています。
3. 「パスワード変更」チェック・ボックスを選択し、「ログオン」をクリックします。「パスワード変更」ページが表示されます。
4. 「**Old Password (旧パスワード)**」フィールドに、現在の管理コンソール・ログオン・パスワードを入力します。このフィールドには、最大 128 文字の英数字を入力できます。
5. 「**新規パスワード**」フィールドに、新しいログオン・パスワードを入力できます。このフィールドには、最大 128 文字の英数字を入力できます。
6. 「**確認パスワード**」フィールドに、パスワードをもう一度入力します。
7. 新しいパスワードを保管する場合は、「**変更**」をクリックします。「ストアおよび言語の選択」ページが表示されます。

8. WebSphere Commerce 管理コンソールを終了します。

IBM HTTP Server 管理者パスワードの設定

IBM HTTP Server 管理者パスワードを設定するには、以下のようになります。

1. 以下のディレクトリーに切り替えます。

```
/opt/IBMHTTPServer/bin
```

2. 以下のコマンドを入力します。

```
./htpasswd -b ../conf/admin.passwd user password
```

ここで、*user* および *password* は、IBM HTTP Server への管理権限を付与するユーザー ID およびパスワードです。

これで、IBM HTTP Server 管理パスワードを正しく設定できました。

SSL 鍵ファイル・パスワードの変更

IBM HTTP Server を使用している場合、SSL 鍵ファイル・パスワードを変更するには、以下のステップに従います。

1. 以下を入力して、鍵管理ユーティリティーをオープンします。

```
cd /opt/IBMHTTPServer/ssl  
ikeyman
```

2. 「**Key Database File (鍵データベース・ファイル)**」メニューから、「**オープン**」を選択します。
3. 以下のディレクトリーに切り替えます。

```
/opt/IBMHTTPServer/ssl
```

鍵ファイル (ファイル拡張子 *.kdb*) は、このフォルダーに入っていないければなりません。入っていない場合は、107 ページの『第 12 章 IBM HTTP Server との実動用に SSL を使用可能にする』で示されている指示に従って新しい鍵ファイルを作成します。

4. 「**Key Database File (鍵データベース・ファイル)**」メニューから、「**パスワード変更**」を選択します。「パスワード変更」ウィンドウが表示されます。
5. 新しいパスワードを入力し、「**Stash the password to a file (パスワードをファイルに隠す)**」を使用可能にします。
6. 「**OK**」をクリックします。パスワードが変更されます。

これで、SSL 鍵ファイルの管理パスワードを正しく変更できました。

第 19 章 通常の管理用タスク

この章では、WebSphere Commerce を使用する際に通常実行する管理用タスクのいくつかについて説明します。

WebSphere Application Server へのポート・ホスト別名の追加

WebSphere Application Server には、2 つのポート・ホスト別名 (非セキュア・サーバー・ポート (ポート 80) とセキュア・サーバー・ポート (ポート 443)) を追加する必要があります。非セキュア・ポートは自動的に追加されます。セキュア・ポート・ホスト別名を手動で追加するには、以下のようにします。

1. WebSphere Application Server 管理コンソールを始動します。
2. 「**WebSphere Administrative Domain (WebSphere 管理可能ドメイン)**」を展開します。
3. 左側のコンソール・フレームにある「**Virtual Host (仮想ホスト)**」を選択します。
4. 単一インスタンス環境の場合は、**default_host**、複数インスタンス環境の場合は、**virtual_host_instance_name** を選択します。
5. 「一般」タブを選択します。
6. ポート番号が「別名」フィールドに表示されない場合は、「追加」をクリックして、ポート番号を追加します。
7. 完了したら、「適用」をクリックします。
8. 左側のコンソール・フレームにある「**WebSphere Commerce Server**」を選択します。
9. WebSphere Commerce サーバーをマウスの右ボタンでクリックし、「停止」を選択して停止します。サーバーが正しく停止されると、ダイアログ・ボックスが表示されます。
10. WebSphere Commerce サーバーをマウスの右ボタンでクリックし、「開始」を選択して再始動します。

構成マネージャーの使用

構成マネージャーを開始するには、以下のステップを完了します。

1. ターミナル・ウィンドウをオープンします。
2. 55 ページの『インストール後スクリプトの実行』で作成された WebSphere Application Server ユーザーとしてログオンしていることを確認します。

```
su - wasuser
```

3. WebSphere Commerce マシン上で作業中の場合でも、表示をエクスポートします。

```
export DISPLAY=fully_qualified_host_name:0.0
```

システムが Can not open DISPLAY= と応答する場合、 WebSphere Commerce マシンで次のコマンドを実行します。

```
xhost +host_name
```

host_name は、構成マネージャーのアクセス元にするマシンの完全修飾ホスト名です。

4. 以下のコマンドを発行します。

```
cd /opt/WebSphere/CommerceServer/bin
./config_server.sh
```

注:

- a. `config_server.sh` コマンドを入力したターミナル・ウィンドウは閉じないでください。閉じると、構成マネージャー・サーバーが停止してしまいます。
- b. 構成マネージャー・サーバーをバックグラウンド・プロセスとして実行しないでください。これはセキュリティ上の潜在的な危険になります。

5. 次のメッセージを待ちます。Registry created. CMServer bound in registry.

6. ターミナル・ウィンドウをもう 1 つオープンします。

7. 55 ページの『インストール後スクリプトの実行』で作成された WebSphere Application Server ユーザーとしてログオンしていることを確認します。

```
su - wasuser
```

8. WebSphere Commerce マシン上で作業中の場合でも、表示をエクスポートします。

```
export DISPLAY=fully_qualified_hostname:0.0
```

9. 以下のコマンドを発行します。

```
cd /opt/WebSphere/CommerceServer/bin
./config_client.sh &
```

10. 構成マネージャーのユーザー ID とパスワードを入力するウィンドウが表示されます。構成マネージャーのデフォルト・ユーザー ID は `webadmin`、デフォルト・パスワードは `webibm` です。

11. 初回ログイン時に、パスワードを変更するよう促されます。

WebSphere Commerce インスタンスの更新

WebSphere Commerce インスタンスの構成設定を変更する場合は、構成マネージャーまたはコマンド行から実行できます。

構成マネージャーを使用して WebSphere Commerce インスタンスを更新するには、以下のようになります。

- 1 つ前のセクションで説明したようにして構成マネージャーをオープンします。
2. インスタンスのリストから、構成するインスタンスを選択し、設定を変更するノードを選択します。57 ページの『第 9 章 構成マネージャーによるインスタンスの作成または変更』のガイドラインに従って、インスタンスを更新するために変更しなければならないフィールドを判別します。
3. インスタンスを更新したら、「適用」をクリックして変更内容を適用します。

WebSphere Commerce インスタンスの削除

WebSphere Commerce インスタンスを削除しなければならない場合は、以下のステップを完了します。

1. WebSphere Application Server 管理コンソールで以下を行います。
 - a. 「**Application Servers (アプリケーション・サーバー)**」を展開します。
 - b. 削除しようとしているインスタンスに対応する WebSphere Commerce アプリケーション・サーバーを右クリックし、「**Stop (停止)**」を選択します。
 - c. 「**Enterprise Applications (エンタープライズ・アプリケーション)**」を展開します。
 - d. 「**WebSphere Commerce エンタープライズ・アプリケーション - *instance_name***」を右クリックし、「**停止**」を選択してから、再度右クリックし、「**除去**」を選択します。
 - e. 削除しようとしているインスタンスに対応する WebSphere Commerce アプリケーション・サーバーを右クリックし、「**除去**」を選択します。
 - f. 「**Resources (リソース)**」を展開します。
 - g. 「**JDBC Providers (JDBC プロバイダー)**」を展開します。
 - h. インスタンスに対応する JDBC ドライバーを展開し、「**Data Sources (データ・ソース)**」をクリックします。
 - i. 右側のパネルでデータ・ソースを右クリックし、「**除去**」を選択します。
 - j. JDBC ドライバーを右クリックし、「**除去**」を選択します。
 - k. 「**Virtual Hosts (仮想ホスト)**」をクリックします。
 - l. 右ペインで **VH_***instance_name* を右クリックし、「**除去**」を選択します。
 - m. 右ペインで **VH_***instance_name_tools* を右クリックし、「**除去**」を選択します。
 - n. 「**ノード**」を展開します。

- o. *host_name* を右マウス・ボタンでクリックしてから、「**Regen Webserver Plugin (Web サーバー・プラグインの再生成)**」を選択します。
 - p. 136 ページの『IBM HTTP Server の開始と停止』や各 Web サーバーの資料に記載されている情報に従って、Web サーバーを再始動します。
2. 以下のいずれかの方法により、WebSphere Commerce インスタンスを削除します。
- WebSphere Commerce 構成マネージャーで、インスタンスをマウスの右ボタンでクリックし、「削除」を選択します。
 - ターミナル・ウィンドウで、以下のコマンドを実行します。

```
cd /opt/WebSphere/CommerceServer/bin
./config_server.sh
```

別のターミナル・ウィンドウで、以下のコマンドを実行します。

```
cd /opt/WebSphere/CommerceServer/bin
./config_client.sh -startCmdLineConfig deleteInstance <instance_name>
```

3. WebSphere Commerce データベースを除去します。
- a. 以下のコマンドを入力して、WebSphere Commerce データベースを除去します。

```
su - db2inst1
db2 drop db r<db_name>
db2 uncatalog db <db_name>
db2 uncatalog node <node_name>
```

ここで、<db_name> は構成マネージャーに入力した WebSphere Commerce データベースの名前であり、<node_name> はこのデータベース用にカタログに入れたノードの名前です。デフォルトのノード名は、マシンのホスト名の短縮名（つまり、完全修飾名ではない）です。変更を有効にするために、DB2 をいったん停止して再始動します。

4. /opt/WebSphere/CommerceServer/instances/*instance_name* ディレクトリーを削除します。
5. 次のファイルを削除してください。

```
/opt/WebSphere/AppServer/installedApps/WC_Enterprise_App_<instance_name>.ear
```

instance_name は、削除する WebSphere Commerce インスタンスの名前です。

コマンド行での構成作業

コマンド行で、次のことを行えます。

- インスタンスを更新するには、以下のようにします。

```
/opt/WebSphere/CommerceServer/bin/config_client -startCmdLineConfig  
updateInstance <xml_file>
```

- インスタンスを削除するには、以下のようにします。

```
/opt/WebSphere/CommerceServer/bin/config_client -startCmdLineConfig  
deleteInstance <instance_name>
```

- 既存のインスタンスをリストするには、以下のようにします。

```
/opt/WebSphere/CommerceServer/bin/config_client -startCmdLineConfig  
getInstances
```

- インスタンスに関する情報を検索するには、以下のようにします。

```
/opt/WebSphere/CommerceServer/bin/config_client -startCmdLineConfig  
getInstanceInfo <instance_name>
```

- インスタンスの構成情報をファイルに出力するには、以下のようにします。

```
/opt/WebSphere/CommerceServer/bin/config_client -startCmdLineConfig  
getInstanceConfig instance_name print_to_file_name
```

WebSphere Application Server のオープン

WebSphere Application Server 管理コンソールにアクセスするには、以下のステップを実行してください。

```
su - wasuser  
export DISPLAY=fully_qualified_host_name:0.0  
cd /opt/WebSphere/AppServer/bin  
./adminclient.sh remote_WAS_host_name port
```

fully_qualified_host_name は WebSphere Application Server 管理コンソールへのアクセスに使用しているコンピューターの名前、*remote_WAS_host_name* は WebSphere Application Server の完全修飾ホスト名、*port* は WebSphere Application Server へのアクセスに使用するポート (デフォルト・ポートは 2222) を示します。

WebSphere Commerce 管理コンソールの開始

WebSphere Commerce 管理コンソールを立ち上げるには、次のようにします。

1. WebSphere Commerce インスタンスが開始されていることを確かめます。インスタンスは、WebSphere Application Server 管理コンソールから開始できます。
2. Internet Explorer をオープンして、URL: `https://host_name:8000/adminconsole` を入力します。この `host_name` には、WebSphere Commerce サーバーの完全修飾ホスト名が入ります。
3. 以下のようにして、管理コンソールにログオンします。
 - 管理コンソールにログオンしてログオン・パスワードを変更する場合は、次のようにします。
 - a. 「ログオン」ページで、インストールの際に作成された管理コンソールのログオン・ユーザー名とパスワードを入力します。初期設定では、ユーザー名とパスワードは両方とも `wcsadmin` になっています。
 - b. 「パスワード変更」チェック・ボックスを選択し、「ログオン」をクリックします。「パスワード変更」ページが表示されます。
 - c. 「Old Password (旧パスワード)」フィールドに、現在の管理コンソール・ログオン・パスワードを入力します。このフィールドには、最大 128 文字の英数字を入力できます。
 - d. 「新規パスワード」フィールドに、新しいログオン・パスワードを入力できます。このフィールドには、最大 128 文字の英数字を入力できます。
 - e. 「確認パスワード」フィールドに、パスワードをもう一度入力します。
 - f. 新しいパスワードを保管する場合は、「変更」をクリックします。「ストアおよび言語の選択」ページが表示されます。
 - 管理コンソールのログオン・パスワードを変更せずにログオンする場合は、次のようにします。
 - a. 「ログオン」ページで、インストールの際に作成された管理コンソールのログオン・ユーザー名とパスワードを入力し、「ログオン」をクリックします。初期設定では、ユーザー名とパスワードは両方とも `wcsadmin` になっています。複数のストアまたは言語での操作が許可されている場合、「ストアおよび言語の選択」ページが表示されます。単一のストアおよび言語での操作が許可されている場合、「管理コンソール」ホーム・ページが表示されます。「管理コンソール」ホーム・ページには、実行を許可されているタスクが表示されます。
4. 「ストアおよび言語の選択」ページでは、作業を行うストアの名前と使用したい言語を選択します。1 つのストアでの操作が許可されている場合は、初めからストアが選択されています。また、1 つの言語での操作が許可されている場合は、初めから言語が選択されています。「管理コンソール」ホーム・ページが表示されます。「管理コンソール」ホーム・ページには、実行を許可されているタスクが表示されます。

IBM HTTP Server ホーム・ページへの接続

IBM HTTP Server を使用している場合、Web サーバーのホーム・ページに接続するには、以下のステップに従います。

1. IBM HTTP Server を開始するときは、ユーザー ID `root` でログオンするようにします。ログオンしたら、ターミナル・ウィンドウに以下のコマンドを入力してください。

```
cd /opt/IBMHTTPServer/bin
./apachectl start
```

2. Web ブラウザーを始動し、すべてのディスクおよびメモリー・キャッシュを使用不可にしてクリアしてから、すべてのプロキシー・サーバーを使用不可にします。(一部のブラウザーでは、プロキシー・サーバーが *Socks* サーバーと呼ばれています。)
3. Web サーバーのフロントページにアクセスするには、Web ブラウザーに以下の URL を入力します。

```
http://host_name
```

Web サーバーをカスタマイズした場合、ホスト名の後に Web サーバーのフロントページの名前を入力する必要があります。

これで、Web サーバーのフロントページに正しくアクセスできました。

IBM HTTP Server での仮想ホスト名の使用

実際のサーバー・ホスト名の代わりに仮想ホスト名を使用すると、ファイル構造がわからないのでセキュリティーが向上するうえ、見た目にもよりプロフェッショナルな Web サイトを構築できます。

仮想ホスト名を作成するには、以下のステップを実行します。

1. ユーザー ID `wasuser` に切り替えます。
2. `/opt/IBMHTTPServer/conf` ディレクトリーに切り替えます。
3. テキスト・エディターで `httpd.conf` ファイルをオープンします。
4. `DirectoryIndex index.html` を検索してください。 `index.html` の部分をストアのホーム・ページ名に置き換えます。
5. `#ServerName new.host.name` を検索してください。この行をコメント化し、 `new.host.name` の部分を仮想ホスト名に置き換えます。
6. `<VirtualHost machine.name.com:443>` を検索してください。 `machine.name.com` の部分を、登録しているホスト名に置き換えます。
7. `DocumentRoot "/opt/IBMHTTPServer/htdocs/locale"` を検索してください。 `locale` の部分には、Web サーバー・マシンで使用されている言語環境のロケール・コードが入ります。サポートされているロケール・コードのリストは、6 ページの『WebSphere Commerce で使用されるロケール』を参照してください。このパスがストアの HTML サブディレクトリーを指すように変更を加えてください。

8. 「ファイル」から、「保管」を選択します。

wasuser ユーザー ID へのデータベース特権の追加

wasuser がデータベースへのアクセスを必要とする場合や、このユーザー ID で IDResGen、MassLoad、IDResolve といったツールを使用する場合は、このユーザー ID にデータベース特権を追加する必要があります。これを行うには、以下のステップを完了します。

1. 自分となるユーザーについて、以下の DB2 プロファイルを実行します。

```
db2_instance_home_directory/sql1lib/db2profile
```

Payment Manager のセットアップ

Payment Manager カセットの使用

SET™ 機能の一部として、IBM Payment Manager 3.1.2 を使用できます。ここで提供されている情報は、Payment Manager のプロセスと要件をおおまかに示すものに過ぎません。SET、Payment Manager、および構成マネージャーに関する付加的な情報は、オンライン情報として提供されています。Payment Manager に関する詳細は、*IBM WebSphere Payment Manager 管理者 (およびユーザー) の手引き* を参照してください。Payment Manager 資料をお探しの場合は、172 ページの『Payment Manager 情報』を参照してください。

IBM Payment Manager をセットアップするには、以下を行う必要があります。

1. 支払処理を実行するための決済機関を手配します。決済機関からは、構成に関する詳細情報や必要な証明書が提供されます。
2. 決済機関から提供された情報を使用して、SET を構成してください。このステップは、Payment Manager ユーザー・インターフェースを使用して実行されます。マーチャントの決済機関とブランドを構成する一環として、マーチャントの SET 証明書が取得されます。
3. ホーム・ページを作成するときは、ショッパーがウォレットを取得するために必要とする情報を含めてください。この情報は、決済機関から提供されるでしょう。まだショッパーがすぐにウォレットを使用できるようになっていない場合は、Payment Manager の Merchant Originated Payment (MOP) フィーチャーを使用できます。MOP のサポートに関する詳細は、WebSphere Commerce のオンライン・ヘルプを参照してください。

Payment Manager 管理者役割

Payment Manager をインストールする時点で、WebSphere Commerce 管理者 ID wcsadmin に Payment Manager 管理者役割が自動的に割り当てられます。Payment Manager 管理者役割が割り当てられている ID では、Payment Manager の制御と管理が可能です。

注:

1. ログオン・ユーザー ID wcsadmin は削除したり名前を変更したりしないでください。また、wcsadmin に事前に割り当てられている Payment Manager の役割は変更しないようにしてください。変更すると、Payment Manager の整合性に関連した WebSphere Commerce の機能の一部が動作しなくなります。
2. WebSphere Commerce の管理者に Payment Manager の役割を割り当てた場合、後でその管理者のログオン・ユーザー ID を削除したり名前を変更したりするときには、ID を削除または名前変更する前に、まずその管理者に割り当てた Payment Manager の役割を削除してください。

重要

wcsadmin ユーザー ID に加えて、Payment Manager は Payment Manager 管理者役割を以下の 2 つの管理者 ID に事前に割り当てます。

- admin
- ncdadmin

あるユーザーが誤ってその Payment Manager 管理者役割を取得することがないようにするには、以下のようにします。

- WebSphere Commerce 管理コンソールを使用して、WebSphere Commerce の中で上記の管理者 ID を作成します。
- Payment Manager のユーザー・インターフェースで、「ユーザー」を選択します。
- この ID から Payment Manager 管理者の役割を除去します。

Payment Manager マシンのセットアップ

Payment Manager マシンを構成するときは、*IBM WebSphere Payment Manager for Multiplatforms 管理者ガイド* の『はじめに』の章を参照してください。このセクションでは、以下のプロセスを説明しています。

- Payment Manager のユーザー・インターフェースの開始
- Payment Manager のマーチャントの作成、およびカセットの許可
- ユーザー役割の割り当て
- アカウントの作成
- 支払処理の管理

Payment Manager のユーザー・インターフェースにログオンする前に、WebSphere Commerce が実行されていること、および Payment Manager アプリケーション・サーバーが開始および初期化されていることを確認してください。詳しくは、137 ページの『Payment Manager の開始と停止』を参照してください。

重要

Payment Manager のユーザー・インターフェースの「**Payment Manager 設定**」パネルにリストされるホスト名が、完全修飾ホスト名であることを確認してください。そうでない場合は、「ホスト名」フィールドを完全修飾ホスト名に変更して、「更新」をクリックし、「**Disable Payment Manager (Payment Manager 使用不可)**」をクリックしてから、「**Enable Payment Manager (Payment Manager 使用可能)**」をクリックします。

WebSphere Commerce インスタンス用の支払ノードを構成マネージャーでまだ更新していない場合は、64 ページの『Payment Manager』の説明に従って、これを更新してください。

このほか、Payment Manager の管理機能へは、サイト・マネージャーの「Payment Manager」メニューから WebSphere Commerce 管理コンソールを介してもアクセスできます。

第 8 部 付録

付録 A. WebSphere Commerce コンポーネントのアンインストール

WebSphere Commerce のインストールにおいて問題が生じた場合、1 つまたは複数のコンポーネントをアンインストールしてやり直す場合があります。ここでは、WebSphere Commerce の各コンポーネントをアンインストールする方法を説明します。原則として、コンポーネントのアンインストールは、インストールしたときと逆の順番で行います。ですから、必須ソフトウェアをすべてインストールしている場合は、次のような順番でアンインストールを実行することになります。

1. Payment Manager
2. WebSphere Commerce
3. WebSphere Application Server
4. IBM HTTP Server
5. DB2 Universal Database

Payment Manager のアンインストール

Payment Manager をアンインストールするには、以下のようにします。

1. 137 ページの『Payment Manager の開始と停止』の説明に従って、Payment Manager を停止します。
2. /opt/PaymentManager ディレクトリーまたはそのサブディレクトリーでファイルを作成またはカスタマイズした場合、それらを保存しておきたければ、異なるディレクトリーにそれらをバックアップしてください。
3. マシンにインストールされている Payment Manager 製品を検索します。これには、IBM Payment Manager 3.1.2 およびインストール済みのカセットが含まれています。
4. 最初に Payment Manager カセットをアンインストールします。
5. Payment Manager フレームワークをアンインストールします。

WebSphere Commerce のアンインストール

WebSphere Commerce をアンインストールするには、以下のようにします。

1. 135 ページの『WebSphere Commerce の開始と停止』の説明に従って、WebSphere Commerce を停止します。

2. /opt/WebSphere/CommerceServer ディレクトリーまたはそのサブディレクトリーでファイルを作成またはカスタマイズした場合、それらを保存するには、WebSphere Commerce コンポーネントにより使用されていないディレクトリーにバックアップしてください。
3. ユーザー ID root にログオンして、WebSphere Commerce アンインストール・プログラムを起動します (「メイン・メニュー」→「**WebSphere Commerce**」→「**WebSphere Commerce のアンインストール**」)。
4. WebSphere Commerce アンインストール・プログラムにより、正しくアンインストールするための条件が示されます。これらの条件を満たすことを確認し、「次へ」をクリックします。
5. WebSphere Commerce をアンインストールすることを確認されます。「次へ」をクリックして続行します。
6. アンインストール・プログラムが完了したら、「終了」をクリックしてアンインストール・プログラムを終了します。
7. /opt/WebSphere/CommerceServer ディレクトリーがまだ存在するなら、次のように入力してそれを除去します。

```
cd opt/WebSphere
rm -rf CommerceServer
```

注: WebSphere Commerce のアンインストール後、/opt/WebSphere/CommerceServer ディレクトリーにソフト・リンクが残る場合があります。WebSphere Commerce を再インストールする前に、これらのリンクを手動で解除してください。

WebSphere Application Server および IBM SDK for Java のアンインストール

WebSphere Application Server をアンインストールするには、次のようにします。

1. 135 ページの『WebSphere Application Server の開始と停止』の説明に従って、WebSphere Application Server を停止します。
2. /opt/WebSphere/AppServer ディレクトリーまたはそのサブディレクトリーでファイルを作成またはカスタマイズした場合、それらを保存しておきたければ、異なるディレクトリーにそれらをバックアップしてください。
3. 次のコマンドを実行して、RPM パッケージをアンインストールします。

```
cd /opt/WebSphere/AppServer
./uninstall.sh
```

4. /opt/WebSphere/AppServer ディレクトリーがまだ存在するなら、次のように入力してそれを除去します。

```
rm -rf /opt/WebSphere/AppServer
```

注: WebSphere Application Server をインストールする前に Web サーバー構成ファイルに対して行ったすべての変更内容やカスタマイズ内容は、バックアップ構成ファイ

ルにあります。これらの設定を再びアクティブにするには、それらの設定をバックアップ・ファイルからアクティブな Web サーバー構成ファイルに転送する必要があります。

IBM HTTP Server のアンインストール

注:

1. IBM HTTP Server をアンインストールした場合は、WebSphere Application Server もアンインストールする必要があります。
2. IBM HTTP Server と WebSphere Application Server を再インストールするときは、必ず WebSphere Application Server を再インストールする前に IBM HTTP Server をインストールしてください。

IBM HTTP Server をアンインストールするには、以下のようにします。

1. 136 ページの『IBM HTTP Server の開始と停止』の説明に従って、IBM HTTP Server を停止します。
2. /opt/IBMHTTPServer ディレクトリーまたはそのサブディレクトリーでファイルを作成またはカスタマイズした場合、それらを保存するには、WebSphere Commerce コンポーネントにより使用されていないディレクトリーにバックアップしてください。
3. /opt/IBMHTTPServer/conf のコピーを保管する場合は、異なる名前にコピーしてください。
4. ユーザー ID root にログオンして、次のように入力します。

```
cd /opt/IBMHTTPServer/  
./uninstall  
rpm -e gsk5bas-5.0-4.25  
rm -rf /opt/IBMHTTPServer
```

5. 158 ページの『WebSphere Application Server および IBM SDK for Java のアンインストール』の説明に従って、WebSphere Application Server をアンインストールします。
6. 「WebSphere Application Server, Advanced Edition」の CD から IBM HTTP Server を再インストールします。
7. 「WebSphere Application Server, Advanced Edition」の CD から WebSphere Application Server を再インストールします。
8. 107 ページの『第 12 章 IBM HTTP Server との実動用に SSL を使用可能にする』のステップに従います。

DB2 Universal Database のアンインストール

重要: DB2 をアンインストールすると、データベース内のすべての情報が削除されます。

DB2 Universal Database をアンインストールするには、以下のようになります。

1. データベースを保管する場合は、DB2 の資料の説明に従い、バックアップを行ってください。(DB2 Web サイトのオンライン DB2 ドキュメンテーションへのアクセスについては、173 ページの『DB2 Universal Database 情報』を参照してください。) バックアップを完了した後、バックアップしたデータベースを、いずれの WebSphere Commerce コンポーネントによっても使用されていないディレクトリーに移動します。

2. コマンド・プロンプトで次のコマンドを入力し、DB2 インスタンス ID に切り替えます。

```
su - db2inst_ID
```

db2inst_ID は、DB2 インスタンス ID です。

3. データベースをバックアップしたら、次のようになります。

- a. シェル・プロンプトで次のコマンドを入力し、全データベースをリストします。

```
db2 list db directory
```

- b. 次のコマンドを入力し、DB2 データベースを除去します。

```
db2 force application all  
db2 drop db db_name
```

リモート・データベースおよび wasloop データベースの場合、以下のコマンドを実行します。

```
db2 uncatalog db db_name
```

4. DB2 を除去する前に、必ず DB2 インスタンスをすべて停止させてください。DB2 インスタンスを停止するには、以下のようになります。

- a. システム上のすべての DB2 インスタンスをリストするため、次のコマンドを入力します。

```
cd /usr/IBMDB2/V7.1/bin  
./db2ilist
```

- b. インスタンス所有者としてログインします。

- c. 以下のスクリプトを実行します。

```
. instance_home/sqllib/db2profile
```

ここで、*instance_home* は、インスタンスのホーム・ディレクトリーです。

- d. コマンド行から `db2stop` と入力して、DB2 データベース・マネージャーを停止します。

- e. インスタンスごとにステップ 4b ~ 4d を繰り返します。
5. システム上の DB2 バージョン 7 インスタンスをすべて除去するか、一部残すかは、任意に決定できます。一度インスタンスを除去してしまうと、そのインスタンスが所有していた DB2 データベースは (存在する場合) すべて使用できなくなります。DB2 インスタンスは、DB2 バージョン 7 製品を使用する予定がない、または既存のインスタンスを上位バージョンの DB2 にマイグレーションする予定がない場合にのみ、除去してください。

インスタンスを除去するには、次のようにします。

- a. インスタンス所有者としてログインします。
- b. `db2stop` コマンドを実行して、インスタンスを停止させます。
- c. 必要であれば、`instance_home/sqllib` ディレクトリー内のファイルをバックアップします。なお、この `instance_home` の部分には、インスタンス所有者のホーム・ディレクトリーを当てはめてください。
- d. インスタンス所有者としてログオフします。
- e. `root` 権限のあるユーザー ID としてログオンします。
- f. 次のコマンドを入力して、インスタンスを除去します。

```
cd /usr/IBMdb2/V7.1/instance
./db2idrop instance_name
```

`instance_name` には、インスタンスのログオン名を入れてください。

`db2idrop` コマンドは、インスタンスのリストからインスタンスのエントリーを除去し、`instance_home/sqllib` ディレクトリーを除去します。なお、この `instance_home` の部分には、インスタンスのホーム・ディレクトリーが入ります。

6. DB2 を除去する前に、すべての DB2 プロセスが停止していることを確認してください。
7. DB2 をアンインストールするには、以下のようにします。
 - a. `root` 権限のあるユーザーとしてログインします。
 - b. WebSphere Commerce Disk 2 CD を挿入し、以下のコマンドを実行して、アンインストール・プログラムを実行します。

```
cd /CDROM_dir/Software_Patches/DB2_FP6
cp FP6_U481413.tar /tmp
cd /tmp
tar -xvf FP6_U481413.tar
cd delta_install
./db2_deinstall -n
```
 - c. 次のようにして、残りの DB2 ファイルおよびディレクトリーを除去します。
 - 1) パターンが `/tmp/db2*` のファイルが存在する場合、以下のように入力してそれらを除去してください。

```
rm -rf /tmp/db2*
```

- 2) /usr/IBMd2/V7.1 ディレクトリーが存在するなら、次のように入力してそれを除去します。

```
rm -rf /usr/IBMd2/V7.1
```

- 3) DB2 インスタンスに /home ディレクトリーが残っている場合は、次のようにしてそれらを除去します。

```
rm -rf /home/db2_instance_ID
```

ここで、*db2_instance_ID* は、インスタンス ID です (db2inst1 など)。

WebSphere Commerce コンポーネントの再インストール

WebSphere Commerce の一部を再インストールする場合は、以下の一般的な規則に従ってください。

- アンインストールしたいすべてのコンポーネントをアンインストールしてから、それらすべてを再インストールします (コンポーネントを 1 つずつアンインストールしてから再インストールするではありません)。
- WebSphere Application Server をアンインストールして再インストールしなければ、Web サーバーをアンインストールして再インストールすることはできません。
- Web サーバーを再インストールする場合は、SSL を手動で有効にする必要があります。ガイドンスについては、107 ページの『第 12 章 IBM HTTP Server との実動用に SSL を使用可能にする』を参照してください。
- 57 ページの『第 9 章 構成マネージャーによるインスタンスの作成または変更』の指示に従い、インスタンスを削除して再作成する必要があります。

付録 B. トラブルシューティング

この付録は以下の 2 つのセクションに分かれています。

- ダウンロード可能なツール
- ログ・ファイルとその使用法
- 特定のトラブルシューティング・ステップ

ダウンロード可能なツール

WebSphere Commerce Installation and Configuration Checker

WebSphere Commerce Installation and Configuration Checker (IC Checker) は、スタンドアロンのダウンロード可能な問題判別ツールです。これを使用して、WebSphere Commerce のインストールと構成を検査することができます。IC Checker は構成データとログを収集して、簡単なエラー検査を実行します。以下に、WebSphere Commerce IC Checker についての説明を示します。

- 現在サポートされている製品は、WebSphere Commerce Suite 5.1 Start と Pro、WebSphere Commerce 5.1 Business Edition、および WebSphere Commerce 5.4 Pro と Business Edition です。
- 現在サポートされているプラットフォームは、Windows NT 4.0、Windows 2000、AIX、Solaris、および OS/400 です。
- ツールは、以下の URL にアクセスしてオンラインでダウンロードすることができます。

▶ Business

www.ibm.com/software/webservers/commerce/whats_new_support.html
www.ibm.com/software/webservers/commerce/wc_be/support-tools.html

▶ Professional

www.ibm.com/software/webservers/commerce/whats_new_support.html
www.ibm.com/software/webservers/commerce/wc_pe/support.html

ログ・ファイル

WebSphere Commerce では以下のログが生成されます。

WASConfig.log

/opt/WebSphere/CommerceServer/instances/*instance_name*/logs ディレクトリにあります。このログには、WebSphere Commerce エンティティ Bean のインポートやデータ・ソースの作成などの、WebSphere Application Server アクションが記録されます。

createdb.log

/opt/WebSphere/CommerceServer/instances/*instance_name*/logs ディレクトリにあります。このログには、WebSphere Commerce スキーマ作成に関する情報が記録されます。

WCsconfig.log

/opt/WebSphere/CommerceServer/instances ディレクトリにあります。このログには、構成マネージャーのアクションが記録されます。このログの詳細レベルは、構成マネージャーのメニュー・オプションを使用して変更できます。

populatedb.log

/opt/WebSphere/CommerceServer/instances/*instance_name*/logs ディレクトリにあります。このログには、インスタンスの作成時に作成されたデータベースへのデータの移植に関する情報が記録されます。

populatedbnl.log

/opt/WebSphere/CommerceServer/instances/*instance_name*/logs ディレクトリにあります。このログには、インスタンスの作成時に作成されたデータベースへの、各国語データの移植に関する情報が記録されます。

wcs.log

/opt/WebSphere/CommerceServer/instances/*instance_name*/logs ディレクトリにあります。このログには、WebSphere Commerce アプリケーション・サーバーの始動に関する情報が記録されます。

トラブルシューティング

WebSphere Commerce のインストールの問題

このセクションでは、WebSphere Commerce 5.4 のインストール時に発生する可能性のある問題について説明します。

- 新しい顧客について、構成マネージャー・エラー・メッセージ「*Cannot create database (データベースを作成できません)*」が表示されます。

1 つまたは複数の DB2 サービスが実行されていません。考えられる原因は以下のとおりです。

1. WebSphere Commerce のインストール時にマシンが完全に再始動されず、ログオフされたただけでした。
2. DB2 のインストールが失敗し、サービスが開始できません。DB2 をインストールするには、以下のようにします。
 - a. 157 ページの『付録 A. WebSphere Commerce コンポーネントのアンインストール』の説明に従って、DB2 をアンインストールします。インストール先のドライブから /usr/IBDb2/V7.1 削除されたことを確かめてください。
 - b. DB2 Universal Database CD から DB2 を再インストールします。DB2 をインストールする方法については、17 ページの『第 3 章 IBM DB2 Universal Database 7.1.0.60 のインストール』を参照してください。
 - c. 構成マネージャーを使用して WebSphere Commerce データベースを再作成します。

WebSphere Application Server の問題

- startupServer.sh を wasuser として実行すると、結果として次のようなエラーが出されます。

```
/tmp/sh27350.13:cannot create
```

この原因は、wasuser が一時ディレクトリーに対する正しい許可を持っていないことです。一時ディレクトリーに対する許可を 777 に設定してください。

データベースの問題

ここでは、DB2 Universal Database と WebSphere Commerce 5.4 で発生する可能性のある問題について説明します。

- DB2 Universal Database が正しくインストールされていないように思える（インストール時に進行状況表示バーが 95% のところでハングする）場合は、db2.log ファイルを調べます。ログの最後に Error 106 がある場合は、インストールを終了し、DB2 Universal Database を DB2 Universal Database CD から単体で再インストールする必要があります。DB2 Universal Database のインストール後、再び WebSphere Commerce Professional Edition CD から WebSphere Commerce のインストールを試行してください。

データベース・インスタンスの問題

ここでは、DB2 Universal Database インスタンスと WebSphere Commerce 5.4 で発生する可能性のある問題について説明します。

- 構成の完了後に WebSphere Commerce サーバーが始動に失敗します。

考えられる原因は以下のとおりです。

1. WebSphere Commerce サーバーがデータベースに接続できません。データベースに接続できない原因には、以下のものが考えられます。
 - データベース・ユーザーのログオン ID やパスワードが誤っているか、無効な文字が含まれています。データベース・ユーザーのログオン ID やパスワードを検査するには、構成マネージャーを実行します。
 - WebSphere Commerce インスタンス用の DB2 データベースが存在しません。構成マネージャーを使用して、新しいデータベースを作成してください。
 - WebSphere Commerce インスタンス用の DB2 データベースがカタログに入っていない。これは、DB2 をアンインストールしてから再インストールしたときに発生する場合があります。DB2 コマンド・ウィンドウに以下のコマンドを入力し、インスタンスをカタログに入れてください。

```
db2 catalog db db_name
```

ここで、*db_name* は、データベースの名前です。

2. WebSphere Commerce サーバーがバックレベルのデータベースを検出しました。db2.log に以下のエラー・メッセージがあります。

```
The database has not been migrated to version 5.1 of  
WebSphere Commerce.
```

この問題は、既存の WebSphere Commerce 顧客や、既存のデータベースを使用する新しい WebSphere Commerce 顧客のもとで発生します。データベースがマイグレーションされていない原因には、以下のものが考えられます。

- データベース・ユーザーのログオン ID やパスワードに無効な文字が含まれています。これを訂正するには、以下のようになります。
 - a. ログオン ID とパスワードを、管理権限を持つものに変更します。構成マネージャーを実行し、「設定」を選択して、「データベース」ページでユーザー ID とパスワードを訂正してください。
 - WebSphere Commerce サーバーが、ログ・ファイルに示されている通信エラーを検出しました。このエラーは、新しい WebSphere Commerce 顧客のもとで発生します。推定される原因は、マシンの TCP/IP 構成が正しくないことです。TCP/IP を構成してから、構成マネージャーを使用して WebSphere Commerce インスタンスを削除および作成してください。
- DB2 Universal Database をアンインストールしてから再インストールした後で、DB2 Universal Database をアンインストールする前に作成されたインスタンスを始動しようとする、そのインスタンスが依然として存在しているように見えます。「サービス」メニューでこのインスタンスを参照すると、これは実行中のインスタンスとしてリストされていますが、構成マネージャーでは、非アクティブのインスタンスとしてリストされています。このインスタンスを除去してから再作成する必要があります。

Web サーバーの問題

ここでは、Web サーバーと WebSphere Commerce 5.4 で発生する可能性のある問題について説明します。

- WebSphere Application Server のインストール後に IBM HTTP Server が始動しません。

httpd.conf ファイルで必要な行が欠落している場合があります。

/opt/IBMHTTPServer/conf/httpd.conf をオープンしてください。以下の行のコメントを解除してください。存在しない場合は追加してください。

```
LoadModule ibm_app_server_http_module
    /opt/WebSphere/AppServer/bin/mod_ibm_app_server_http.so
```

あるいは、

```
LoadModule ibm_app_server_http_module
    /opt/WebSphere/AppServer/bin/mod_ibm_app_server_http.so
```

および

```
AddModule mod_app_server_http.c
    /opt/WebSphere/AppServer/bin/mod_ibm_app_server.so
```

の行がインストール時に入れ替えられた場合があります。httpd.conf ファイルで LoadModule の後に AddModule があることを確かめてください。

注: 上記の各 LoadModule 行が途中で改行されているのは、単に読みやすくするためです。LoadModule または AddModule で始まり mod_ibm_app_server.so で終わる各行は、httpd.conf ファイルでは単一の行になっています。

- SSL が使用可能になった後に IBM HTTP Server の開始に失敗する場合、以下のコマンドを実行します。

```
echo $LD_LIBRARY_PATH | grep '/usr/local/ibm/gsk5/lib'
```

応答がない場合は、以下のコマンドを実行します。

```
export LD_LIBRARY_PATH=$LD_LIBRARY_PATH:/usr/local/ibm/gsk5/lib
```

IBM HTTP Server を再始動します。

- IBM HTTP Server の非セキュアなホーム・ページにはアクセスできるが、セキュアなホーム・ページにアクセスできない場合は、以下を行います。
 - 3c (91 ページ) に従ってコメントが解除されることになっているすべての行を確認します。
 - キー・ファイルが、/opt/IBMHTTPServer/ssl ディレクトリーにあることを確認します。
 - キー・ファイル名が httpd.conf ファイルで参照されるキー・ファイル名と同じであることを確認します。

WebSphere Commerce の問題

- WebSphere Commerce JavaServer Pages (JSP) ファイルにアクセスできません。
JSP ファイルが正しい位置にあることを確かめてください。
WebSphere Commerce サーバーが WebSphere Application Server 管理コンソールで始動されていることを確かめてください。
- 応答が遅いです。
オペレーティング・システムのユーティリティーを使用して、システム負荷を検査してください。
Web サーバーのアクセス・ログを検査して、システムに対するユーザー負荷を判別してください。 IBM HTTP Server の場合、アクセス・ログは /opt/IBMHTTPServer/logs ディレクトリーにあります。
WebSphere Commerce パフォーマンス・モニターを使用可能にして、アクセスされたコンポーネントを識別してください。このコンポーネントは、構成マネージャーを介して使用可能にできます。詳しくは、81 ページの『コンポーネント』を参照してください。

Payment Manager の問題

- WebSphere Commerce のインストールの直後に Payment Manager をインストールする場合は、問題が発生することはないはずですが、インストール後スクリプトの実行後に Payment Manager をインストールする場合 (55 ページの『インストール後スクリプトの実行』に概説されています) は、Payment Manager のインストール時とアンインストール時の両方で、問題が発生します。「WPMinstall cannot detect that WebSphere Application Server running (WPMinstall は WebSphere Application Server が稼働していることを検出できません)」というエラーを受け取った場合は、以下のステップを実行します。
 1. すべての WebSphere Application Server と Java プロセス、およびすべての WebSphere Commerce 関連プロセスを停止します。
 2. /opt/WebSphere/AppServer/bin/admin.config ファイルを編集して、
com.ibm.ejs.sm.adminServer.bootstrapPort=port_number ディレクティブを除去します。ここで、port_number は WebSphere Application Server の非ルート・ポートです (デフォルト値は 2222)。
 3. また、テストの前の方の段階で lsdPort=port_number ディレクティブを追加していた場合には、これを除去します。
 4. root ユーザーとして WebSphere Application Server を再始動し、Payment Manager インストール・プログラムを再実行します。
 5. Payment Manager がインストールされたら、WebSphere Application Server と、Web サーバー (それが WebSphere Application Server と同じマシン上にある場合)

を含むすべての WebSphere Commerce 関連サービスを停止し、非ルート・オプションを選択して /opt/WebSphere/CommerceServer/bin/wcb.sh スクリプトを再実行します。

6. 既に WebSphere Commerce インスタンスを作成している場合は、以下のコマンドも実行する必要があります。

```
su - wasuser
cd /opt/WebSphere/CommerceServer/instances/instance_name/xml
chmod ugo+rx payment
cd payment
chmod ugo+r *
exit
```

- 正しい Listen ディレクティブ (Listen 80 または Listen 443) が、httpd.conf ファイルでコメント化されていないことを確認します。必要となるディレクティブは、WebSphere Commerce 構成マネージャーの Payment Manager タブを見て判断することができます。

付録 C. 詳細情報の入手方法

WebSphere Commerce システムとそのコンポーネントに関するさらに詳しい情報は、さまざまな形式でさまざまな情報源から入手できます。この部分では、利用できる情報と利用方法を示します。

WebSphere Commerce 情報

WebSphere Commerce の情報源は、以下のとおりです。

- WebSphere Commerce オンライン・ヘルプ
- WebSphere Commerce PDF ファイル
- WebSphere Commerce Web サイト

オンライン・ヘルプの使用

印刷可能な文書の調べ方

一部のオンライン情報は、PDF ファイルの形式で自分のシステムで利用することもできます。それは、Adobe® Acrobat® Reader を使うことによって表示および印刷できます。Acrobat Reader は、Adobe Web サイトから無料でダウンロードできます。その Web アドレスは以下のとおりです。

<http://www.adobe.com>

WebSphere Commerce Web サイトの閲覧

WebSphere Commerce 製品に関する情報は、WebSphere Commerce Web サイトから入手できます。

- Business Edition:
http://www.ibm.com/software/webservers/commerce/wc_be/lit-tech-general.html
- Professional Edition:
http://www.ibm.com/software/webservers/commerce/wc_pe/lit-tech-general.html

このマニュアルのコピー、およびこのマニュアルの更新済みバージョンは、WebSphere Commerce Web サイトの Library のセクションから PDF ファイルの形式で入手できます。さらに、この Web サイトから、新規および更新された文書を入手することができます。

IBM HTTP Server 情報

IBM HTTP Server の情報は、以下の Web アドレスで入手できます。

<http://www.ibm.com/software/webservers/httpservers/>

資料は、HTML 形式、PDF ファイル、あるいはその両方で入手できます。

Payment Manager 情報

Payment Manager に関する追加情報は、以下の Payment Manager Web サイトの「Library」リンクから入手できます。

<http://www.ibm.com/software/webservers/commerce/payment>

Payment Manager のドキュメンテーションは、以下の場所で入手できます。

- IBM Payment Manager 3.1.2 の CD の ディレクトリー
- IBM Payment Manager 3.1.2 カセット CD の ディレクトリー
- Payment Manager のインストール後に、 WebSphere Application Server インストール・ディレクトリーの Payment Manager ディレクトリーにインストールされます。

Payment Manager のドキュメンテーションとしては、以下のものを利用できます。

- *IBM WebSphere Payment Manager for Multiplatforms* インストール・ガイド の PDF ファイル (paymgrinstall.pdf)
- *IBM WebSphere Payment Manager for Multiplatforms* 管理者ガイド の PDF ファイル (paymgradmin.pdf)
- *IBM WebSphere Payment Manager for Multiplatforms* プログラマーのガイドとリファレンス の PDF ファイル (paymgrprog.pdf)
- *IBM WebSphere Payment Manager for Multiplatforms for SET* 補足 の PDF ファイル (paymgrset.pdf)
- *IBM WebSphere Payment Manager for Multiplatforms Cassette for VisaNet Supplement* の PDF ファイル (paymgrvisanet.pdf)
- *IBM WebSphere Payment Manager for Multiplatforms Cassette for CyberCash* 補足 の PDF ファイル (paymgrcyber.pdf)
- *IBM WebSphere Payment Manager for Multiplatforms Cassette for BankServACH Supplement* の PDF ファイル (paymgrbank.pdf)
- Payment Manager の README ファイル、HTML 形式 (readme.framework.html)
- IBM Cassette for SET の README ファイル、HTML 形式 (readme.set.html)
- IBM Cassette for VisaNet の README ファイル、HTML 形式 (readme.visanet.html)
- IBM Cassette for CyberCash の README ファイル、HTML 形式 (readme.cybercash.html)

- IBM Cassette for BankServACH の README ファイル、HTML 形式 (readme.bankservach.html)

WebSphere Commerce オンライン・ヘルプの「*Secure Electronic Transactions*」セクションにも、Payment Manager に関する情報が含まれています。

WebSphere Application Server

WebSphere Application Server に関する情報は、WebSphere Application Server Web サイトから入手できます。

<http://www.ibm.com/software/webservers/appserv>

DB2 Universal Database 情報

入手可能な DB2 の資料のリスト、およびその表示と印刷の方法については、*DB2 概説*および*インストール*をご覧ください。DB2 の追加情報は、以下の Web アドレスで入手できます。

<http://www.ibm.com/software/data/db2>

その他の IBM 資料

ほとんどの IBM 資料は IBM 特約店あるいは営業担当員から購入することができます。

付録 D. プログラム仕様と所定稼働環境

このバージョンの WebSphere Commerce は、以下の稼働環境をサポートします。

- Red Hat Linux 7.2
- SuSE Linux Enterprise Server 7 (SLES 7)

WebSphere Commerce 5.4 には、以下のコンポーネントが含まれています。

WebSphere Commerce Server

WebSphere Commerce Server は、e-commerce ソリューション内のストアおよびコマース関連機能を処理します。以下のコンポーネントによって機能が提供されています。

- ツール (ストア・サービス、ローダー・パッケージ、 Commerce Accelerator、管理コンソール)
- サブシステム (カタログ、メンバー、ネゴシエーション、オーダー)
- 商品アドバイザー
- 共通サーバー・ランタイム
- システム管理
- メッセージング・サービス
- WebSphere Application Server

ストア・サービス

ストア・サービスは、ストアの特定の運用機能を作成したり、カスタマイズしたり、保守するための中央設置場所を提供します。

ローダー・パッケージ

ローダー・パッケージを使用すると、商品情報を ASCII および XML ファイルで初期ロードできます。また、全体情報、または部分的な情報のインクリメンタル更新もできます。オンライン・カタログを更新するには、このツールを使用します。

WebSphere Commerce Accelerator

ストア・データおよび商品データが作成されたら、それを WebSphere Commerce Accelerator で使用して、ストアを管理し、ビジネス戦略を促進します。WebSphere Commerce Accelerator は、WebSphere Commerce がオンライン・ストアを運営するために配布するすべての機能 (ストア管理、商品管理、マーケティング、顧客のオーダー、顧客サービスなど) のための統合ポイントを提供します。

WebSphere Commerce 管理コンソール

サイト管理者またはストア管理者は、管理コンソールを使うことによって、サイトおよびストアの構成に関連したタスクを実行できます。

- ユーザーおよびグループの管理 (アクセス制御)
- パフォーマンス・モニター
- メッセージングの構成
- IBM WebSphere Payment Manager の機能
- Brokat Blaze Rule の管理

WebSphere Commerce 5.4 には、以下の製品がバンドルおよびサポートされています。

IBM DB2 Universal Database 7.1.0.60

DB2 Universal Database は、サイトに関するあらゆる情報のリポジトリとして、WebSphere Commerce によって使用される、機能の充実したリレーショナル・データベースです。それには、商品データとカテゴリ・データ、ページのグラフィック・エレメントへのポインター、オーダー状況、住所情報、その他の多岐にわたるデータが含まれます。

DB2 エクステンダー

DB2 エクステンダーは、DB2 のオプション・コンポーネントであり、サイトのための付加的な検索機能を提供します。DB2 Text Extender は、顧客による多種多様な検索をサポートします。それには、同義語検索、不完全一致や類似語の検索、そしてブール検索やワイルドカード検索が含まれます。

IBM HTTP Server 1.3.19.1

IBM HTTP Server は、さまざまな管理機能を提供する堅固な Web サーバーです。提供される機能には、Java デプロイメントのサポート、プロキシ・サーバーのサービス、そしてクライアント / サーバーの認証やデータ暗号化などの SSL 3 のサポートを含むセキュリティー機能が含まれます。

IBM Payment Manager 3.1.2

Payment Manager は、SET (Secure Electronic Transaction) や Merchant Initiated Authorization など、さまざまな方法を使用したマーチャント用のリアルタイム・インターネット支払処理を提供します。

WebSphere Application Server 4.0.2

WebSphere Application Server は、インターネットおよびイントラネット Web アプリケーションを作成、配備、管理するための Java ベースのアプリケーション環境です。この製品には IBM Developer Kit for Linux, Java Technology Edition, v1.3 が含まれています。

IBM WebSphere Commerce Analyzer 5.4

IBM WebSphere Commerce Analyzer は、WebSphere Commerce のオプションとしてインストールされる新しい機能です。IBM WebSphere Commerce Analyzer のエントリー版 (WebSphere Commerce 専用) は、顧客プロファイル

やキャンペーン・パフォーマンスのモニターのためのレポート機能を提供します。レポートはカスタマイズできません。IBM WebSphere Commerce Analyzer は、Brio Broadcast Server がなければインストールできません。

Brio Broadcast Server

Brio Broadcast Server は、照会の処理およびレポートの配布を自動化するバッチ処理サーバーです。Brio Broadcast Server は大量のデータを大勢の人々に配布することができますが、セキュリティ保護が製品に組み込まれて、管理者はデータベースへのアクセスおよび文書の配布を厳重に制御できます。

IBM SecureWay Directory Server 3.2.1

IBM SecureWay[®] Directory は、アプリケーション固有のディレクトリーの急増(コストの増加の主要な要因となる)を解消するための共通ディレクトリーを提供します。IBM SecureWay Directory は、LDAP のクロス・プラットフォームであり、セキュリティおよび e-business ソリューションに対して、高度にスケーラブルで、堅固なディレクトリー・サーバーです。WebSphere Commerce に付属の SecureWay のバージョンは 3.1.1.5 ですが、現在では、Web からダウンロード可能な IBM SecureWay Directory Server 3.2.1 がサポートされています。

Segue SilkPreview 1.0

Segue SilkPreview は、アプリケーション開発の総合的な結果分析とレポートのための情報リポジトリーです。

WebSphere Commerce 5.4 Recommendation Engine powered by LikeMinds

5.2.1 Macromedia LikeMinds は、個々の Web 訪問者に対して商品推奨とターゲットを絞った販売促進を行います。これは、共同フィルター操作および市場バスケット分析に基づく、Personalization サーバーです。

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものであり、本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品、プログラムまたはサービスの操作性の評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。IBM 製品、プログラムまたはサービスに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない機能的に同等のプログラムまたは製品を使用することができます。ただし、IBM によって明示的に指定されたものを除き、他社の製品と組み合わせた場合の動作の評価と検証はお客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権（特許出願中のものを含む。）を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権の許諾については、下記の宛先に書面にてご照会ください。

〒106-0032 東京都港区六本木 3 丁目 2-31

IBM World Trade Asia Corporation
Intellectual Property Law & Licensing

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

本書は定期的に見直され、必要な変更（たとえば、技術的に不適切な表現や誤植など）は、本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Canada Ltd.
Office of the Lab Director
8200 Warden Avenue
Markham, Ontario
L6G 1C7
Canada

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

本書はプランニング目的としてのみ記述されています。記述内容は製品が使用可能になる前に変更になる場合があります。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

この製品で使用されているクレジット・カードのイメージ、商標、商号は、そのクレジット・カードを利用して支払うことを、それら商標等の所有者によって許可された人のみが、使用することができます。

商標

以下は、IBM Corporation の商標です。

AIX	DB2	DB2 Extenders
DB2 Universal Database	HotMedia	IBM
	WebSphere	

Notes、および Lotus は、Lotus Development Corporation の商標です。

IIS、Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Pentium は、Intel Corporation の米国およびその他の国における商標です。

SET および SET ロゴは、SET Secure Electronic Transaction LLC の商標です。

HotJava、Java、JDK、JDBC およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

UNIX は、The Open Group がライセンスしている米国およびその他の国における登録商標です。

他の会社名、製品名およびサービス名などはそれぞれ各社の商標または登録商標です。

索引

日本語、数字、英字、特殊文字の順に配列されています。なお、濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

アンインストール

DB2 Universal Database 160

IBM HTTP Server 159

Payment Manager 157

WebSphere Application Server 158

WebSphere Commerce 157

インスタンス、WebSphere Commerce

作成、複数の Commerce インスタンスの 111

複数の開始 113

複数の作成 111

複数を作成するステップ 112

複数を作成するための前提条件 111

メモリー所要量、複数の作成のため 112

問題判別 168

IBM HTTP Server の考慮事項、複数作成について 112, 113

インスタンス、WebSphere Commerce

インスタンスの更新 147

インスタンス・ノード、構成マネージャ

59, 71

インストール

インストール前 11

前提条件ソフトウェア要件 12

前提条件となるハードウェア要件

11

その他の要件 12

知識、必要な 11

データベースの問題 165

データベースを作成できない 164

インストール (続き)

データベース・インスタンスの問題 165

問題判別用の WebSphere

Commerce ログ・ファイル 164

ロータス ノーツ 12

DB2 UDB フィックスパック 17

DB2 Universal Database 17

IBM HTTP Server 1.3.19.1 27

Payment Server 47

Web サーバーを始動できない 167

WebSphere Application Server 35

WebSphere Application Server の問題 165

WebSphere Commerce 5.4 45

WebSphere Commerce のインストールの問題 164

インストール前

仮想ホスト名を使用する複数インスタンスの 111

その他の要件 12

ソフトウェア要件 12

知識、必要な 11

ハードウェア要件 11

要件 11

ロータス ノーツ 12

Payment Manager 47, 48

Payment Manager のソフトウェア要件 47

インストール・パス (デフォルト) 4

オークション・ノード、構成マネージャ 66, 83

応答が遅い 168

[カ行]

開始

IBM HTTP Server 136

Payment Manager 137

Payment Manager Engine 138

開始 (続き)

Payment Manager ユーザー・インターフェース 139

WebSphere Commerce インスタンス 67

鍵管理ユーティリティ 109

鍵ファイル、実動のために受け取って設定する 109

鍵ファイル、実動のためにテストする 110

仮想ホスト名、前提条件 111

仮想ホスト名、複数インスタンスに使用 111

仮想ホスト名、複数インスタンスの開始 113

仮想ホスト名、複数インスタンスを作成するステップ 112

管理コンソール 4

管理用タスク

構成マネージャ・パスワードの変更 141

Payment Server のセットアップ 152

WebSphere Application Server へのポート・ホスト別名の追加 145

WebSphere Commerce インスタンスの更新 147

規則、このマニュアルで使用する 3
キャッシュ・ノード、構成マネージャでの 84

構成、構成マネージャでのストア・サービス・ノードの 84

構成作業

構成マネージャ・パスワードの変更 141

WebSphere Commerce のインスタンス 57

構成設定、変更 147

構成マネージャ

インスタンス・ノード 59, 71

構成マネージャー (続き)
インスタンス・プロパティ・ノード 68
オークション・ノード 66, 83
キャッシュ・ノード 84
構成設定の変更 147
コンポーネント・ノード 81
作成、インスタンスの 57
ストア・サービス・ノードの構成 84
セッション管理ノード 75
データベース・ノード 60, 68
トランスポート・ノード 85
パスワードの変更 141
メッセージング・ノード 65, 74
メンバー・サブシステム・ノード 73
ライセンス・ユーザー管理ノード 86
レジストリー・ノード 82
ログ・システム・ノード 65, 84
Commerce アクセラレーター・ノード 83
Payment Manager ノード 64, 72
Web サーバー・ノード 62, 70
WebSphere ノード 63, 69
構成マネージャーでのインスタンス・プロパティ・ノード 68
構成マネージャーでのコンポーネント・ノード 81
構成マネージャーのユーザー ID の要件 7
構成マネージャー・パスワードの変更 141

[サ行]

最新の変更事項 3
作成、複数の Commerce インスタンスの 111
サポートされる Web ブラウザー 5
実動鍵ファイル、現行ファイルとして設定 109
実動鍵ファイル、HTTP サーバー用に受け取る 109

実動鍵ファイル、HTTP サーバー用に作成 108
実動鍵ファイル、HTTP サーバー用にテストする 110
商品アドバイザー 5
ポート番号、使用される 6
情報
印刷可能な資料 171
概要、このマニュアルの 3
規則、このマニュアルで使用する 3
最新の変更事項 3
使用、WebSphere Commerce オンライン・ヘルプの 171
デフォルトのインストール・パス 4
Commerce の Web サイト 3
DB2 Universal Database のホーム・ページ 173
IBM HTTP Server のホーム・ページ 172
Payment Manager readme 48
Payment Manager のホーム・ページ 172
README 3
WebSphere Application Server のホーム・ページ 173
WebSphere Commerce 171
WebSphere Commerce のホーム・ページ 171
所定稼働環境 175
セキュアな実動鍵ファイル、HTTP サーバー用に受け取る 109
セキュアな実動鍵ファイル、HTTP サーバー用に現行ファイルとして設定 109
セキュアな実動鍵ファイル、HTTP サーバー用に作成 108, 109
セキュアな実動鍵ファイル、HTTP サーバー用にテストする 110
セキュアな実動鍵ファイルの受け取り 109
セキュアな実動鍵ファイルの作成 108
セキュアな実動鍵ファイルのテスト 110

セキュアな実動鍵ファイルを現行ファイルとして設定 109
セキュアな証明書の要求 109
セッション管理ノード、構成マネージャーでの 75
その他のインストール前提要件 12

[タ行]

データベース・ノード、構成マネージャー 60, 68
停止
IBM HTTP Server 136
Payment Manager 137, 139
Payment Manager Engine、WebSphere Application Server の使用 138
Payment Manager、StopIBMPayServer の使用 140
Payment Manager、WebSphere Application Server の使用 140
WebSphere Commerce インスタンス 67
デフォルトのインストール・パス 4
トラブルシューティング
構成マネージャー 164
データベースの問題 165
データベース・インスタンスの問題 165
データベース・ユーザーのログオン ID やパスワードが誤っている 166
JSP にアクセスできない 168
Web サーバー 167
WebSphere Application Server の問題 165
WebSphere Commerce のインストール 164
WebSphere Commerce の応答が遅い 168
WebSphere Commerce の問題 168
WebSphere Commerce ログ・ファイル 164

トランスポート・ノード、構成マネージャーでの 85

[ナ行]

認証局、SSL 証明書の 107, 109

[ハ行]

ハードコピー情報 171

複数の WebSphere Commerce インスタンス

仮想ホストの前提条件 111

仮想ホスト名の使用 111

仮想ホスト名を使用する開始 113

仮想ホストを使用して作成するステップ 112

作成 111

メモリー所要量 112

IBM HTTP Server の考慮事項 112, 113

プログラム仕様 175

ポート番号、WebSphere Commerce によって使用される 6

ポート・ホスト別名、WebSphere Application Server への追加 145

[マ行]

まえがき 3

マニュアルの概要 3

メッセージング・ノード、構成マネージャー 65, 74

メンバー・サブシステム・ノード、構成マネージャーでの 73

問題判別 163

[ヤ行]

ユーザー ID とパスワード

構成マネージャーのユーザー ID 7

ユーザー ID とパスワード (続き)

データベース・ユーザーのログイン ID やパスワードが誤っている 166

IBM HTTP Server のユーザー ID 8

Payment Manager 管理者の役割 9

要求、セキュアな証明書の要件 109

インスタンスの構成前
構成マネージャーのユーザー ID 7

その他の要件 12

ソフトウェア 12

知識 11

ハードウェア 11

ロータス ノーツ 12

IBM HTTP Server のユーザー ID 8

Payment Manager 管理者の役割 9

[ラ行]

ライセンス・ユーザー管理ノード、構成マネージャー 86

レジストリー・ノード、構成マネージャーでの 82

ロータス ノーツ 12

ログ・システム・ノード、構成マネージャー 65, 84

ログ・ファイル

ログ・システム・ノード、構成マネージャー 84

createdb.log 164

db2.log 166

populatedbni.log 164

populatedb.log 164

WASConfig.log 164

wcsconfig.log 164

wcs.log 164

WebSphere Commerce の問題判別の使用 163

A

Apache.exe 167

B

BankServACH cassette 5

Blaze Innovator Runtime 5

Blaze Rules Server 5

C

Catalog Manager 4

Commerce Accelerator 4

Commerce アクセラレーター・ノード、構成マネージャーでの 83

Commerce の Web サイト 3

createdb.log 164

CyberCash cassette 5

D

DB2 Universal Database

インスタンスの問題判別 165

インストール 17

インストール時にデータベースを作成できない 164

インストールの失敗 165

インストールのハング 165

エラー 106 165

開始と停止 137

サービスが開始しない 165

データベース・ノード、構成マネージャー 60

データベース・ユーザーのログイン ID やパスワードが誤っている 166

デフォルトのインストール・パスワード基準 19

ポート番号、使用される 6

ホーム・ページ 173

問題判別 165

Payment Manager の 47

DB2 インスタンス

問題判別 165

DB2 エクステンダー

デフォルトのインストール・パス
4

DNS (ドメイン・ネーム・サーバ
ー) 111

E

Equifax 認証局 107, 109

H

httpd.conf 167

httpd.conf ファイルの VirtualHost セ
クション 113

I

IBM Developer's Kit, Java
Technology Edition

デフォルトのインストール・パス
4

IBM HTTP Server

アンインストール 159

開始と停止 136

始動できない 167

デフォルトのインストール・パス
4

パスワード、設定 144

パスワード、変更 144

複数インスタンスに関する考慮事
項 112, 113

ポート番号、使用される 6

ホーム・ページ 172

ホーム・ページ、接続 151

SSL の使用可能化 107

IBM HTTP Server のユーザー ID の
要件 8

「IBM WS Admin Server」サービス
の障害 165

Internet Connection Secure
Server 109

Internet Explorer 5

IP アドレス、複数インスタンスの
111

J

JSP にアクセスできない 168

L

LDAP (Lightweight Directory Access
Protocol)

ポート番号、使用される 6

M

Macromedia LikeMinds クライアント
5

N

Netscape Communicator 5

Netscape Navigator 5

nslookup IP コマンド 112

O

Oracle

ポート番号、使用される 6

Payment Manager の 47

P

Payment Manager

アンインストール 157

インストール 47

インストール前 48

開始と停止 137

管理者の役割 9

セットアップ 152

前提条件、インストールの 47

ソフトウェア要件 47

停止 139

ノード、構成マネージャー 64,
72

ポート番号、使用される 6

ホーム・ページ 172

Payment Manager Engine の開始
138

Payment Manager の停止 140

Payment Manager (続き)

Payment Manager ユーザー・イン
ターフェースの開始 139

PaymentServlet.properties ファイル
51

PMRealm.jar ファイル 51

PSDefaultRealm 51

RealmClass プロパティ 51

StopIBMPayServer コマンド 140

WCSHostName プロパティ 51

wcspmrealm.jar ファイル 51

WCSRealm 51

WCSWebPath プロパティ 51

WebSphere Application Server を
使用する Payment Manager
Engine の停止 138

WebSphere Application Server を
使用する Payment Manager の停
止 140

Payment Manager 管理者の役割 9

Payment Manager ノード、構成マネ
ージャー 64, 72

Payment Manger Realm クラス 51

PaymentServlet.properties ファイル
51

PMRealm.jar ファイル 51

populatedbnl.log 164

populatedb.log 164

PSDefaultRealm 51

R

README ファイル 3

RealmClass プロパティ 51

S

「service specific error 10 (サービス
固有エラー 10)」メッセージ 165

SET 5

SSL (Secure Sockets Layer)

IBM HTTP Server で使用可能に
する

暗号化の概念 107

鍵管理ユーティリティ 109

SSL (Secure Sockets Layer) (続き)
IBM HTTP Server で使用可能にする (続き)
セキュアな実動鍵ファイルの受け取り 109
セキュアな実動鍵ファイルの作成 108
セキュアな実動鍵ファイルのテスト 110
セキュアな実動鍵ファイルを現行ファイルとして設定 109
セキュリティの概要 107
要求、セキュアな証明書の 109
IBM HTTP Server のための使用可能化 107
SSL の暗号化の概念 107
SSL のセキュリティの概要 107
StopIBMPayServer Payment Manager コマンド 140

V

VeriSign 認証局 109
Verisign 認証局 107
VisaNet cassette 5

W

WASConfig.log 164
wscnfig.log 164
WCSHostName プロパティ 51
wcpmrealm.jar ファイル 51
WCSRealm 51
WCSWebPath プロパティ 51
wsc.log 164
Web サーバー
問題判別 167
IBM HTTP Server 144
Web サーバー・ノード、構成マネージャー 62
Web サーバー・ノード、構成マネージャーでの 70
Web ブラウザー、サポートされる 5

WebSphere Application Server
アンインストール 158
インストール 35
管理コンソール、WebSphere Commerce インスタンスの開始と停止 67
デフォルトのインストール・パス 4
ポート番号、使用される 6
ポート・ホスト別名の追加 145
ホーム・ページ 173
メッセージング・ノード、構成マネージャー 65, 74
問題判別 165
Payment Manager の要件 47
Payment Manager をインストールするためにセキュリティを使用不可にする 48
「service specific error 10 (サービス固有エラー 10)」メッセージ 165
WebSphere ノード、構成マネージャー 63
WebSphere Commerce
アンインストール 157
応答が遅い 168
開始と停止 135
管理用タスク 145
組み込まれている製品 4
構成前 55
作成と更新、インスタンスの 57
使用、オンライン・ヘルプの 171
情報源 171
デフォルトのインストール・パス 4
入手方法、印刷可能なドキュメンテーションの 171
プログラム仕様と所定稼働環境 175
ポート番号、使用される 6
ホーム・ページ 171
問題判別 168
Web サーバーを始動できない 167

WebSphere Commerce Analyzer
オープン 150
パスワード、変更 143
WebSphere Commerce インスタンス
インスタンス・ノード、構成マネージャー 59, 71
オークション・ノード、構成マネージャー 66, 83
開始と停止 67
キャッシュ・ノード、構成マネージャーでの 84
更新 147
構成前 55
構成マネージャーでのインスタンス・プロパティ・ノード 68
構成マネージャーでのコンポーネント・ノード 81
構成マネージャーでのストア・サービス・ノードの構成 84
作成
仮想ホスト名を使用して複数
を 112
複数の開始 113
メモリー所要量 112
IBM HTTP Server の考慮事項 112, 113
作成ウィザード 59
作成と更新 57
セッション管理ノード、構成マネージャーでの 75
データベース・ノード、構成マネージャー 60, 68
トランスポート・ノード、構成マネージャーでの 85
メッセージング・ノード、構成マネージャー 65, 74
メンバー・サブシステム・ノード、構成マネージャーでの 73
ライセンス・ユーザー管理ノード、構成マネージャー 86
レジストリー・ノード、構成マネージャーでの 82
ログ・システム・ノード、構成マネージャー 65, 84

WebSphere Commerce インスタンス
(続き)

Commerce アクセラレーター・ノ
ード、構成マネージャーでの
83

Payment Manager ノード、構成マ
ネージャー 64, 72

Web サーバー・ノード、構成マ
ネージャー 62

Web サーバー・ノード、構成マ
ネージャーでの 70

WebSphere ノード、構成マネー
ジャー 63, 69

WebSphere ノード、構成マネー
ジャー 63, 69



Printed in Japan

日本アイ・ビー・エム株式会社

〒106-8711 東京都港区六本木3-2-12